

キ普通州法ノ第一章第二節第十三項「臣民及同盟國ニ對スル國家一切ノ權利義務ハ其ノ元首ノ一身ニ總合ス」トアルヲ引テ証ト爲スモ立法權ハ其ノ本体ト使行トテ區別シ難キモノナルカ故ニ此ヲ論立タス其ノ實ハ日耳義憲法ノ精神ヲ移シテ此ノ權ヲ君民ノ共有ニ歸シタルモノナルコト文法ニ於テ明ナリ(ラバント)。然ルニ本邦ニ在テハ斷然憲法ノ第五條ニ於テ「天皇ハ帝國議會ノ協贊ヲ以テ立法權ヲ行フ」ト書キ天皇ヲ以テ文ノ主格トセリ、是レ當ニ文法上ノ差違ノミナランヤ、又事實上ニ於テ重大ノ區別アリ。即チ議會ノ開閉集散ハ悉ク天皇ノ命令ニ出ツルノミナラス、其ノ協贊ヲ要スルハ法律ト成ルヘキ規程ノ趣旨ハ、ミニ止マリ、此ノ趣旨一定シタル上ニテ之ヲ以テ法律ト爲スヤ否ニ至リテハ一ニ天皇ノ裁可權ニ依ルモノトス、語ヲ換ヘテ言ヘハ議會ノ協贊ハ法律ノ内包ノミニ止マリ、之ニ法律ノ外形ヲ附スルト否トニ

及フコト無シ。蓋他ノ立憲諸國ニ於テモ此ノ關係ハ同一ナリトイヘ、憲法ノ明文ニ上述ノ差違アルヨリ必ス實際上ニ差違ヲ生スヘク、議會ヲ經過シタル法律案ハ必ス之ヲ裁可セサルヲ得サルノ勢他國ニ比シテ微弱ナラントス。其ノ他重大ノ差違アルコトハ左ノ二点ニ就テ之ヲ觀ル可シ。

(一)憲法ニ於テ法律ニ依ルヲ要セサル事件ニ就テハ帝國議會ノ協贊ヲ經スシテ規程ヲ發スルヲ得ル事。

(二)法律トシテ規程ス可キモノヲ臣民ノ權利財產ニ直接又ハ間接ノ關係アルモノニ止メタル事。

他ノ諸國ニ於テハ法律ヲ以テ最モ重大ノ地位ニ置キ凡ソ國家ノ事務ハ必ス法律ニ依リ又ハ法律ノ委任ヲ受ケテ之ヲ行ハサルヲ得サルモノトセリ、故ニ法律ノ未タ存セサル事項ニ付キ規程ノ必要ヲ見ルハ



假令ニ命令ヲ以テ之ヲ定メテ後ニ議會ノ認承ヲ經ルヲ要ス英吉利ノ如キ是レナリ且此ノ臨時命令ヲ發スルノ權ステモ法律ヲ以テ特ニ許サレタル場合ノミニ限ルモノ多シ埃太利ノ如キ是レナリ獨リ普魯西ニ於テ憲法ニ明文ナキモ實際ニ於テ法律補充ノ命令ヲ發シ學者ノ其ノ必要ヲ唱フルニ依リ辛シテ違憲ノ咎ヲ免ルヲ見ルノミ然ルニ本邦ニ於テハ前述ノ如ク憲法第九條アリテ法律ノ未ダ存セサル事件ニ關シ臣民ノ安寧ヲ保持シ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ト認ムル命令ヲ發シ又ハ發セシムルノ權ヲ公然天皇ニ屬セシメタリ是レ世界ノ孰レノ立憲國家ニ於テモ見サル所ニシテ本邦君權ノ著シク他邦ト異ナル所以ナリ。

次ニ法律ノ何タルニ就テハ帝國憲法ニ於テモ別ニ種類ニ依リ法律タルヘキモノト然ラサルモノトヲ區別スルコト無シトイヘ凡其ノ條項

ニ於テ特ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム又ハ法律ニ依リ云々ト稱スルモノハ必ス直接又ハ間接ニ臣民公私ノ權利財産ニ關係スルモノナリ。其ノ法律ヲ以テ兵役納税ノ義務ヲ定メ移轉住居言論著作印行集會結社ノ自由ヲ法律ノ範圍内ニ於テ許シ法律ニ依ルニ非ラスシテ逮捕禁監審問處罰住所侵入及搜索所有權及信書秘密ノ侵襲ヲ行フコト無キヲ保スルモノハ直接ニ關係スルモノナリ又其ノ間接ニ關係スルモノハ選舉法會計法ヲ立テ法律ヲ以テ臣民タルノ資格ヲ定メ戒嚴ノ要件及効力ヲ定メ司法及行政裁判所ノ構成ヲ定メ裁判官ノ懲戒規律ヲ定メ特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノヲ定メ會計檢査院ノ組織權限ヲ定ムル等ナリ。此等ノ場合ハ一トシテ臣民ノ國家ニ對シ又ハ他ノ一個人ニ對シテ義務ヲ完シ權利ヲ行フコトニ關係セサルナク其ノ他ノ事項ニ關シ法律ヲ以テ定メンコトヲ約スル場合ハ一モ無シ。



上文畧述スル所ヨリ推シテ之ヲ考フレハ帝國議會カ立法ニ參與スルノ權限ハ其ノ形式<sup>フカレム</sup>ヨリ之ヲ言ヘハ法律ヲ法律トスルニ在ルニ非スシテ其ノ條項ヲ決定スルニ在リ、而シテ其ノ實體<sup>マシテ</sup>ヨリ之ヲ言ヘハ臣民ノ權利財產ニ關係スルモノニ就キ臣民ノ意志ヲ代表スルニ止マリ、權利財產トイヘハ其ノ既得ニ屬スルモノヲ指スナレハ、未得ノ幸福利益ヲ増進スル爲ニ農商、逓信、教育、衛生ノ範圍ニ於テ規程スル所ハ議會ノ代表權人及ハサル所ニ在ルモノタルヲ知ル、但シ此等ノ範圍ニ在テモ天皇ノ特ニ協贊ヲ欲シ玉フ場合及其ノ實行ノ爲ニ經費ヲ要スル場合ハ格別ナリ。

次ニ行政權ニ對スル帝國議會ノ權限ヲ分拆センニ凡ソ各國ノ立法議會カ國家ノ行政ニ關シ人民ニ代テ其ノ意志ヲ有効ニスルコトヲ得ルノ途ニシテ諸國ノ國法ニ見エタルモノ四アリ、左ノ如シ、

(一)豫算議定ノ權

(二)質問及建議ノ權

(三)上奏及告訴ノ權

(四)議會ノ協贊ヲ經ルヲ要スル行政事件ヲ認承スルノ權

此ノ四中ニ於テ第一第二ノ權ハ憲法ニ依リ日本ノ帝國議會ニモ屬シ、第三第四ハ甚々微弱ナル体裁ニ於テ存ス左ノ如シ。

(一)豫算議定ノ權 曰抑々本邦ノ主義ハ政府ヲシテ法律ノ範圍内ニ於テ運動シテ其ノ條項ニ牴觸セサル限リハ獨立シテ命令處分スルノ權アラシムルニ在リ。然レモ政府ノ事業ハ多ク費用ヲ要シ、此ノ費用ハ人民ノ資産ヲ徵シテ以テ之ニ充テサルヲ得ス、故ニ人民ノ代表タル議會ヲシテ費用ノ点ヨリ政府ノ事業ヲ可否スルコトヲ得シムルハ豫算議定ノ權ヲ帝國議會ニ屬セシメタル所以ナリ。サレハ豫算ノ議定ハ



決シテ立法事業ニ非スシテ人民ノ意志ヲ代表シ以テ之ヲ行政事業ノ上ニ加フルノ一路ニ外ナラサルコト明ナリ、即チ豫算ハ法律ナリトスル獨乙ノ主義ハ日本ニ行ハレサルモノナルヲ知ル可シ。是ヲ以テ豫算ニ依リ憲法、法律又ハ法律ノ結果ヲ動かス可カラサル事ハ憲法義解ニモ之ヲ明言セリ。唯タ此ノ点ニ就キ疑問ノ世上ニ存スルハ憲法第六十七條ニ於テ憲法上ノ太權ニ基ツケル既定ノ歳出ト云フニ關ス。第十條ニ天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メトアリ、又第十條ニ常備兵額ヲ定ムトアリテ後ニ既定ト云フ故、是レ天皇カ豫算提出ノ前ニ於テ既定メ給ヒシ歳出ト云フ義ナルヘシトノ疑ヲ生シ、加フルニ獨乙ノ學者中ニモ元首ニ大權ヲ歸シナカラ費用ノ上ヨリ之ヲ制限スルハ恰モ大權ヲ歸セサルニ等シトスル論近コロ行ハル、ニ因リ、本邦ニ於テモ二三註釋者ヲシテ本條ノ解ヲ謬ラシメタリ、然リトイ

ヘテ、憲法義解ニ憲法上ノ大權ニ基クニ拘ラス新置及増置ノ歳出ハ仍議會ニ於テ議論ノ自由ヲ布スト言ヘルニテ立法者ノ意ハ既定ト云フニ依リ一旦ハ議會ノ協賛ヲ經タルモノニ指スニ在ルコト明白ナリ、若此ノ意味ニ解セサルハ歳出ノ大半ハ議會ノ容喙スル能ハサル所ト成ル可シ、政府ノ必要ト認ムル所ト民意ノ欲セサル所トノ權衡ヲ保タシカ爲ノ立憲制度ハ画餅ニ屬スヘキナリ。又同シ六十七條ニ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルヲ得ストアルニ依リ同條ニ所謂法律ノ結果ニ依リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ニ就キ廢除、減削ノ事ヲ議場ニ於テ發言スルサヘ不當ナリト説ク者アレト、是レ甚シキ謬論ナリ、唯タ六十七條ノ意ハ議會ニ於テ之ヲ否決スルモ政府ニ於テ同意セサル上ハ其ノ廢除減削ノ決議ハ無効ナリト云フニ過キス、之ヲ議スルハ固ヨリ議院ノ權内ニ在リ。



(二) 質問及建議ノ權 帝國憲法第四十條ニ「兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各其ノ意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得」トアリテ其ノ政府ノ行政事業ニ對スル意見モ亦其ノ他ノ事件ト云フ中ニ包含スルモノトス、而シテ議院法第五十條ニ「國務大臣ノ答辯ヲ得又ハ答辯ヲ得サル片ハ質問ノ事件ニ付議院ハ建議ノ動議ヲ爲スコトヲ得」トアルニテ先ツ質議シ、而シテ後ニ建議スルヲ順序トスルヲ知ル可シ。此ノ建議權ハ「採納ヲ得サルモノハ全會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得」トスルノ外其ノ旨趣範圍ニ付キ一ノ制限アラス然レモ是レ所謂片雙ノ權利ニシテ政府ニ於テ之ニ對スル採納ノ義務アラス、果シテ道理ニ合ヘルキハ政治上之ヲ採納セサルヲ得サルノ勢アルノミナリトス。

(三) 上奏及告訴ノ權 帝國憲法第四十九條ニ依リ兩議院ハ各天皇ニ奏スルノ權アリテ、此ノ權モ亦其ノ範圍ニ制限ナキ限ハ之ヲ政府ノ行政

ニ關シ使用スルコトヲ得ベシ、而シテ其ノ場合ハ先ツ意見ヲ政府ニ建議シテ採納セラレサル片ニ於テ多カルベキナリ。此ノ權モ亦片雙的ニシテ天皇ニ於テ必ス之ヲ聽納シ給フヘキ法律上ノ拘束ナキニモ拘ラス是レ政治上ヨリ甚々重大ナリトスル所以ノ者ハ他ナシ、本邦ノ議會ハ未タ大臣ノ過犯ニ就キ告訴ノ權ヲ有セス、上奏權ノ外ニ依テ以テ大臣ノ違法ノ命令處分ヲ糾正スルノ途ナケレハナリ。巴威里憲法第十章第六條、バーデン憲法第六十七條、サクセン王國憲法第四百十一條ハ大臣告訴ノ權ヲ兩院ノ一致ニ許シ普魯西憲法第六十一條、奧太利責任法第七條、ウルテンブルヒ憲法百九十七條ハ之ヲ各院ニ許シ、英吉利佛蘭西ハ之ヲ下院ニ許シタリ、而シテ本邦ノ憲法ノ此ノ權ヲ帝國議會ニ與ヘサルハ畢竟帝國議會ヲ理論ニ於テモ實際ニ於テモ獨立ノ立法機關ト看做サス、唯タ立法者タル天皇ヲ贊翼スル者ニ過キストスルニ



因ル。故ニ政府ノ所爲ニシテ若法律ノ意志ニ戻ラハ立法者タル天皇ニ於テ之ヲ責問スヘク、議會ハ唯タ責問ノ必要ニ注意ヲ促スニ止マリ、自ラ之ヲ行フノ權ナキモノトスルナリ。又獨逸ノ間ニ於テハ大臣ニ對スル告訴ヲ審判スル爲別ニ國務裁判所ヲ組織シ、或ハ大審院ヲシテ之ヲ兼行セシメ英佛ニ於テハ上院ニ審判ノ權ヲ與ヘタルモ本邦ニ於テハ之ニ對スル機關ナク唯ク樞密院アルノミ、而シテ同院ノ事務規程第三條ニ依ルニ、帝國議會ハ直接ニ大臣ニ係ル訴旨ヲ樞密院ニ提出スルコトヲ得ス、必ス上奏シテ諮問ヲ請ハサルヲ得ス。同院第六條ニ樞密院カ意見ヲ上奏スルコトヲ得ル事項中、憲法及憲法ニ屬スル法律ノ解釋ニ關シ及豫算其他會計上ノ疑義ニ關スル爭議トアリテ、憲法第五十六條ニモ「重要ノ國務ヲ審議ス」トアレハ同院多少裁判的ノ地位ニ立タサルニ非ス、然リトイヘモ法律ニ定メタル裁判所ニ非サルカ故ニ審

問處罰ノ權ハ之ヲ有セサルヤ明ナリ。

(四)行政事件認承ノ權 共和國ノ憲法ニハ特ニ議會ノ認承ヲ經ルニ非サレハ有効ナラサル行政事務ヲ多ク枚舉シ(例ヘハ合衆國憲法第一章第八節ノ一、二、三、四、五、及七ヨリ十六項迄)英國ニ於テモ國會ノ此ノ權力ノ範圍ハ甚タ大ナリ。普國憲法ニ見エタル場合ハ國境ノ變更(第二條)普王ニシテ外國ノ君主ヲ兼ル事(第五十五條)或ル類ノ條約ヲシテ有効ナラシムル事(第四十八條)兵力ヲ内地變亂ノ鎮定ニ利用スルコト(第九條)既ニ着手シタル裁判ヲ中止スル事(第四十九條)國債ヲ起シ、及國家ノ義務ト爲ルヘキ保證ヲ爲ス事(第百〇三條)ナリ、而シテ本邦ノ憲法ニ見エタルモノハ唯タ國債ヲ起ス事及國庫ノ負擔ト成ルベキ契約ヲ爲スコトノミニ止マルナリ。此ノ後或ハ特別ノ法律ヲ以テ議會ノ此ノ權ヲ擴張スルコト無シトセス、或ハ外國ヨリ歸化シタル者ヲ一定ノ年限内



ニ於テ官吏ニ登用セントスル場合ノ如キハ特ニ議會ノ認承ヲ必要トスルニ至ルモ知ル可カラス、然レモ今日ノ形勢ヨリ推セハ此等ノ事件ハ之ヲ議會ニ委任セスシテ樞密院ニ委任セントスルモノ、如シ何トナレハ其ノ官制第六條ノ五ニ「法律命令ニ依テ特ニ樞密院ノ諮問ヲ經ルヲ要スルキ」トアレハナリ。」

以上陳述スル所ニ依テ之ヲ觀レハ本邦ノ議會ノ行政ヲ監督スルノ權ハ極メテ微弱ナルモノニシテ、豫算ノ場合ヲ除ク外ハ法律上ノ制裁一モ無ク、唯タ政治上ヨリ輿論ノ力ニ依リ其ノ意志ヲ立ツルノ外無キモノ、如シ。然レモ此レニ付國法上注意ヲ要スル一点アリ、曰、本邦ノ主義ハ議會ノ行政監督權ノ微弱ナルヲ補フニ樞密院ヲ以テセントスルニ在ル事是レナリ。樞密院官制ヲ憲法ノ一部トスル例ハ獨リ巴威里リ於テ之ヲ見ルノミ、而シテ本邦ノ之ニ倣ヘルハ其意人民代表ノ議會

百五十二

百五十三

ヲシテ政府ヲ監督セシメス、天皇ノ顧問ヲ以テ之ヲ監督セシメントスルニ在ルコト明ナリ。サレハコソ外國ノ憲法ニ於テ議會ノ協賛ヲ要ストスル行政事件ノ多分ハ之ヲ樞密院ノ審議權ニ委任シタリ、即チ官制第六條ノ三ニ重要ナル勅令トアリ、四ニ列國交渉ノ條約、行政組織ノ計畫トアリ、五ニ前諸項ニ掲グルモノ、外行政又ハ會計上重要ノ事項ニ付特ニ勅令ヲ以テ諮問セラレタルトキ「トアルニテ之ヲ知ル可キナリ。」

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇

族華族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

別ニ貴族院令ノアル有ルヲ以テ此處ニ注解ヲ要セス。貴族院ニ列スル者モ一ノ帝國議會ノ議員タル上ハ臣民總體ノ代表タルヲ言フ、埃タサル中ニモ皇族ハ天皇ノ親近ナレハ自ラ天皇ノ統治權ノ重キニ左袒



スヘク、華族モ其ノ今日待遇ヲ被リテ一般臣民ノ上ニ居ルヲ得ル所  
以ノ者ハ國家ノ權力今日ノ如ク全キニ因ル者ナレハ第一ニ皇室ノ威  
權ヲ補成シ、第二ニ社會在來ノ秩序ヲ守持セントスヘシ。其ノ勅任議  
員ニ至リテハ(甲)國家ニ勳勞アル者、(乙)學識アル者、(丙)各府縣ニ於テ土地  
或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者一人ツ、ヨリ、成立シ(甲)  
ハ經驗ヲ以テ國家方向ノ中正ヲ主張シ、(乙)ハ學理ニ依テ守ルヘキヲ守  
リ、改ムヘキヲ改メンコトヲ論シ、(丙)ハ地方富有ノ民庶ヲ代表シテ多クノ  
土地ヲ領有シ或ハ盛大ナル工業商業ニ従事スル者ノ利益トスル所ヲ  
代表セン、即チ(甲)(乙)(丙)ハ皇族華族ト尋常臣民ノ代表者トノ中間ニ立テ  
院ノ調和ヲ計ルモノタルヘキナリ。

第三十五條 衆議院ハ撰舉法ノ定ムル所ニ依リ公撰  
セラレタル議員ヲ以テ組織ス。

別ニ撰舉法ノ有ルアルヲ以テ註解スルノ要ヲ見ス。

第三十六條 何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ  
得ス。

帝國議會ヲ二院ニ分テ、又其ノ議員撰舉ノ法ノ如キモ之ヲ別ニスルハ  
上述ノ如ク臣民各個ト國家一体トノ異ナル見解ヨリシテ國務ヲ議セ  
シメンカ爲ナレハ、其ノ人ヲ異ニセサレハ二院ニ分ツノ詮無キ事是レ  
第一ノ理由ナリ。又三千六百萬ノ多キヲ代表スルニ兩院全シテ五  
百餘人ノ議員ヲ以テスルコトナレハ一人タリモ多キヲ宜シトシ、一人ニ  
シテ二席ヲ兼ヌルハ公平ニ非サルコト第二ノ理由ナリ。兩院ハ同時ニ  
開會シ、假令議題ヲ異ニスルモ議事ノ刻限ヲ同フスルコト多クレハ一時  
ニシテ双方ノ議事ニ興リ難キ事是レ第三ノ道理ナリ。  
以上三條ハ帝國議會ノ組織ヲ確定シ此ノ下四條ハ其ノ立法ニ關スル



權利ヲ確定ス。

第三十七條 凡テ法律ハ國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス

協賛ノ義ハ既ニ前ニ述ヘタリ、即チ立法權ハ天皇ニ屬シ、其ノ條項ヲ定ムルニ當リ議決ニ參贊スルナリ、

本條ニ於テ特ニ講究ヲ要スルモノハ法律ト云フ字ノ意味ナリ。何チ法律ト云フヤニ至リテハ學者中大ニ議論ノ存スル所ニシテ、本邦ニ於テモ將來多少議論ノ種ト成ルヘシ。

各國ノ實際ニ於テ立法機關ノ正式運用ヲ經テ發布セラル、者ハ必スシモ亦法律タルヘキ性質ノモノニ非ス、例ヘハ會計豫算ノ如キ是レナリ、又之ニ反シテ元來ハ法律タルヘキモノモ時トシテ法律ノ正式ヲ備ヘサルコトアリ例ヘハ欽定憲法及習慣法ノ如シ、是ヲ以テ獨乙ノ學者ハ形式上ノ法律ト實體上ノ法律トヲ區別シテ、形式上法律タルモノハ

必スシモ皆眞ニ法律タルヘキ性質ノモノニ非スト言ヘリ。

サテ本條ノ所謂法律ハ形式上ノ法律ヲ云フニ非サルヘシ、何トナレハ法律上ヨリ言ヘハ議會ノ協賛ヲ經テ天皇ノ裁可シタル者ヲ以テ法律トスルナレハ、其議會ノ協賛ヲ要スト云フハ重複ノ言ナレハナリ。サレハ實體上ヨリハ何ヲ以テ法律ト法律ニ非サルモノトノ區別トスルヤト云フニ、各國憲法ノ此ノ点ニ付キ探ル所ニ二種アリ、其ノ一ハ凡ソ法律トシテ定ムヘキ者ヲ概括シタル一條ヲ憲法中ニ設クル是レナリ、例ヘハ巴威里憲法第七章第二條ニ「國會ノ意見ヲ問ヒ承諾ヲ經ルニ非サレハ人身ノ自由若ハ臣民ノ所有ニ關スル一般ノ新法ヲ發布シ、又ハ其ノ現ニ存スルモノヲ變更シ、若ハ公ケニ説明シ、又ハ廢止スルコトヲ得ス」トアルカ如シ、本邦ノ憲法ニ此ノ如キ條ナシ、普國憲法ニ於テモ亦然リ、即チ我カ憲法及普國憲法ハ第二ノ主義ヲ取り、法律トシテ規定セ



ナルモノヲ枚擧セハ左ノ如シ。

(第一)普國法即チ、民法、民事訴訟法、刑法、治罪法、其ノ他總ヘテ普通裁判ノ標準ト成ル者ハ憲法第五十七條ニ依リ法律トシテ制定修正セラレ  
ンコトヲ要ス。

(第二)憲法及其ノ他ノ法律ニ於テ特ニ法律ヲ以テ規定スヘシト約シタル者、即チ、戒嚴ノ要件及効力(第十四條)、日本臣民タルノ要件(第十八條)、兵役ノ義務(第廿條)、納稅ノ義務(第廿一條及第六十二條)、公益ノ必要ナル財産處分(第廿七條)、裁判所ノ構成(第五十七條)、裁判及懲戒ノ條規(第五十八條)、特別裁判所ノ管轄(第六十條)、行政裁判所ノ裁判(第六十一條)、會計檢査院ノ組織及權限(七十二條)等モ亦同シ

(第三)憲法改正(第七十三條)モ亦然リ。

(第四)既ニ法律トシテ規定シタル者ノ變更廢止(第九條)モ亦然リ。

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及各々法律案ヲ提出スルユトヲ得。

法律案ハ通例政府ニ於テ之ヲ作リ兩院ニ提出スルヲ正順トスレト又衆議院若クハ貴族院ノ一方ニ於テ舊法ヲ改正シ或ハ新法ヲ制定スルノ必要ヲ見ハ則チ自ラ案ヲ作テ提出スルコトヲ云フト云フ義ナリ。即チ發議權ハ行政立法ノ双方ニ在ルナリ。然レモ此ノ一條ニハ三ノ制限アリ。第一ニ第六十五條ニ依リ豫算ハ必ス政府ニ於テ之ヲ作リテ帝國議會ニ提出シ、且ツ衆議院ニ提出スルコトナリ、故ニ豫算ヲ一ノ法律ト見レハ其ノ發議權ハ政府ノ專有ト看テ可ナリ。

第二ニ第七十三條ニ依リ憲法ノ條項ヲ改正スルノ案ニ限リテハ政府



モ帝國議會モ之ヲ發スルヲ得ス、必ス元首タル天皇ノ勅命ニ出ツヘキモノトス。

第三ニ此ノ第三十八條ト會計ニ關スル第六十七條トノ關係ヲ知ルテ緊要ナリ。此ノ一條ニ依レハ兩議院ノ一方ノ發議ニ係ル法律案ニシテ兩院ノ可決スル所ト爲リ、天皇之ヲ裁可シ玉フキハ法律ト爲ルヲ得ルヲ尋常ノ手續ナリ然ルニ第六十七條ノ場合ニ屬スル法案ニ限リ其ノ提出ハ必ス政府ヨリセサル可カラズ、若シ兩議院ノ中ヨリ提出シテ兩議院ヲ經過スルモ政府之ニ同意セサレハ天皇ノ裁可ヲ仰クヲ候タスシテ其ノ案消滅スヘキナリ。即チ此ノ條ニ於テ兩議院ノ各一方ニ許ス所ノ發議權ハ後ノ第六十七條ニ於テ實際ニ制限ヲ附シタルモノト知ルヘシ。

百六十

四十九

チ兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決ス下讀ニ切リテ其ノ下ヲ別句ト見ルコトヲ得ヘク、或ハ又兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決スルヲ得及各法律案ヲ提出スルヲ得ト云フ意ニ讀ムヲ得ヘシ。其ノ孰レヲ取ルヤニ依リテ大ナル差違ヲ生ス、即チ下ノコトヲ得ト云フヲ上ノ議決シニモ係ルモノトセハ、議決セシト欲セハ即チ議決スルコトヲ得ト云フ義ニ成リテ、之ヲ欲セサレハ即チ謝絶スルコトヲ得ト云フ裏面ノ意ヲ生スルナリ。且ツ後ニ第七十一條ニ至リ帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス云々トアルヨリ益々法律案ヲ議決セサラント欲セハ則チ議決セサルノ權アルモノナリヤトノ疑ヲ生セシム。然レモ此ノ一條ハ前ニ註スル如ク、主トシテ法律案提出ノ權ハ政府ニ在リ、又兩議院ノ各一方コモ在ルヲ明示スル爲ニ設クルモノニシテ、畢竟政府ノ案ヲ議決スヘキナルカ自分モ案ヲ提出スルヲ得ト云フ意ニ解



セサル可カラス。假令憲法起草者ノ意ヲシテ如何ナラシムルモ、余輩ハ議事章程上ヨリ此ノ推斷ヲ爲スノ必要ヲ見ルナリ、何トナレハ、兩院ニシテ議決セサランニ決スルモ、之ヲ決センニハ必ス先ツ議決ス、キヤ否ヤヲ議決セサルヲ得サレハナリ。凡ソ貴族院又ハ衆議院ノ所爲ハ院議ヲ經テ始メテ定マルモノナリ、全院ノ議事ニ付セサルコトハ之ヲ其ノ院ノ所爲ト見做ス可カラス、故ニ此ノ如キ法律案ハ議決ヲ好マスト決定スルモ必ス議事ノ手續ヲ經サル可カラス、果シテ此ノ手續ヲ爲セハ是レ既ニ其ノ法律案ノ帝國議會ノ意見ニ合ハサルヲ議決シタルモノニシテ廢案ト何ノ異ナル所カ有ラン。廢案ノ權ヲ有シナカラ議決セサルノ要ナシ、從テ其ノ權無キモノトス、第七十一條ノ意義ハ其ノ條ニ至リテ之ヲ述フヘシ。

政府ノ字ハ既ニ第八條ニモ之ヲ用ヰタレト、其ノ帝國議會トノ關係ハ

此ノ條ニ至リ最モ明ニ見エタレハ、此處ニ之ヲ解説スヘシ。俗ニ政府ト言ヘハ概シテ國政ノ出ツル處ヲ指スト雖、國權學上ニ於テハ國家ノ法律ヲ制定スル所ヲ立法部ト謂ヒ、之ヲ二分シテ天皇及帝國議會トシ、又法律ヲ執行スル所ヲ行政部ト曰ヒ、之ヲ三分シテ天皇、政府及自治体トスルナリ。サレハ天皇ト政府トノ區別ハ何ニ依テ立ツルヤト云ヘハ、法律ヲ遵奉スルノ責任ノアルト無キトニ依テ之ヲ立ツルナリ。行政ハ元來天皇ノ事業ナリ、然レモ天皇ニシテ元首ノ地位ヲ全フシ玉ハンニ不可侵無責任タラサルヲ得サルヲ以テ、其ノ行政事業ニ於テ法律ニ對シテ責任ノ存スル者ハ之ヲ舉ケテ政府ニ委スルナリ、而シテ政府ノ機關ハ國務省即チ內閣以下ノ官廳ナリ、但シ宮內省ヲ除ク其ノ官職ハ各省大臣次官局長以下ノ諸僚ナリ。自治体ハ政府ノ事業ノ一部分ヲ擔當シ政府ノ監督ヲ受ケテ之ニ對シ其ノ責ニ任スル者ナリ。



本條ニ就キ存スル一ノ問題ハ政府ヨリ議案ヲ提出スルハ先ツ之ヲ一院ニ提出シ、其ノ議決ヲ經タルノ後他ノ一院ニ提出スルヲ要スル乎、或ハ同時ニ兩院ヘ提出スルコトヲ得ル乎ト云フニ在リ、而シテ豫算ニ付テハ既ニ一定ノ順序アリト雖、其ノ他ノ法案ニ對シテハ同時提出ヲ禁スルノ明文アラズ、故ニ政治上ノ理由ヨリシテ先ツ一ヲ經由シタルノ後他ニ及フヲ常則トスルモ是レ法理上ノ必要ニ非サルナリ(ホルンハック普國憲法ニ付キ此ノ論アリ)。

第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス。

貴族院又ハ衆議院ノ一方ニ於テ既ニ否決シタル者ハ三ヶ月ノ會期但延長スルコトアリ中ニ再ヒ提出スルヲ得スト云フ義ナリ、是レ亦前條ノ兩議院ノ法律案提出權ヲ制限シ、且ツ政府ノ提出權ヲモ制限スルモノナリ。

蓋シ一旦破棄シタル者ヲ更ニ説テ改メテ經過セシムルニ至ルハ必ス歲月ヲ要スルヲ以テ、其ノ機ノ未タ熟セサルニ再度提出スルハ徒ニ時日ヲ費スモノナレハナリ。或ハ天皇ノ裁可シ玉ハサリシ法律案ニ付キ明文無キ故ニ之ヲ再度提出スルノ可否疑ハシト説ク者アレト、是ノ如キ場合ハ起ラサルナリ、何トナレハ天皇ハ別ニ不裁可ヲ宣告シ玉フニ非ス又兩議院ニ決答ヲ促スノ權モ無ケレハ到底議院法第三十二條ニ依リ次會期ニ至ルマテ裁可不裁可ヲ知ルノ路無キ道理ナレハナリ。

一旦提出シテ否決シタル法律案ノ文字條項ヲ少シク變更シ別案トシテ再ヒ提出シタル場合ハ如何ト云フニ、是レ法律上ハ差支無キコトニシテ其ノ餘ハ事實ノ問題ト成レリ、則チ之ヲ同案ト看做スヘキヤ否ヤハ其ノ都度之ヲ議場ニ問ヒ討議セスシテ直ニ取決スヘシ。



第四十條 兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各其ノ意見ヲ政府ニ建議スルヲ得但シ其ノ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルヲ得ス。

是レ亦議院立法ノ一ニシテ尋常ノ發議權ヲ以テ其ノ院ノ意見ヲ表白シ難キ場合ニ關スル者ナリ。

法律……ニ付トハ舊法ヲ改正シ新法ヲ制定スルノ必要ヲ見ルモ(一)其ノ材料トスヘキ事實ノ調査ハ議院ニ於テ爲シ難キカ爲ニ政府ニ依頼シテ立案セシムル場合、及(二)立案セント欲スルモ第六十七條ニ該當スルカ故ニ政府ヲシテ其ノ案ヲ發セシメテ後之ヲ議スルヲ得策トスル場合ヲ云フナリ。

其ノ他ノ事件ニ付トハ天皇ノ大權ナル故法律ヲ以テ定ムル限ニ非サル事件ニ關スル建議ナリ、即チ外交上ノ政畧、軍政上ノ政畧、及行政大体

ノ精神ニ關シテ意見アル場合ヲ云フ。行政大体ノ精神トハ行政ノ主義ヲ云ヒ(例ヘハ強兵主義、重農主義、漸進主義ノ類ニテ)其ノ重モナル者ハ常ニ財政ヨリ起レリ、即チ國家ニハ種々ノ事業同時ニ存スルニモ拘ラス、之ヲ起スノ資力ニハ際限アルヲ以テ、其ノ中ノ就モ重大ナル者ヲ先ニシ輕少ナル者ヲ後ニセサル可カラス、而シテ其ノ兵備ヲ以テ先トスルカ、教育ヲ以テ先トスルカ、商政ヲ以テ先トスルカ、等ハ是レ即チ政府大体方向ノ在ル所ニシテ、是レ等ハ法律ニ關スルトニ非サルヲ以テ建議トシテ其ノ意見ヲ政府ニ露示スルノ權利ヲ議院ニ與フルモノナリ。

又第九條ニ依リ法律ノ範圍内ニ於テ發シタル命令ニ關シテモ政府ノ獨立權内ナレハ敢テ左右スルヲ得スト雖、亦其ノ意見ヲ建議スルヲ得ヘシ。



建議ノ手續ハ議院令第十一章ニ見エタリ、即チ同令五十一條五十二條ニ依レハ建議ハ文書ヲ以テ政府ニ呈出シ、上奏ハ文書ヲ以テ天皇ニ奉呈スルナリ。

其ノ採納ヲ得サル者云々ノ理由ハ第三十九條ニ於テ否決シタル法律案ニ關スル理由ニ同シ。

建議ノ事ニ關スル一ノ問題ハ他無シ議院ヨリ建議シタルニ政府之ヲ採納シ、案ヲ作テ議院ニ下シタルニ、議院ハ其ノ案ヲ否決スルノ權アリ、ヤ否ヤト云フ是レナリ。我カ促シタル案コレ否決スルノ理無キニ似タレトモ、其ノ案ノ模樣ニ依リテハ他ニ廢案ノ理由ヲ生セサルヲ保セス、故ニ否決ノ權ハ十分ニ在ルモノトス。

第一ニ中途ニシテ議員ヲ改選シタル場合ニ此ノ權アルハ勿論ナリ。

第二ニ尙ホ同シ議員ノ立法期內タリトモ建議ノトキ具陳シタル件々ニ一點タリモ違フ所アレハ則

五十七

チ否決ノ權アリ。第三ニ中途ニシテ其ノ事件ニ關スル法律上ノ關係ニ變化ヲ生シタル場合ニ於テモ否決ノ權アリ。

第四十一條 帝國議會ハ每年之ヲ召集ス。

此ノ議會ハ年々繼續スル所以ノ者ハ安寧保持ノ爲ニスル司法、事務及行政警察ノ範圍又ハ幸福増進ノ爲ニスル文部、農商、遞信事務ノ範圍ニ於テ年々繼事業ヲ改メ或ハ新事業ヲ起スノ必要ヲ生スレハナリ。且ツ憲法第六十四條ニ依リ毎年豫算ヲ以テ國家ノ歲出歲入ヲ帝國議會ニ付セサルヲ得サルカ故ニ此ノ點ヨリ見ルモ年々開會ハ必要ナリ。

若シ毎年ノ召集ヲ怠ルコトアリトセンカ、是レ憲法違背ノ處分タル疑無シ、而シテ元首ハ無責任ナレハ國務大臣、就中召集ノ事務ヲ司ル內務大臣ニ於テ此ノ責ニ任セサルヲ得ス、然レモ之ヲ責問スルノ法律ハ未タ存セス且責問者タルヘキ帝國議會ハ此ノ場合ニ於テ存立セス、又自ラ



來集スルノ權利ナキヲ以テ、實際召集セラレサルヲ責ムルノ道ハアラサルナリ。

普魯西憲法ノ第七十六條ニハ「兩院ハ通例毎年十一月ノ初メヨリ翌年正月ノ半ニ至ルマテノ間ニ國王之ヲ召集スヘシトアリ、埃太利憲法第二十條ニハ「國會ハ毎年一度皇帝之ヲ召集ス、但シナルヘク冬期ニ於テスヘシトアル等ノ如ク開會ノ時期ヲ訓示的ニ示シタルモノ多シ、然レモ本邦ニ於テ時期ヲ定メサルモノハ生活ノ狀況ニ於テ人民ノ爲ニ最モ便利トスル期節ヲ定知シ難キニ因ル、蓋シ外國ニ於テハ夏月中人多ク地方ニ散亂シ冬月ニ於テ都會ニ來集ス、故ニ國會ノ召集モ多ク冬月ニ於テス、而シテ本邦交際ノ狀況モ亦漸ク此ノ如クナラントスト雖モ茲ニ外國ト異ナル事一アリ即チ新年休業ノ永キ是レナリ、外國ニ於テハ十二月廿五日及一月一日ノ外休日トセサルナリ。憲法義解ニハ冬期ニ

開會スルヲ例トスルハ豫算ヲ議スルノ便ヲ取ルモノナリト言ヘリ。本條ニ於テハ國難ノ秋ニ際シテハ議會ヲ召集セサルコトアルヘントノ餘地ヲ殘サスト雖、後ニ第七十條ニ至リ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキ云云トアルニテ本條ハ唯タ平常ノ例規ヲ示スノミ内外戰亂ノ急ニ際シテハ例外ノ處分ヲ爲スコトアルヲ知ル可シ、然レモ憲法カ本條ニ於テ正面ニ此ノ例外ヲ認メサル限リハ事實上眞ニ止ミ難キ場合ニ非サレハ召集ヲ怠ルコトヲ得サルヤ明白ナリ。

第四十二條 帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要ナル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ。

此ノ條ハ別ニ理由アルニ非ス、各國ノ經驗ニ照シテ大抵十分ト認メタ



ル所ニ依リ三ヶ月ト定メタルモノナリ。  
 外國ノ憲法ニハ往々此ノ箇條ニ制限アリ例ヘハ曰延會ハ兩院ノ承諾ヲ以テスヘシ、曰三十日ヲ越ユヘカラス、曰同年ニ兩度延會スルコトヲ得ス等ナリ、而シテ議院法ニ十五日以内ニ於テトアルノ外我カ憲法ニ制限ナキ以上ハ此等ノ点ハ全ク天皇ノ獨裁ニ依ルコト知ルヘシ、而シテ議會自ラ其ノ會期ヲ延長スルコトヲ得サルナリ。  
 議會閉會シタルトキハ其ノ會期ノ事務ハ終テ告クルモノトシ、特別ノ規程アル場合ノ外議事ノ既ニ議決シタルト未タ議決セサルトヲ問ハス次會ノ會期ニ繼續スルコトナシ、(憲法義解)。  
 勅命ト勅令トノ差違ヲ此ノ序ニ説クヲ便利トス、勅令ハ法律同様ニ國家一般ニ對シテ永久ノ事件ノ爲ニ發シ、臣民ニ服從ノ義務ヲ負ハスルモノナリ、勅命ハ帝國議會、樞密院、各省、陸海軍ノ如キ國家ニ部ノ機關ニ

對シテ一時ノ事件ノ爲ニ發シ、其ノ機關ヲ指揮スルモノナリ。  
 議會閉會ヲ告ケタルトキハ其ノ議會ノ選任ニ係ル委員モ亦之ト共ニ解任セラル、ヲ原則トス、而シテ議院法第廿五條ニ依リ政府ヨリ要求ヲ受ケ或ハ政府ノ同意ヲ經タルトキハ閉會ノ間トイヘハ委員ヲシテ議案ノ審査ヲ繼續セシムルコトヲ得ヘシ。

第四十三條 臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ

外臨時會ヲ召集スヘシ。

臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル。

臨時會ヲ召集スルトセサルト、及如何ナル場合ニ於テハ召集シ、或ハ召集セサルヲ決スルハ全ク天皇ノ勅定ニ依ルヘク臣民ハ之ヲ促スノ權利ナシ、然レモ開戰等ノ時ニ際シ財政上ニ法律外ノ處分ヲ要スル場合ニ限り制限アルコトハ後ニ第七十條ニ於テ之ヲ述フヘシ。



臨時會ハ只タ其ノ時期ヲ常會ト異ニスルノミ、其ノ他ノ一切ノ事ハ常會ノ例ニ準ス。

是ヲ以テ兩議院ノ發議權ニ至リテモ常會ニ於ケルト同一ナレハ、元首カ臨時會ヲ召集スルノ目的トシタル議題ノ外ニ於テ自ラ法律案ヲ提出シ、或ハ政府ノ提出案ヲ得テ議題ト爲スコトヲ得ヘシ。

此ノ場合ニ於ケル閉會、停會、及衆議院解散ノ權モ元首之ヲ有ス。

第四十四條 帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及停會

ハ兩院同時ニ之ヲ行フヘシ。

衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ停會セララルヘシ。

此ノ一條ハ貴族院又ハ衆議院ノ一方ノミヲ開會シテ他ヲ開會セザル

コトヲ制止ス、其ノ閉會停會ニ於ケルモ亦然リ(即チ第三十八條ニ照應

ス)。

總ヘテ帝國議會ノ立法權ハ兩議院ノ間ニ之ヲ共有スル者ニシテ各一方獨立シテ有スルモノニ非サルヲ明白ナリ、建議權、上奏權ニ至リテハ即チ然ラス。

衆議院解散ヲ命セラル、モ貴族院ハ多分世襲官又ハ終身官ニシテ解散ト云フコト無キカ故ニ只タ之ヲ停會スルナリ。

第四十五條 衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅令

ヲ以テ新ニ議員ヲ撰舉セシメ解散ノ日ヨリ五箇月以

内ニ之ヲ召集スヘシ。

此ノ條ヲ設クル所以ノ者ハ衆議院ノ解散ハ決シテ衆議院ノ國家立法ノ機關タル所以ヲ廢止シタルニ非ス、只タ當時在院ノ議員ノミヲ變更センカ爲ニスルコトナルヲ以テ、斯ク期日ヲ定メテ衆議院ノ官能ヲ繼續



セントヲ確定スル者ナリ。サレハ新議員ヲ解散ノ日ヨリ五箇月以内ニ召集セサルトキハ即チ憲法違反ニシテ恰モ第四十一條ヲ犯シテ毎年ノ召集ヲ怠リタル場合ニ同シ。

現ニ開會中ナル衆議院ヲ解散スルハ尋常ノ手續ナルカ、其ノ閉會ニ際シテ次年ノ開會ニ至ルヲ竣タスシテ解散ヲ命スルトヲ得ルヤ否ヤト云フニ至リテハ一ノ問題ナルカ、ツラップル、ヘルト、ボッツル、モール、ロエンチラバンド等ノ學者ハ口ヲ揃ヘテ此ノ權アリト言ヘリ、又普國ニ於テ千八百六十三年ニ開會中解散ヲ命セタルトキモ敢テ故障ナカリキ。

新ニ召集シタル衆議院ノ開會期限ニ關シ正條無キヲ以テ推セハ通常會期ノ如ク矢張り三ヶ月ナリ、又其ノ任期ニ至リテモ正條無キ以上ハ(衆議院議員撰擧法第六十六條ニ依リ)改撰ノ時ヨリ向ヌ四年ナリト知ルヘシ。

第四十六條 兩議院ハ各、其ノ總議員三分ノ一以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開キ決議ヲ爲スコトヲ得ス。

此ノ條以下第四十八條マテハ兩院ノ憲法上正當ナル議事ト看做スヘキ者ニ必要ナル條件ナリ。

○總議員トハ貴族院令及撰擧法ニ定メタル議員ノ總數ヲ云フ

出席トハ只タ議院ニ出頭スルノミヲ言フニ非ス、議事ヲ開キ或ハ決ヲ取ルニ臨テ現ニ議席ニ在ルヲ云フ。正シク三分ノ一ナルモ既ニ議事ヲ開キ決議ヲ爲スニ足レリ。但シ議事ヲ一旦開キタル後ニ至リ休息等ノ爲ニ退席スル者アリテ爲ニ三分ノ一ヲ下ルコトアリモ議事ヲ中止スルニ及ハス決議ヲ爲スコトヲ得サルノミナリ、當日退院ヲ届出ル者多クシテ此ニ至レハ則チ中止スヘシ。第七十三條ニ至リ本條ニ制限アリ。



本條ヲ以テ推スニ召集ニ應スル議員其ノ總數ノ三分ノ一ニ及ハサルトキハ當年ノ議會ハ成立セサルナリ。

第四十七條 兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル。

過半數ハ當時出席員ノ過半數ナリ。第七十三條ニ依リ憲法改正ノ場合ハ三分ノ二以上ノ多數ヲ要ス。白耳義普魯西ニ於テハ同數ナレハ必ス否決ト看做スノ法ヲ取り、議長ニ獨決ノ自由ヲ與ヘス。阿蘭陀ニ於テハ議決ヲ後會ニ譲リ後會ニ於テモ尙ホ可不同意同數ナレハ終ニ否決ト看做セリ。

第四十八條 兩議員ノ會議ハ公會ス但シ政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲スコトヲ得。

議院法第七章ニ於テ別ニ秘密會ノ規定ヲ掲ケタリ。議長又ハ議員十

人ノ發議ニヨリ議院之ヲ可決シタルトキ會議ヲ秘密ニスルハ普魯西其ノ他ノ國ニ於テモ大同小異ナリ。政府ノ要求アルトキモ決議ニ付セサル可カラス但政府ヲシテ秘密ヲ要求スルノ權アラシムルハ只タ獨乙聯邦ノオルデンブルグニ於テ其ノ制アルノミ。

憲法義解ニ於テ豫見シタル所ニ依レハ議事ノ秘密ヲ要スルモノハ外交事件、人事及職員委員ノ撰舉、或ル財政、兵政、或ル治安ニ係ル行政法ノ如キ是レナリ。

本條ノ係ル所ハ本會議ノミニ止マリ、委員會ハ之ヲ公開スルノ限リニ非ス、是ヲ以テ本會議ノ中途ニシテ議事ヲ一轉シテ全院調査會トスルトキハ則チ傍聽人ヲシテ退席セシムルコトヲ要ス。

公開ト云フ中ニハ傍聽ヲ許スコトノ外又議事筆記ノ刊行ヲ許スコトヲ含蓄シ、誠實ニ議事ノ全部ヲ刊行スル者ハ一切責問ノ外ニ措クヲ原



則トスト雖刊行ハ往々ニシテ其ノ事實ヲ過ルモノナリ故ニ此ノ点ニ  
關シテハ別ニ刊行條例ノ規程ヲ待テ事ヲ定ム可キモノトス。

### 第四十九條 兩議院ハ各天皇ニ上奏スルヲ得。

此ノ條ハ帝國議會カ國家獨立ノ一機關トシテ政府ヲ經ス直ニ天皇ニ  
對シ其ノ感覺意見ヲ表白スルノ路ヲ定ムルモノニシテ其ノ重ナル場  
合ニ有リ、曰ク儀式上ノ上奏曰ク國務上ノ上奏ナリ。儀式上ノ上奏ハ  
朝廷ノ祝儀喪禮ニ關シ帝國議會ノ感覺ヲ述フルモノニシテ國會ノ式  
上ニ於ケル天皇ノ勅語ニ對スル答辭新帝即位ノ式ニ於ケル勅語ニ對  
スル答辭ノ如キモ此ノ類ニ屬ス。國務上ノ上奏ハ政府ノ行政權ニ對  
シテ兩議院ノ意志ヲ立テンカ爲ニ行フ所ナリ。即チ憲法ニ依レハ外  
交事務及兵政ハ天皇ノ大權ニ屬シ法律ヲ以テ羈束スルノ限ニ非ズ、然  
レモ若此ノ二事ニ關シテモ議會ニ於テ意見アルトキハ則チ先ツ建議

六十八

六十九

ニ採納セラレザレハ則チ上奏スルコトヲ得ベシ。又其ノ他ノ事件ニ  
關シテハ帝國議會ハ其ノ協贊シテ法律ト爲リタル規程ノ必ス行ハレ  
ンコトヲ求ムルノ權利アリ、是ヲ以テ若政府ノ命令處分ニシテ法律ノ明  
文ニ違背シ或ハ立法全体ノ精神ニ違背スト見ルトキハ、兩議院ハ各、其  
ノ立法權ヲ保護センカ爲ニ先ツ國務大臣ニ質問シ、國務大臣答辯ヲ爲  
サス、或ハ之ヲ爲スモ以テ満足トセサルトキハ建議ヲ爲スコトヲ得ルハ  
勿論ナレド、到底政府ハ違法ノ所爲ヲ爲シタルモノナリト認メ、或ハ行  
政ノ精神ニ就キ帝國議會ハ現在ノ政府ト大ニ取ル所ヲ異ニスルカ故  
ニ之ト兩立スルヲ得スト認ムルハ則チ上奏シテ天皇ノ親裁ヲ仰ク  
コトヲ得ルナリ。此ニ至レハ其ノ結果ハ或ハ議院ノ解散ヲ招クモ知ル  
可カラス、是ヲ以テ成ル可ク建議ヲ爲シテ議院ノ意見ヲ立テンコトヲ試  
ムヘク、其ノ到底効無キヲ見テ事ノ極メテ重大ナル場合ニ於テノミ上



奏シテ親裁ヲ乞フヘキナリ。天皇ハ立法行政ノ上ニ立テ兩者ヲ統括シ玉フカ故ニ双方意見ヲ異ニシタルトキハ之ヲ判斷シ玉フモノナリ。而シテ天下ノ輿論ノ大ニ國務ニ影響スルモ亦此ノ場合ニ在リトス、蓋シ國法學上ニ於テ輿論トハ平生主義ヲ異ニスル諸ノ黨派マテモ悉ク意見ヲ一ニシテ主張スル所ヲ云フナリ。○兩議院ハ各トアル以上ハ其ノ一方ニ於テ他ノ一方ノ同意ヲ竣タスシテ上奏スルコトヲ得ルナリ。

第五十條 兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クルコトヲ得。

請願ノ事ハ第三十條ニ注釋シタリ、而シテ請願書受領ノ手續ハ別ニ議院令第十三章ヲ以テ規程シタレハ此ニ注釋セス。從來人民ノ建白ヲ受クルノ權ハ元老院ニ於テ之ヲ有シタル故之ヲ新規ノ制度ト爲ス可

七十一

カラス。蓋シ政務ノ實地ニ就テ多ク經驗ヲ有スル者ハ政府ナレハ法律案ハ政府ニ於テ之ヲ起草スルヲ順當トス第三十八條ニ於テ帝國議會ニモ發議權ヲ與ヘタル所以ノ者ハ臣民ヨリ受クル所ノ請願ニ依テ新法制定舊法改正ノ端ヲ開クノ必要ヲ見ルコトアレハナリ。

第五十一條 兩議院ハ此ノ憲法及議院法ニ掲クルモノ、外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得。

此ノ憲法ノ外ニ議院法ニハ第一章帝國議會ノ召集成立及國會第二章議長書記官及經費第三章議長副議長及議員歲費第四章委員第五章會議第六章停會閉會第七章秘密會議第八章豫算案ノ議定第九章國務大臣及政府委員第十章質問第十一章上奏及建議第十二章議院關係第十三章請願第十四章議院ト人民及官廳地方議會トノ關係第十五章退職



及議員資格ノ異議、第十六章請假辭職及補闕、第十七章紀律及警察、第十八章懲罰ヲ定メタルト、此ノ外ニ於テ定ム可キ甚タ多シ例ハ議員最初ノ集會議院ノ成立、議員ノ席割、部員ノ割附、開會ノ手續、書記官局、議院會計、委員規則、議事日程、讀會規則、議事錄、連記錄、兩院協議會則、請願取扱規則、議員資格審査、請假辭職規則、議院警察規則、懲罰細則ノ類ナリ、其ノ幾分ハ左院ノ時ヨリコノカタ元老院ニ於テ漸次制定シタル規則モ自ラ少ナカラス、皆ナ以テ他日ノ材料トス可シ、就中議事規則ニ至リテハ議院法ニ載スル所ノ外尙ホ綿密ナルモノヲ要スヘシ。此等ヲ決定スルハ貴族院又ハ衆議院ノ自由ニ任シ、敢テ天皇ノ裁可、政府ノ承諾及他ノ一議院ノ同意ヲ經ンコトヲ要セス。各國トモニ兩議院ノ間多少規則ノ差アリ。

○内部ハ整理トアルニ注意スヘシ即チ議院ノ本條ニ依リ自ラ制定ス

ル所ハ其ノ部内ニ於テ拘束ノ効力ヲ有スルモ一般人民ニ對シテハ權利義務ノ規程ト成ルコト無シ、即チ是レ國家統治權ノ一部ニハ非サルカ故ニ政府ノ命令ト同視ス可キモノニ非サルナリ。(ラバント)

次ニ注目スヘキハ議院ニ於テ一旦制定シタル所ハ必スシモ永久ニ行ハルヘキニ非ス、議員ヲ改撰スル毎ニ之ヲ改正スルモ不可ナキノミナラス、改撰ニ至ラサル前トイヘテ多數ノ改正ヲ主張スルニ至ルトキハ則チ何時ニテモ改正セラルヘキモノナル事是レナリ。

第五十二條 兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意見及表決ニ付院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ、但シ議員自ラ其ノ言論ヲ演說刊行筆記又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依リ處分セララルヘシ。



此ノ一條及次ノ一條ハ兩議院ノ議員ヲ保護シテ其ノ職務ヲ完フスル  
コトヲ得シムル爲ニ設ケタルモノナリ。

○發言シタル意見トハ議會ニ於テ討議ニ際シ述ヘタル意見ナリ。

○表決ハ決議ニ際シ問題ヲ賛成シタリヤ否ヤチ云フ。

○院外ニ於テ責ヲ負フコト無シトハ第一ニ兩議院ノ外ナル裁判所ニ  
ニ於テ議場ノ演說又ハ表決ノ爲ニ糾彈セラル、コト無ク、第二ニ其ノ  
属スル所ノ党會ノ決議ニ束縛セラル、コト無キヲ云ヒ、第三ニ自分ヲ  
撰舉シタル人民ノ意見ノ爲ニ束縛セラル、コト無キヲ云フ、而シテ本條  
ノ直接ニ關係スル所ハ第一ノミニシテ第二第三ニ及ハス何トナレハ  
党會及撰舉人ノ任託如何ハ國法ノ敢テ問フ所ニ非サレハナリ然レモ  
其ノ効力ハ間接ニ此等ニモ及フヘシ、何トナレハ党會若ハ撰舉人ヨリ  
其ノ意ヲ代表セザリシ議員ニ對シ違約ノ廉ヲ以テ訟ヲ起シタルトキ

本條ハ必ス其ノ判決上ニ影響ヲ及ホスヘケレハナリ、是レ總シテ立法  
部ノ獨立ヲ全フスルノ必要ヨリ來タルモノナレト、其ノ議院ノ内ニ在  
テハ言論ニ制限ナシト云フニ非ス、議院法第十七章ニ從ヒ紀律及警察  
ノ下ニ立タサルヲ得サルナリ。

本條及次條ノ規程ハ英國ノ舊例ヨリ來タルモノニシテ英國ニ於テハ  
之ヲ議員ノ一身上ニ属スルノ特權ト看做セリ、然レモ歐洲大陸ノ諸國  
ニ於テハ之ヲ以テ一身上ノ特權トハ看做サス、刑法治罪法中ニ属スヘ  
キノ條項ニシテ政治上及國法上特ニ重大ナルカ爲ニ之ヲ憲法ニ移シ  
タルモノナリトセリ、而シテ本邦ノ探ル所モ亦後ノ主義タルヲ知ルヘ  
シ。凡ソ特權ハ主觀ノ權利ナリ、即チ本人ノ爲ニ存スルニ因リ本人ニ  
於テ之ヲ擲棄シ或ハ讓與セント欲スレハ何時ニテモ然スルコトヲ得  
ヘク、之ヲシテ有効ナラシムルト否トモ全ク本人ノ意ニ隨フモノナリ、



然ルニ本條及次條ノ權利ニ至リテハ本人ノ之ヲ欲スルト否トニ拘ラ  
ス常ニ有効ナルヲ恰モ訴訟法治罪法ヲ以テ認ムル所ノ權利ノ然ルカ  
如シ且本人ハ之ヲ擲棄シ讓與スルコトヲ得サルナリ故ニ之ヲ議員ノ  
一身上ニ屬スルモノナリト云フコトヲ得ス是レ議院ヲシテ其ノ職ヲ  
盡クスノ途ニ障礙ナカラシメントスルヨリ起ル客觀ノ法規ニシテ議  
員ノ言行ニ對シ刑事訴訟ノ起リタルトキ法廷ニ於テ判決ノ標準ト爲  
ルヘキモノナリ。

普魯西ニ於テモ憲法第八十四條ニ本條ト同文アリテ之ニ就キ裁判上  
甚タ面白キ疑問ヲ生シタルコトアレハ茲ニ錄スヘシ。本條ニ意見ト  
アルノ字義ハ何ノ点マテ及フヤト云フノ問題ニ付キ普魯國上等裁判所  
ハ千八百五十三年十二月十二日ノ刑事聯合部會並ニ千八百六十五年  
一月十一日ノ第二部會ニ於テ之ヲ最モ廣汎ナル意義ニ解シテ議員カ

其ノ職務上ヨリ議院内ニ於テ爲シタル一切ノ言論ヲ問罪ノ外ニ措ク  
ヘキニ決シタリ。然ルニ同裁判所千八百六十六年一月廿九日ノ刑事  
聯合部會ニ於テ爲シタル決議ハ意見ト云フヲ狹キ意味ニ解シテ議員  
カ議場ニ於テ其ノ職務上ヨリ爲スノ言論タリトモ其ノ人身上ノ誹毀  
ニ涉ルモノハ之ヲ意見ト謂フヲ得サレハ被害者ノ告訴ヲ待テ之ヲ處  
罪スヘキニ決シ其ノ誹毀ニ出テサル不敬ノ語ハ之ヲ不問ニ措クニ決  
シ爾來此ノ解釋ヲ改メス千八百六十七年二月十八日及六月廿六日ノ  
兩度ニ於テモ之ニ從ヒ判決ヲ爲シタリ。蓋シ各裁判ハ其ノ判決ノ爲  
ニ適用スヘキ法律ノ解釋ニ就キ全權ヲ有シ議會トイヘモ之ヲ制スル  
ノ權ナキコト言フ俟タズ且普魯西國會ノ下院其レ自ラモ會テ千八百  
五十五年ヨリ翌年ニ涉レル會期中ニ議題ニ關スル意見ヨリモ多クノ  
事即チ非毀ヲ包含スル發言ニ就テハ問罪ヲ免レ難シトノ見解ヲ取リタリ。



然ルニ千八百六十六年一月上等院ニ於テ上述ノ決議ヲ爲スニ當リテ當時ノ衆議院ノ多數ハ翌二月ノ十日ノ決議ヲ以テ右ノ解釋ニ基ク上等院ノ審判判決ハ悉ク無効ナリト宣告シ、以テ裁判所ノ獨立ニ關シ重大ナル憲法違反ノ發動ヲ爲シタリ。

其ノ後帝國刑法ヲ制定スルニ當リ本條ヲ刑法ニ移シテ各邦ノ爲ニ有効ナラシムルト同時ニ意見ノ字ニ代フルニ發言ノ字ヲ以テシタルニ依リ右ノ疑問ハ自ラ消滅シタリ。

第五十三條 兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内乱外患ニ關ル罪ヲ除ク外會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セラル、コト無シ。

此ノ一條モ前條同様ニ其ノ意トスル所ハ帝國議會ノ議員タル者ニ特別ノ保護ヲ與フルニ在ルニ非スシテ一般ニ行政權ニ對シ立法權ノ獨

立ヲ全フセントスルニ出ツルモノナリ、而シテ實ハ治罪法ノ一條タルヘキ者ヲ此ニ舉ケタルナリ、蓋シ司法上若クハ警察上ヨリシテ隨意ニ議員ヲ捕縛スルコトヲ得ルトキハ、或ル議員ニシテ政府ノ意ニ適セサル議論ヲ吐クトキハ、嫌疑ニ托シテ其ノ人ヲ捕縛シ以テ其議會ニ列スルヲ妨クルヲ得ヘキニ因ル。

○現行犯罪ヲ除クハ右ノ如ク政府ノ策略ニ出ツルノ捕縛ニ非サルヲ明白ナルヲ以テ敢テ障止セサルナリ。

○内乱外患ニ關ル罪ニ關シテ猶豫セサル所以ノモノハ若シ猶豫セハ管ニ立法權ノ全カラサルノミナラス、國家全体ヲシテ危地ニ陥ラシムルニ至ルモ知ル可カラサレハナリ。

○會期中トアルニ就キ憲法義解ハ召集ノ後閉會ノ前ト言ヘリ、然レトモ召集ノ日ヨリ開會ノ日マテハ幾日ヲ存スヘク、此ノ間ハ議會未タ成



立セサルカ故ニ其ノ承諾ヲ經ンコト固ヨリ難シ、サレハ實際ハラハン  
ドノ説ニ從ヒ開會ハ後、閉會ノ前ト見ル可キニ似タリ。停會ハ之ヲ會  
期中ニ算入スルヲ以テ尙ホ本條ノ適用スル所ナリ。

○其ノ院ノ承諾 以上二種ノ場合ニ於テハ先ツ逮捕シテ而シテ後ニ  
議院ニ通知スヘシ其ノ外ノ場合ニ於テハ先ツ議院ニ通牒シ其承諾ヲ  
經テ後逮捕スヘシ。此ノ諾否ハ之ヲ議決ニ附スルヤ將々議長ニ其ノ  
權ヲ委任スルヤハ議院ノ自ラ定ムル所ニ依ル。孰レノ場合ニ於テモ  
官廳又ハ一個人カ故意ヲ以テ議事ノ安全獨立ヲ障ケントスルノ目的  
ニ出テサルコト明白ナルトキハ必ス之ヲ承諾スヘシ、而シテ裁判上ヨ  
リ逮捕ノ當否如何ハ議會ノ敢テ關スル所ニ非ス、議會ノ獨立ヲ障クル  
ノ爲ニスルニ非サル以上ハ假令無罪ナルコト明瞭ナル場合ニ於テモ  
議會ハ之ヲ理由トシテ逮捕ヲ拒ムノ權ナシ、但シ諾否ニハ理由ヲ附セ

サルヲ以テ假令正當ノ理由ニ依ラスシテ承諾ヲ拒ムコトアリトモ之  
ヲ制スルノ法規ナシ然レモ普國國會ノ如キハ其ノ記録ニ就テ之ヲ見  
ルニ曾テ正鵠ヲ誤リタルコトナシト云フ。

本條ハ豫審ノ爲ニスル逮捕ニ關シ刑ノ執行ノ爲ニスルモノニ關セス、  
是ヲ以テ若確定判決ノ結果トシテ捕縛ヲ要スル場合アレハ議院ノ承  
諾ヲ要セス、但タ撰擧法ニ依リ有罪ノ判決ヲ受ケタル者ハ被撰權ナキ  
ニ依リ此ノ如キ場合ハ事實ニ於テ容易ニ起ラサルノミ。

**第五十四條 國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ各  
議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得。**

此ノ一條ハ政府ト帝國議會トノ相互ノ權利ヲ確定スルモノナリ。第  
一ニ國務大臣ハ法律ニ對シ責任ヲ有セサルヲ得サルカ故ニ之ヲ修正  
議定スルノ前ニ十分其ノ意見ヲ議院ニ述ヘサルヲ得サルヲ勿論ナリ。



政府委員トハ國務大臣ニ代テ議院ニ出頭シテ政府ノ意見ヲ辯護スルモノナリ、即チ各省次官、法制局參事官、又ハ各省參事官、書記官ヲ以テ之ニ充ツルナルヘシ。第二ニ各議院モ無謀ニ修正シ可決シテハ裁可ヲ經サルノ恐レアルヲ以テ十分ニ政府ノ意見ヲ聽クノ權利ナカル可カラサルヲ勿論ナリ。サレト果シテ説明スルトセサルト、及其ノ幾分ヲ説明スヘキトヲ決スルハ國務大臣ノ自由ニ在リ。

國務大臣及政府委員ハ議員ノ資格ヲ以テ議場ニ臨ム者ニ非サルカ故ニ議長ノ意見又ハ議院ノ決議ヲ以テ懲罰規則ヲ之ニ及ホスゴヲ得ス、不當ノ所爲アラハ天皇ニ上奏スルゴヲ得ルノミ(ツアハリヤ、シユルチエノ所説)。然レモ議事ヲ整頓スルハ議長ノ權内ナルヲ以テ、大臣ノ發言中ト雖モ議事整頓ノ爲ニ紀律ニ注意センゴヲ勸告スルノ權アリ。但シ如何ナル場合ニ於テモ發言ヲ禁スルゴヲ得ス、之ヲ禁スルトキハ本

五十

條ニ違背ス。(此ノ點ニ付千八百三十三年普魯西衆議院ニ於テ起リタル問題ノ巨細、コエンチニ見エタリ)。

五十一

#### 第四章 國務大臣及樞密顧問

第五十五條 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任

ス  
凡テ法律敕令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

○國務各大臣ト言ヘハ内閣總理大臣及各省大臣ヲ指シ宮内大臣ヲ指サス、而シテ其ノ職分ニ至テハ行政法上及憲法上ヨリシテ定マルモノナリ。行政法上ヨリ言ヘハ内閣總理大臣ハ内閣ノ直轄ニ屬スル行政事務ヲ總理シ且各省行政ノ統一ヲ保チ各省大臣ハ各其ノ負擔ノ事務ヲ統理シ以テ天皇ヲ輔弼ス。國法上ヨリ言ヘハ大臣ハ國家ノ他ノ機



憲法の  
如何を見  
識無  
字

關ニ對シテ其ノ正鵠ヲ誤マラサルノ責ニ任スヘキモノナリ。  
 ○輔弼スト云フニ就テモ國法上一定ノ原則アリ即チ國務各大臣ハ政  
 府一部ノ主宰トシテ元首ノ下ニ立チ法律勅令ニ依リ特ニ委任セラレ  
 タル場合ニ於テノ外ハ元首ノ指揮ニ從フヘキモノナリ。然レモ元首  
 ノ指揮スル所若憲法法律ニ違反スルトキハ大臣ニ於テ之ニ從フノ義  
 務ナシ、何トナレハ憲法ハ憲法ニ依リ統治權ヲ行フ者チ元首ト見做シ、  
 之ニ違反スル者ハ假令其ノ一身上ヨリスレハ天皇ナルモ國法上ヨリ  
 スレハ元首ニ非サルナリ。又元首ノ命スル所ニシテ憲法ニハ違反セ  
 サルモ尙ホ大臣ニ於テ之ヲ不可トシ責任ヲ以テ之ヲ實行シ難シト信  
 スル場合及其ノ責任ヲ以テ行政ヲ統理スルニ必要ナリト信スル處ヲ  
 奏請スルモ元首ノ之ヲ裁可セサル場合ニ於テハ大臣ハ辭職ノ自由ヲ  
 有ス。本邦ニ於テ天皇ノ裁可ヲ要スルモノト大臣ノ專決ニ屬セシム

五十二

ルモノトノ區域判然セサルモ普魯西ニ於テハ千八百十年十月廿七日  
 ノ勅令ヲ以テ勅裁ヲ要スル場合ヲ列舉シ、巴威里ニ於テハ一旦勅令ト  
 シタルモノハ必ス勅令ヲ以テ規定スヘシトセリ。  
 其ノ他國務大臣カ天皇ヲ輔弼シテ其ノ行政權ヲ行フノ事務ハ左ノ六  
 トス

- (一) 法律ノ委任スル場合及其ノ委任ナキモ未タ法律ノ存セス且憲法ニ  
 依リ必スシモ法律ヲ以テ規定セン事ヲ要セサル場合ニ於テ國家ノ  
 安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スルニ必要ナル命令ヲ發ス  
 ルコト。
- (二) 法律ヲ執行スル爲ニ必要ナル命令ヲ發スルコト。
- (三) 所屬ノ官廳及吏員ニ向テ職制ヲ發スルコト。
- (四) 所屬ノ官廳ニ向テ其ノ專決處分スルコトヲ許サ、ル場合ニ於テ法



律命令ヲ執行スルニ必要ナル訓令ヲ發スルコト。

(五) 其ノ管轄内ニ於テ起ル行政訴訟願ニシテ特別ノ規程ニ依リ司法裁判所又ハ其ノ他ノ合議体ノ職權ニ屬セサルモノニ關シ裁決ヲ下ス。

(六) 所屬ノ官廳及吏員ヲ監督シテ之ニ對シ懲戒ヲ行フコト。  
二名以上ノ國務大臣ノ管轄ニ屬スル事件ニ付テハ其ノ一致ヲ要シ若一致セサルトキハ或ハ大臣會議ノ多數ニ決シ或ハ元首ノ裁斷スル所ニ依ル。

○ 其ノ責ニ任スト云フニ就テハ既ニ第五條ノ解釋ニ於テ其ノ法理ヲ述ヘタレハ此ニハ其ノ主類及手續ヲ述ヘントス。國法學者ノ大臣責任ヲ論スル者之ヲ區別シ普通法上及公法上ノ責任トス、其ノ普通法上ノ責任トハ賄賂、反逆等ヲ云フモノニシテ刑事ノ範圍ニ屬シ憲法ノ特ニ關スル所ニ非ス。次ニ公法上ノ責任ハ更ニ之ヲ廣義ト狹義トニ區

五十四

別ス、即チ狹義ノ責任トハ大臣ノ職權上ノ所爲ニシテ憲法法律ノ正條ニ違反シタル場合ヲ云ヒ、廣義ノ責任中ニハ此ノ外又行政ノ方針ヲ過マリタル場合ヲモ包含セシメントス。然レモ行政方針ノ得失ニ至リテハ固ヨリ一定ノ標準ナキヲ以テ其ノ成跡ハ一ニ時勢ノ歸スル所ニ任スヘシ、夫ノ豫算否決及信任投票ノ制ノ如キハ一定ノ法規ヲ以テ制スルコトヲ得ストイヘモ違憲違法ノ所爲ニ至リテハ現ニ憲法第四條及第九條ノアルカ爲ニ立憲國家ノ原則トシテ之ヲ不問ニ附スルヲ得ス必ス一定ノ手續ヲ定メテ之ヲ處理セサル可カラズ。其ノ各國ニ於テ定ムル所ノ手續ハ憲法義解ニモ大畧ヲ載セ、講師カ別ニ政治學講究會ノ爲ニ講述スル所ニ其ノ詳細ヲ述ヘタレハ同會ノ講義錄ニ就テ之ヲ見ルヘシ。本邦ニ於テハ責任ノ手續ニ付キ憲法ハ全ク規程ヲ載セス、唯々第五十六條ニ言フ所ノ樞密院官制ニ於テ諮詢ニ依リ憲法上及



會計上ノ爭議ヲ審理スルノ職權ヲ同院ニ屬セシメタルヲ見ルノミ。然リ而シテ憲法義解ハ大臣ハ君主ニ代リ其ノ責ニ任スルモノニ非スシテ君主ニ對シ直接ニ責任ヲ負ヒ、人民ニ對シ間接ニ責任ヲ負フモノナリト辨シ、又其ノ手續ニ關シテモ君主ヲ中心トシ唯之ヲ任スル者能之ヲ黜クヘシ、大臣ヲ任シ、又之ヲ黜ク、又之ヲ懲罰スル者人主ニ非スシテ孰カ敢テ之ニ預ラム乎、大臣ハ責ヲ裁判スルモノハ君主ニシテ人民ニ非サルナリト論シタリ、是レ形式ノ上ニ於テハ誠ニ當然ノ論ナリト雖果シテ責任ナル事ノ國法上ノ本義ニ合ヘルヤ否ヤニ至リテハ未タ容易ニ是認ス可カラサルモノアリ。抑モ立憲國家ノ編成ニ於テ別ニ大臣ノ職任上ニ責任ノ制ヲ立テントヲ要スルモノハ君主ノ地位ヲ全クセンカ爲ナリ、然ルニ君主ヲシテ大臣責任ノ處分ヲ司ラシムルハ是レ君主ヲシテ大臣責任ノ處分ヲ正當ニスルハ責ニ任セシムルモノナ

リ、何トナレハ憲法ハ違憲違法ノ政務ヲ許サス、而シテ君主ハ憲法ノ條規ニ依リ其ノ統治ノ權ヲ行フ可キモノナレハナリ。法理ノ歸有スル所既ニ此ノ如シ、而シテ其ノ事實上ノ結果ハ則チ如何ト云フニ大臣ニ於テ或ハ違法ノ命令ヲ發シ或ハ憲法ノ擔保スル臣民ノ權利自由ヲ犯シ或ハ議會ト相容レサル所アリテ其ノ年々ノ召集ヲ怠リタル等ノ事アル片尙ホ其ノ大臣ヲ咎メサルトキハ人民ハ終ニ元首ノ違憲ヲ論スルニ至ルヘシ、是レ豈ニ願フヘキ事ナランヤ、是レ豈ニ責任ノ制ヲ立ツルノ本意ナランヤ、即チ裁判ノ事ハ別ハ機關ニ委任シ、且其ノ裁決ニ應シテ處置ノ出ツル所ヲモ豫メ一定シオキテ、唯タ名ハミ、君主ニ對シ責ニ任シ、君主ノ權ニ依リテ黜ケラル、モノト爲スニ如カス。蓋シ樞密院ハ果シ此ノ如キ機關タルニ堪フヘキヤ否ヤハ今日ニ豫言スルヲ得ストイヘル要スルニ該院ハ至高諮詢ノ府タルニ止マリ裁判權ヲ有セ



ス、從テ其ノ議決ヲ行フノ權力ナシ、唯タ君主ノ採擇ヲ俟テ始メテ行ハル、モノトス、故ニ同院現行ノ官制アルノミニテハ上文言フ所ノ責任ノ責ヲ君主ニ負ハシムルノ難ヲ避ルコトヲ得サルヘキナリ。

○大臣ノ副署ハ其ノ責任ノ歸スル所ヲ明ニスルモノニシテ其ノ法律ニ副署スルハ以テ憲法ニ違背セサルノ責及其ノ執行ノ責ニ任スルヲ明ニシ、其ノ命令及其ノ他總ヘテ元首カ國權上ヨリ表白スル所ニ副署スルハ其ノ憲法法律ニ背セサルノ責ニ任センカ爲ナリ。然レモ天皇カ大元帥ノ資格ヲ以テ憲法第十一條ニ依リ發スル所ノ命令ハ一種特別ノ者ニシテ責任大臣ノ副署ヲ要セス、是レ各國ノ成例ニ依ルモノニシテ法章ノ正條ニ依ルニ非ス。

官吏ノ任免モ命令ノ一種ナレハ副署ヲ要シ、唯タ大臣交迭ノ場合ニ於テノミ將ニ免セラレントスル大臣ヲシテ自己ニ代ルヘキ大臣ノ叙任

五十九

ニ副署セシムルハ不便ナレハ新任大臣ヲシテ自己ノ叙任ニ副署セシムヘシト云フ説アレト(ツォブル、ゲルベル等)又舊大臣ヲシテ自ラ副署セシムヘシト云フノ論モ甚タ強シ(デカルク、マイエル、ロエンチ、ザイデル、サルウエイ)叙勳モ亦君主カ國家ノ權力ヲ以テ爲ス所ナレハ大臣ノ副署ヲ要スヘキ理ナリ(スタンゲル)。

通例ハ單獨大臣即チ一省長官ノ副署ヲ以テ足レリトシ、政府全体ノ責任ヲ以テ行フ事ノミニ、就キ大臣總數ノ連署ヲ要ス。前ノ場合ニ於テハ其ノ事務ヲ掌司スル一省ノ大臣ニ於テ副署シ、事務ノ管轄ニ省以上ニ亘ルハ二省以上ノ長官連署ス。

副署ハ責任ノ歸スル所ヲ示スト同時ニ又其ノ公文ノ眞偽ヲ判別スル所以ノモノナリ、即チ法令ノ原文ニハ元首ノ自筆ヲ以テ記名シ其ノ下ニ大臣ノ自筆ヲ以テ記名セサル可カラス。副署ヲ缺キ或ハ自筆ノ証



書ニ非サル原本ニ基ク公文ハ効力ヲ有セス、從テ有司之ヲ發布シ執行  
スルヲ得ス、普國憲法第四十四條、索撒憲法第四十三條、バーデン憲法第  
六十七條皆同シ、又巴威里千八百四十八年六月四日法律第五條ニ依レ  
ハ副署ナキ法令ヲ執行シタル官吏ハ職權濫用ノ罪ニ問ハル。

第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依  
リ天皇ノ諮問ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

樞密顧問ハ立法部ニ屬セス、行政部ニ隸セス中立シテ元首ノ詢謀ヲ受  
クルモノトス、即チ一般國法上ニ於テ此ノ如キ機關ヲ必要トスル所以  
ノ者ハスタインノ立論ニ基キ之ヲ國家學中ニ詳述シタレハ今畧シ此  
處ニハ特ニ本邦ノ國法ニ基キ其ノ必要ナル所以ヲ示サントス、即チ左  
ノ如シ。

(一)立法ニモ行政ニモ關セス、國家全体ノ体制ニ關スル設計ヲ定ムルハ

之ヲ一局部ノ職權内ニ置クヲ得ス、之ヲ樞密院ノ如キ至高ノ合議体ノ  
決議ニ付スルヲ要ス。例ヘハ行政部ヲシテ果シテ幾分ノ權力アラシ  
ムヘキヤハ國家設計ニ係ル事ニシテ行政部自ラ之ヲ決ス可カラス、又  
立法部ヲシテ決セシムヘキニ非ス、其ノ立法部ノ權限ニ於ケルモ亦然  
リ、議會ヲシテ自ラ之ヲ決セシム可カラス、又行政部ヲシテ之ヲ決セシ  
ムルニ於テモ同ク權衡ヲ失スルノ恐レアリ、故ニ之ヲ樞密院ノ如キ中  
間獨立ノ機關ノ議決ニ付セサルヲ得ス。例ヘハ憲法及憲法附屬ノ法  
律命令ノ如キハ一局部ノ職權外ナルヲ以テ之ヲ樞密院ノ議決ニ付ス  
ルノミナラス之ニ關シ爭議ノ起ルニ於テモ審定ハ一ニ同院ノ職掌タ  
ルヘキモノトス。

(二)行政部ノ範圍内ニ於テモ樞密院ノ必要ナキニ非ス、即チ本邦行政ノ  
事業ハ必スシモ法律ニ依ルニ非ス、第一ニ兵戰ノ事、第二ニ列國交際ノ



事第三ニ行政各部ノ官制ノ事、第四ニ法律ノ未タ規定セサル事件ニ就キ命令ヲ發スル事等ハ更ニ議會ノ容喙スル能ハサル所ナリトス、其ノ議會ヲシテ之ニ容喙セシメサルハ一々理由ノ存スル所ナリトイヘ、又以テ此等ノ事件ヲ舉ケテ政府隨意ノ處爲ニ任ス可カラス必スヤ國家中正ノ意志ニ照シテ宜シトスル所ニ就クヘキコト勿論ナリ、即チ前ニモ述ヘタル如ク外國ニ於テハ此等ノ大權ノ使用ヲ議會ノ討議權内ニ置クトイヘ、本邦ニ於テハ之ヲ其ノ外ニ置クニ代ヘテ樞密院ヲシテ行政監督ノ地位ニ立タシメサルヲ得サルモノナリ(前ニ帝國議會ノ權限ニ就キ論述スル所ヲ參照スヘシ)

(三)次ニ立法上ヨリスルモ樞密院ノ必要ナルハ政府ヨリ法律案ヲ發シタルトキ議會ニ於テ重大ナル修正ヲ加ヘテ遂ニ政府ノ之ニ同意スル能ハサルニ至リタル場合及議會ニ於テ自ラ法律案ヲ發シタル場合ニ

在リ。此等ノ場合ニ於テ政府ハ立法ノ機關ニ非サルカ故ニ之ヲ裁可シテ法律ト爲ス可キヤ否ヤヲ政府ニ諮詢スルヲ不可トス、若之ヲ政府ニ諮詢セハ政府ハ常ニ行政ノ爲ニ利トスル所ヲ以テ答フルカ故ニ行政ノ權力重キニ過テ別ニ立法會議ヲ設クル所以ニ背馳スヘシ。故ニ議會ノ案ニシテ假令政府ノ同意セサル所タルモ國家中正ノ意志ニ照シテ必要ナリト認ムレハ則チ之ヲ裁可センコトヲ要ス、是レ樞密顧問ノ必要ナル所以ナリ。

(四)次ニ樞密顧問ノ必要ナルハ立法行政ニ關シ議會ト政府トノ間ニ異議ヲ生シタル場合ニ在リ、即チ議會ハ政府ノ權内ニ入テ行政ヲ監督スルヲ得スト雖又政府ト取ル所ヲ異ニスル場合ニ於テハ質議シテ其答辯ニ満足セズ又ハ答辯ヲ得サル場合ニ於テハ上奏スルノ權アリ、而シテ特ニ政府ノ處置ヲ以テ違憲ナリ背法ナリトスルノ上奏ニ至リテハ



元首ハ之ヲ不問ニ措クヲ得ス必ス曲直ヲ決セサルヲ得サル可シ、次ニ政府ニ於テ或ル重大ナル國務ニ關シテ法案ヲ發シ議會ノ之ヲ否決スルニ會ヒテ此ノ否決ハ違憲ナリ國是ニ戾ルモノナリ故ニ議會ヲ解散スルニ非サレハ我等ハ責任ヲ以テ行政ヲ掌司スルヲ得スト上奏シタルトキニ於テモ永ク之ヲ否決ニ委スルヲ得サルヘシ然リト雖此ノ如キ場合ニ於テ政府又ハ議會ヲシテ爭議ヲ決セシムルハ公平ナラス、故ニ其上ニ在テ中立スル樞密顧問ニ下問セサルヲ得ス。

樞密院官制ハ明治二十一年四月ノ勅令第二十二號ヲ以テ制定セラル、其ノ組織職掌等左ノ如シ

第一條 樞密院ハ天皇親臨シテ重要ノ國務ヲ諮詢スル所トス

第二條 樞密院ハ第一議長一人第二副議長一人第三顧問官十二人以上第四書記官長一人書記官數人ヲ以テ組織ス

第三條 樞密院ノ議長副議長顧問官ハ親任書記官長ハ勅任書記官ハ奏任トス

第四條 何人タリトモ年齢四十歳ニ達シタルモノヲ非サレハ議長副議長及顧問官ニ任スルコトヲ得ズ

第五條 議長ハ書記官ノ内ヲ以テ秘書ヲ兼テシムルコトヲ得

第六條 樞密院ハ左ノ事項ニ付會議ヲ開キ意見ヲ上奏シ勅裁ヲ請フ

(一)憲法及憲法ニ附屬スル法律ノ解釋ニ關シ及豫算其他會計上ノ疑議ニ關スル爭議

(二)憲法ノ改正又ハ憲法ニ附屬スル法律ノ改正ニ關スル草案

(三)重要ナル勅令

(四)新法ノ草案又ハ現行法律ノ廢止改正ニ關スル草案列國交渉ノ條



約及行政組織ノ計畫  
 (五)前諸項ニ掲クルモノ、外行政又ハ會計上重要ノ事項ニ付特ニ勅命者以テ諮詢セラレタリ又ハ法律命令ニ依テ特ニ樞密院ノ諮詢ヲ經ルヲ要スルトキ

第七條 前條第三項ニ掲ケル勅令ハ樞密院ヲ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載スヘシ

第八條 樞密院ハ行政及立法ノ事ニ關シ天皇ニ至高ノ顧問ナリ且雖  
 施政ニ干與スルコトナシ(以下略)  
 明治廿二年七月八日ノ官報ヲ以テ樞密顧問官ノ定員ヲ其ノ上限ヲ二十人ト定メラレ現ニ十八名アリ。又廿三年六月三十日ノ行政裁判法ヲ以テ權限裁判所ノ設立ニ至ルマテハ樞密院ヲシテ之ヲ判決セシムル事トシタリ。

第五章 司法權

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ  
 裁判所ヲ構成ス法律ヲ以テ之ヲ定ム  
 司法權トハ裁判ノ權ヲ云フ者ニシテ他國ノ憲法ニ於テハ往々國家ノ權力ヲ立法、司法、行政法ニ三分ツカ故ニ司法ヲ以テ國家三權ノ一ト爲シ以テ立法權行政權ニ並立セシムルヨリ憲法上或ハ司法權ナル字ヲ見ルト雖今我カ憲法ニ於テ此ニ司法權ナル字ヲ用フモ右ノ三權鼎立ノ主義ヨリ來ルモノニ非サルヲ知ルヘシ其ノ故ハ我カ帝國憲法ノ組織ニ於テハ國家統治ノ大權ハ天帝ニ歸シ又分列未ケレハナリ即チ司法上ノ主權モ天皇ニ在ルハ第一ニ天皇ノ名ニ於テ之ヲ行フニテ知ル可ク第二ニ第十六條ニ依リ大赦、特赦、減刑、及復權ヲ命スル



ノ權ノ天皇ニ屬スルニテ知ル可ク、第三ニ裁判所ノ構成ハ法律ニ依ル  
トイヘル其ノ法律ハ天皇ノ立法權ヨリ出ツルニテ知ル可ク、第四ニ裁  
判官ノ資格ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムトイヘル其ノ任免ハ天皇之ヲ爲ス  
ニテ知ルヘシ。

天皇ノ行政大權司法部ノ司ル所ハ法律ノ明文ヲ以テ格段ナル場合ニ  
適用スルニ在リ而シテ政府一般ノ作用モ亦法律ノ存スル場合ハ則チ  
之ヲ格段ナル事件ニ適用スルモノニ外ナラス、此ノ点ニ於テハ司法モ、  
行政ノ一種ニシテ立法ニ對立スルモノガリ、然レモ茲ニ司法ヲシテ他  
ノ行政各部ノ間ニ並立セシメヌシテ之カ爲別ニ一格ヲ設クル所以ノ  
者ハ行政ヲ司ル自餘ノ機關ニ於テ更ニ他ノ權力ヲ有シ、從テ司法ト並  
立セシ正シク異ナル關係ニ立ツト成リ居レハナリ。他ノ權力トハ  
獨立命令權之レナリ、而シテ命令ハ法律ニ背カサルノ拘束アリト雖、又

六十九

法律ノ意ノミチ行フ爲ニスル者ニ非ス、法律ニ背カサル範圍ニ於テ獨  
立ノ權力ヲ以テ種々ノ國務ヲ規定スルノ權行政部ニアリ。果シテ、然  
ルトキハ司法、行法ヲシテ並立セシムルコトヲ得ス、若シ之ヲ並立セシム  
レハ獨立命令權ヲ有スル行法權ト司法權トノ間ニ意見ノ相違ヲ生シ  
タルトキ之ヲ裁定スル者無ク、若シ司法權ヲシテ裁定セシメシムルハ命  
令權ノ獨立完全ナルコトヲ得サルヘシ。サレバ行法權ヲシテ司法權  
ノ上ニ立タシメシカ、裁判ハ命令權ノ意志ノ爲ニ制セラレテ公平ナル  
ヲ得サルヘシ。故ニ我カ憲法ニ於テハ天皇ニ於テ二權ヲ合握シ、命令  
權及行法權ハ之ヲ政府ニ委シ、司法權ハ之ヲ裁判所ニ委スルコト爲レ  
リ。是ノ如クナルカ故ニ日本ニ於テ司法權ト云ヘハ天皇主權ノ一部  
ト看ルヘシ、之ヲ獨立ノ一權ト看ルハ非ナリ。  
上述ノ理由ニ依リ司法裁判ノ事ハ天皇ノ主權ニ在リト雖、之ヲ實地ニ



行フニ至リテハ他ノ官吏ニ受任シ玉フモ在ナリ。然ルニ行政ノ自餘ノ事業ニ於テモ主權ハ天皇ニ在リテ、其ノ實地ヲ大臣以下ニ授托シ玉フニモ拘ラス憲法ニ其ノ明文ヲ掲ケス、然ルニ、獨リ一点オキテ非ス。其ノ此ニ至ルハ決シテ容易ナルニ非ス、彼ノ法理ニ精ナル羅馬帝國ニ於テスラモ、帝ハ何時ヲ問ハス親ヲ判決ヲ爲ス事ヲ得タリト云フ。即チ元首及其ノ命ヲ受ケテ國ノ行政ニ從事スル者ハ、常ニ國家全体ノ安寧幸福ヲ進ムルニ汲々タルヲ以テ、一般ノ安寧幸福ニ利アル者ハ法律ヲ曲ケテモ其ノ權利ヲ全クスルコトヲ得シメントスルノ傾向アリ、是ヲ以テ司法事務ヲシテ自餘ノ行政事務トハ全ク異ナル編成ニ出ラシムルモノナリ。此ニ述フル論旨ノモンテスキヤノ論旨ト異ナル所ハ自ラ明ナラン。

法律ニ依リトハ司法權ヲ行フノ手續即チ訴訟審判ノ手續必ク法律

ニ依ルニキヲ示シタルモノナリ。裁判ハ公平ヲ旨トシ、公平ヲ爲ニハ全國各人ニ向テ手續ノ一樣ナランコトヲ要ス、例ハ甲ニ控訴ヲ許ス場合ニ於テ乙ニ之ヲ許サ、ル如キアラハ裁判ハ獨リ甲ニ厚ク乙ニ薄シト言ハサルヲ得ズ。又裁判ハ定常ナランコトヲ要ス、而シテ之ヲ定常ニセンニハ其ノ手續ハ時ト共ニ變セサルヲ要ス、例ハ始メ民事上或ル契約ヲ結フニ當テ訴訟ヲ許シタル事件ニ付後ニ之ヲ許サ、ル如キアラハ果シテ如何ソヤ、契約者ハ爲ニ權利ヲ喪フニ至ルモ計ル可カラス。是ヲ以テ民事及刑事ノ裁判ハ必ク一定ノ訴訟法ニ依リテ行ヒ時ニ命令ニ依テ其ノ手續ヲ改更セサルヲ保スルモノナリ。

茲ニ本邦ノ訴訟手續ニ關シ國法上ノ一大問題トモ稱スベキモノアリ、即チ裁判官ハ違憲ノ法律及違憲ノ命令ヲ適用スルノ義務アリヤ否ト云フ是レナリ。凡ソ憲法ヲ以テ國家根本ノ規程トシ特ニ憲法改正ノ



手續ヲ爲スニ非サレハ法律ヲ以テ之ヲ紛更ス可カラスト爲シ又或ル一種ノ事件ニ關シテハ法律ヲ以テ國家最上ノ意志トシ命令ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得サラシムルハ立憲國家ノ原則ナリ、而シテ我カ憲法ノ第七十三條及第九條モ亦之ヲ戒メタリ、然ルニ此ノ原則ハ立憲主義ノ眼目トモ謂フ可キモノナルニモ拘ラズ裁判上之ヲシテ實際ニ有効ナラシメントスルニ當テハ種々困難ナル事情アリテ各國ニ於テ一ノ問題ト爲リ本邦ニ於テモ亦將ニ他日ノ爭議ヲ此ノ一点ヨリ開カントス。

今假リニ議會ニ於テ憲法ニ違反スル法律案ヲ議定シテ元首モ其ノ違憲ナルニ心付カヌ之ヲ裁可シテ公布ヲ命シ、或ハ國務大臣ニ於テ故意若クハ懈怠ニ因リ法律ニ違反セルノ命令ヲ發シタリトセン乎、臣民ハ其ノ違憲違法ナルコト明白ナルニモ拘ラズ臣民トシテハ違憲違法ノ

廉ヲ以テ之ニ對シ順從ヲ拒ムコトヲ得ス、何トナレハ其ノ此ノ法律ヲ以テ違憲ナリトシ又ハ此ノ命令ヲ以テ違法ナリトスルハ到底一個人ノ意見タルヲ免レス而シテ一個人ノ意見ヲ以テ國家權力ノ上ニ加フルコトヲ許スハ正當ニ非サレハナリ、若一タヒ之ヲ許セハ口實ヲ違憲違法ニ仮リテ服從ヲ拒ム者多クナリテ行政司法ハ到底其ノ職ヲ盡クスコトヲ得サルヘキナリ。

凡ソ正當ノ公布式ヲ以テ公布セラレタル法律命令ニハ絶對的ニ服從スヘキ臣民ノ義務ヲ稱シテ立憲服從ノ義務ト云フ、然リト雖國家ハ臣民ヲシテ此ノ義務ヲ盡サシメナカラ亦之カ回復ヲ求ムルノ途ヲ設ケサルニ非ス即チ立憲國家ハ通シテ人民カ違憲ノ法律又ハ違法命令ニ依リ損害ヲ被リタルモノヲ保護スル爲ニ二種ノ制ヲ立テタリ曰責任上ノ保護、曰裁判上ノ保護是レナリ。責任上ノ保護トハ大臣責任ノ制



ヲ嚴ニシテ違憲ノ處分ヲ爲シ違法ノ命令ヲ發シタル大臣ヲ彈劾スル  
是レナリ然レモ此ノ制ハ以テ違憲ノ法律ニ及ホシ難キモノトス。裁  
判上保護トハ行政裁判所及司法裁判所ノ事務ノ一トシテ元來効力ヲ  
有ス可カラサル法律命令ニ基キ行政廳ヲ爲シタル處分ニ依テ損害ヲ  
被リタル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得セシメ之ニ基キテ一私  
人カ爲シタル行爲ニ因リ損害ヲ被リタル者ハ司法裁判所ニ出訴スル  
コトヲ得シム是レ即チ裁判上ノ保護ナリ。

然ルニ行政裁判所及司法裁判所ニシテ果シテ此ノ職權ヲ行フコトヲ  
得シニハ必ス豫メ命令ノ合憲合法ナルト否トヲ審査スルノ權ナク  
可カラズ之ヲ裁判官ノ審査權ト謂フ。此ノ權力以有無及廣狹ニ關ス  
ル問題ハ現時國法學上ニ於テ最モ囂々ナル議論ト成レリ。或ル論者  
ハ曰凡ソ裁判官ハ獨立ノ地位ニ在テ其ノ職權ヲ行フ者ナレハ職制ニ

明文ナキモ法律命令ノ有効無効ヲ審査スルハ素トヨリ其ノ權内ニ屬  
スト而シテ他ノ論者ハ曰此ノ如キハ立法行政司法ノ職權ノ區域ニ關  
係スルモノナレハ必ス法律ヲ以テ之ヲ規定セサル可カラズト。又一  
方ノ論者ハ曰裁判官ノ法令ヲ審査スルハ唯タ其ノ果シテ正當ノ形式  
ヲ以テ發布セラレタリヤ否ヤニ止マルヘシト而シテ反對ノ論者ハ曰  
此ノ權ハ實ニ外形ニ依テ効力ノ有無ヲ審査スルニ止マラス其ノ趣旨  
ニ於テ法律ニ在テハ果シテ憲法ニ違フナキヤヲ審査シ命令ニ在テハ  
果シテ法律ニ違フナキヤヲ審査スルコトヲ得ヘシト。

今各國ノ成例ヲ見ルニ裁判官ノ審査權ハ北米合衆國ニ於テ最モ完全  
ナリ即チストリーリ米國憲法ニ曰最上裁判所ハ獨リ合衆國ノ憲法及  
法律ノミナラス又各州ノ命令及各州ノ憲法法律ニ就キテモ其ノ合衆  
國ノ憲法、法律、條約ニ關スルモノニ關シテハ此ノ權ヲ行ヒタリ又曰



一亞米利加ノ輿論ハ荷モ司法上ヨリ裁定シ得ヘキ限リハ一般政府及各州政府ノ命令法律ノ憲法ニ合ヘルト否トニ關シテ司法部ヲシテ之ヲ裁斷モシムルニ一決セリト然レトモ其ノ違憲ニ決スル場合ニ於テモ法律ハ法律トシテ存立スルモノニシテ唯々之ヲ訴訟ノ事件ニ適要スルヲ爲ササルノミナリ。

英吉利佛蘭西ノ裁判所モ亦明文ニ依ラス此ノ權ヲ行ヒ白耳義ノ裁判所ハ違法命令ニ關シ憲法第百七條ノ明文ニ依リ此ノ權ヲ行ヘリ、曰ク「各法院各裁判所ハ大臣ノ指令及國ノ條例府縣郡邑ノ條例ニ於テ其ノ法律ニ合スルモノニ非サレハ執行セズ」ト云フ。又曰ク「凡ソ法律ハ憲法ニ依リテ制定シタル法律ニ有効無効ヲ論スルコトヲ禁シタリ、而シテウルブルヒニ依ルニ憲法委員カ本條ヲ設ケタルノ理由ハ左ノ如シ、曰、裁判官ハ法律ノ下ニ立ツ

ヘキモノナリ、法律ノ上ニ立テ之ヲ是非スルコトヲ得可カラズ、若裁判官ヲシテ法律ヲ是非スルノ權アラシメハ實ニ立法者ト其ノ職權ヲ混一スルノミカラス、又爲ニ裁判ノ公平ヲ害スルニ至ラントスト、但シ公布ノ式ニ缺クル所アルモノハ之ヲ無効トスルコト素ヨリ其ノ權内ニ在リ、然ルニ政府又ハ自治体ヨリ發シタル命令ニ至リテハ訴訟ニ於テ之ヲ適用スヘキ場合ノ起ル毎ニ其ノ合法違法ヲ裁決スルコト裁判官ノ全權ニ屬ス何トナレバ命令ハ法律ノ下ニ立ツモノナレバ力アリ、而シテ此ノ命令審査ノ權ハ亦行政裁判所ニモ屬セリ。以上ノ諸國ニ在テハ違憲ノ法律ハ始ク措キ違法ノ命令ハ皆裁判官ノ其ノ職權ヲ以テ無効ニ屬セシムルコトヲ得、尙キ所タレバ人民ノ之ニ服從ヲ拒ムニ當リ裁判權ヲ以テ其ノ執行ヲ強迫スルヲ得ズ、隨テ實際ノ結果ハ違法ノ命令ニ始マリ効力ナシト云フニ等シトイヘ、凡獨リ普



魯西ハ一種特別ノ制ヲ取レリ、即チ其ノ憲法第百〇六條ニ曰ク「法律命令ノ適法ノ形式ヲ以テ發布セラレタルモノハ拘束力ヲ有ス」  
 「正當ニ發布セラレタル勅令ノ有効無効ヲ決スルハ官廳之ヲ爲ス」  
 而シテ議會之ヲ爲ス」ト云フ。然レテ其ノ意味ハ假令憲法ニ合ハサルノ勅令タ  
 リトモ發布ノ正式ニサテ違ハサル以上ハ拘束ノ効力ヲ有シ臣民其  
 ノ違憲ヲ故ヲ以テ從順ヲ拒ムコトヲ得ス而シテ獨リ議會ヲミ其ノ合  
 法ナルト否トヲ審査スルノ權アリト云フニ在リ而シテ法律ニ至リテ  
 ハ國家ニ於テ之ヲ審査スルノ權アル者ヲ認メサルナリ。今若或或勅  
 令ニ就キ議會ノ多數ニ於テ果シテ之ヲ違法ナリト認ムルトキハ先  
 政府ニ對シ取消ヲ請求シ政府之ニ應セサルハ則チ責任大臣ニ對シ國  
 務裁判所ニ訴訟ヲ起スヲ順序トスルナリ、議會ハ自ラ其ノ議決ヲ實行

スルノ權ナキカ故ニ議決シタルノミニテハ未タ以テ其命令ノ効力ヲ  
 奪フコトヲ得ス、必ス執行權アル裁判所ノ力ヲ假ラシコトヲ要ス、然レ  
 ニ大臣責任ヲ法律ニ尙ホ未タ制定セラレサルニ當リ責任裁判ノ手續  
 モ未定ナルニ因リ實際ニ於テ違法ノ勅令ヲ發スルモ議會ハ只空シ  
 ク其ノ違法タル所以ヲ議決スルノミニシテ亦之ヲ如何トモスル能ハ  
 サルコト是レ今日ノ實況ナリ、其ノ一例ヲ言ハント千八百六十四年六  
 月廿日拿捕規則ヲ認可スルノ勅令ヲ發スルモ議會ハ協贊欲乏ノ廉ヲ  
 以テ其ノ無効力ナル旨ヲ議定シ、然レテ此時多數黨ノ論者ヲスカル  
 其ノ無効力ナル旨ヲ議定セハ則チ此ノ勅令ハ自ラ消滅スヘシト論シ  
 タリ、然レニ當時議員トシテ議場ニ在リシグナイストハ反對ノ意見ヲ  
 抱キテ此ノ議決ヲ爲スモ政府ニ於テ之ニ從ハサル以上ハ活用ヲ爲サ  
 ス議決ノ果シテ有効ナルヲ判決スルノ裁判所ナキニ因リ此ノ議決ハ



水泡ニ属セシト答辨シタリ、此ノ言果シテ眞ナリキシユルチエ之ヲ評シテ曰「此ノ如キハ立憲ノ主義ニ照シテ愛フ可キノ事トス然レモ茲ニ普魯西憲法生活ノ不熟ニシテ擔保ナキノ有様ヲ表白スルハ之ヲ隱匿シテ妄信ヲ養フニ勝ルヘシト」(シユルチエ普國々法第七十三條)夫レ然リ本邦ニ於ケル裁判官法令審査權ノ問題ハ如何ト云フニ今日マテニ制定セラレタル憲法裁判所構成法及民事訴訟法中ニ更ニ其ノ規定ヲ欲キ今日ハ尙ホ全ク未定ニ屬スルモノ、如シ然リト雖此ノ問題ハ將來ニ於テ必ス盛ニ起ラントス、何トナレハ本邦ニ於テハ政府ノ命令ト臣民ノ權利義務トノ關係ノ繁雜ナルコト他ノ諸國ノ比ニ非サレハナリ。他ノ諸國ニテ政府ニ許シタル所ハ緊急命令ト法律執行ノ命令トヲ發スル權ノミナルモ本邦ニ於テハ別ニ法律ニ依ラスシテ國家ノ安寧秩序ヲ保持シ又ハ臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ命令ヲ發スル

八十

ノ權ヲ認め、且憲法ニ於テ法律ニ依ルコト非サレハ左右シ難シトスル臣民ノ權利義務ノ外ニ例ヘハ營業ノ如キ公有物使用權ノ如キ天產物取得權ノ如キ種々ノ權利義務アリテ此等ハ命令ヲ以テ伸縮増減スルコトヲ得ヘケレハナリ。本邦ニ於テ明文ノ全ク存セサルニモ拘ラス此ノ權力ノ果シテ裁判官ニ屬スルヤ否ニ就テハ余輩所見アリト雖要スルニ一ノ理論タルニ止マレハ此ニ録セス、唯タ世人ノ注意ヲ促シテ我方法制上ニ此ノ問題アル事ニ衆論ノ歸スル所ヲ見ントス。裁判所ハ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムトアルハ裁判ノ公平ナランカ爲ニ其ノ手續ノ公平定常ナランコトヲ要スルト同様ニ其ノ機關モ亦公平定常ナラサル可カラサレハナリ、是レ見易キノ道理ナリトシテ此ノ外尙ホ一ノ理由アルハ他ナシ、尋常ノ行政官廳ハ之ヲ「ビウロクラチック」



單獨長官ニ於テ衆吏ヲニ組織シ下官ハ上官ノ指揮監督ヲ受クルノ制  
 統督スルノ組織ヲ云フニ組織シ下官ハ上官ノ指揮監督ヲ受クルノ制  
 大ニカ故ニ其ノ組織ニ在リテモ上官ニ於テ便宜トスル所ニ從ヒ之ヲ  
 改更スルノ權方ヲ有スト雖裁判所ニ至テハ即チ然ラス、是レ元來合議  
 的ニ組織セラレタルモノニシテ區裁判所ノ判事ハ單獨執務スルモ尙  
 ホ他ノ裁判官ニ隸屬スルコト無ク區裁判所ヨリ大審院ニ至ルマテノ  
 間ニ等次ノ別ハ存ストイヘモ是レ唯タ上訴ノ順序ヨリ起ルノ區別ナ  
 ルノミ各裁判所ハ其ノ職權ノ範圍内ニ於テ完全ニ獨立スルモノナリ  
 トス。此ノ如ク司法官廳ニ於テハ行政官廳ニ於テノ如ク上級官廳ノ  
 權内ニ於テ下級官廳ノ職制ヲ左右スルコト無ク各廳ハ他ノ各廳ニ對  
 シテ獨立スルカ故ニ法律ヲ以テ相互職權上ノ關係ヲ明劃ニセサル可  
 カラザルモノナリ。  
 裁判所構成法ノ由テ出ツル所上述ノ如シ、即チ我カ裁判所構成法ハ明

五十

五十一

治廿三年二月八日ヲ以テ發布セラレ、同年十一月一日ヲ以テ施行ノ期  
 トス、即チ構成法ニ載セサルモノハ行政裁判所及特別裁判所ヲ除ク外  
 ニ日本國法ノ認メサル所ナリ。

第五十八條 裁判官ハ法律ニ依リ定メタル資格ヲ具  
 ブル者ヲ以テ之ニ任ス

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ  
 職ヲ免セラル、ユトナシ

懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

裁判官ト云フ中ニハ裁判所長判事豫審判事判事試補ヲ包含シ、檢事書  
 記及執達吏ヲ包含セス、其ノ檢事ハ裁判所ニ附置シタル一局ニ於テ執  
 務ストイヘモ裁判上ニ於テ國家公益ヲ辯護スルノ地位ニ在ルモノナ  
 レハ本來ハ行政官ニシテ其ノ上官ノ指揮命令ニ從フヘキモノトスル



ンハク氏第三 卷第八十九頁 サテ裁判官モ文武官ノ中ナレバ天皇之ヲ命令スルハ  
 勿論ナレド憲法ハ法律ヲ以テ資格ヲ定ムルノ必要ヲ認メタリ。  
 法律ニ依リ定メタル資格云云ハ裁判官ノ地歩ヲ安固ニセントスルヨ  
 リ來タルコトニシテ又其ノ職務ノ性質ノ定常ナルノ結果ナリ。通常  
 ノ行政事務ニ在テハ時ニ從ヒ其ノ形勢ノ變動スルト俱ニ職制ヲ變更  
 センヲ要シ從テ之ニ適スヘキ官吏ノ資格ヲ變更スルノ必要ナキヲ  
 保セスト雖、裁判官ニ在テハ事務ニ變更ナク其ノ適用ヲ司ル所ノ民刑  
 諸法ハ却テ定常ヲ目的トスルモノナレハ法律ヲ以テ永久ニ其ノ資格  
 ヲ確定スルモ不便ヲ見サルモノナリ。本邦ニ於テハ裁判所構成法第  
 二編第一章ヲ以テ判事ノ資格ヲ定メタリ。  
 刑法ハ宣告トハ重輕罪ノ有罪宣告ヲ受ケ其ノ結果トシテ公務ニ就ク  
 コト能ハザルニ至リタル場合ヲ謂フ。有罪宣告ヲ受クルモ公權ヲ停

止剝奪セラレス及職務執行ニ妨ケナキ場合例ハ罰金科料ハ此ノ限  
 ニ在ラス。  
 懲戒ノ處分トハ職務上ニ大過失アリタルトキ公務上ノ處罰トシテ其  
 ノ職ヲ免セラル、ヲ謂フ。裁判所構成法ノ第四編第三百三十四條ニ於  
 テ監督ノ等次ヲ定メ次條ノ第二項ニ於テ官吏ノ職務上ト否トニ拘ラ  
 ス其ノ地位ニ不相應ナル行狀ニ付諭告ヲ爲ス事ヲ監督事務ノ一部ト  
 シ、此ノ諭告ヲ加フルコト能ハサル場合ニ於テハ第三百三十八條ニ於テ  
 懲戒法ニ從ヒ之ヲ訴追スルコト、シタリ。  
 其ハ職ヲ免セラル、コト無シト云フニ就テ疑義ノ存スルハ職ノ一字  
 ニ在リ、即チ職ト官トハ相同シカラス停職、退職ノ場合ニ於テ官ハ依然  
 トシテ殘ルト同シク刑事宣告又ハ懲戒處分ニ依テ職ハ免セラル、ト  
 モ官ハ尙ホ殘ルモノナル乎トノ疑問アリ、答テ曰停職、退職ノ場合ニ於



テハ官ハ尙ホ存スルカ故ニ恩給等ヲ受クルノ權アリ。雖全ク職ヲ免セラルルニ至リテハ官モ之ニ從テ止ムモノト解スヘキナリ。裁判所構成法第七十二條ニ於テ本條ノ意ヲ擴張シテ左ノ如ク規定シタリ。

「**判事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ依ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ轉官轉所免職又ハ減俸セラルルコト無シト**

ナレハ合意ノ場合及辭職ノ場合ハ免職スルヲ得ヘキコト論ヲ俟タス。此ノ如ク判事ハ終身官ナルモ檢事ハ然ラス即チ裁判所構成法ノ第八十條ニ於テ其ノ意ニ反シテ免職セスト云フノミ轉職ヲ言ハサルカ故ニ先ツ他官ニ轉シ而シテ後之ヲ免職スルコトヲ得ルカナリ。懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムトアル其ノ懲戒法ハ未タ發布セラレストイヘモ法律トアル上ハ裁判シテ而シテ後ニ處分スルモノニシテ今日ノ官吏懲戒ニ如ク本屬長官ノ見込ニ任スルニ非サルコト明カ

リ蓋シ懲戒ノ爲ニ別ニ裁判所ヲ設クルト否トハ未定ノ問題ニ屬ス。法律ヲ以テ之ヲ定ムルモ是レ亦裁所官ノ地歩ヲ安固ニセシガ爲ナルニ明カナリ。

茲ニ裁判官ノ獨立ニ就キ言セサルヲ得ス。本條ハ憲法中特ニ裁判官ノ地歩ヲ安固ニシテ其ノ獨立ヲ保證セシカ爲ニ設ケタル所ナリ。雖其人獨立ト云フニ種々ノ意味アリ共和諸國ニ於ケル意味ト獨乙諸國ニ於ケル意味ト日本ニ於ケル意味ト一々別異ナレハ之ヲ了解スルニ必要ナリ。共和政体ニ於ケル司法權ノ制度ハ北米合衆國ヲ以テ模範トス。即チ同國ニ於テハ三權分立ノ制度モ完全ニ行ハレ裁判官ノ獨立上ニ於テ立法行政ニ對シ獨立セリ。即チ國會ハ法律ヲ制定スルニ得トシテ既ニ之ヲ制定シタル上ハ其人審査解釋ト適用トニ關シテハ國會ハ全ク司法部ノ見解ニ從ハサルヲ得ス。又政府モ其ノ所



爲ニ就テハ裁判所ノ裁判ヲ受ケザルヲ得ス、行政事件ニ對シ別ニ行政  
 部内ニ於テ裁判所ヲ置クコト無シ、之ヲ國法上ノ獨立ト云フ。獨乙諸  
 國ニ於テハ裁判權ハ法律ノ外何等ノ權力ニモ服從セザル旨其憲法ニ  
 明言セトスヘシ、其ノ立法行政ニ對スル獨立ハ不完全ナリ、何トナレハ  
 法律ノ解釋適用ニ就テハ國會ニ對シ獨立ストイヘシ、元來法律ノ果シ  
 其効力ナルト否トヲ審査スルノ權ノ國會ニ屬シ、裁判所ニ屬セザルハ  
 前述ノ如ク、又政府ノ所爲ハ之ヲ通常裁判權ノ範圍外ニ置キテ別ニ行  
 政裁判所ナル者ヲ設クタリ、即チ裁判所ハ唯タ民事刑事ノ範圍内ニ於  
 テ獨立スルノ義、國法上ノ問題ニ就テハ獨立スルモノニ非サルナリ、故  
 ニ之ヲ裁判上ノ獨立ト云フモ國法上ノ獨立ト云フヲ得サルナリ、且裁  
 判官ハ法律上終身官ナリト雖國王ニ隸屬シテ其ノ任命ハ國王之ヲ爲  
 シ國王之名ニ於テ裁判スルカ故ニ行政官ト一般國王ノ臣下ニシテ獨

立ノ官吏ニ非ズルコト獨乙國法論者ノ常ニ論スル所ナリ。次ニ日本  
 憲法於テハ如何ト云フニ憲法上ニ於テ全ク獨立ナル語ヲ用キ、司法權  
 ハ天皇ノ名ニ於テ裁判所之ヲ行フノ明文アルカ上ニ裁判官及裁判所  
 ニ關スル一切ノ法律モ天皇ノ主權ヨリ出ツルモノナルカ故ニ元首ニ  
 對シテ全ク獨立モス、唯タ元首ノ自ラ定ムル所ノ規定ニ依リ其ノ元  
 首ニ對スル臣從ノ義務ノ要件ヲ一定シタルノミナルヲ知ル可シ、即チ  
 裁判官ノ一般文武官ト異ナル所ハ所屬長官ヲ經ス直接ニ陛下ニ隸屬  
 シ、且法律ヲ以テ陛下ニ對スルノ關係ヲ畫定シタルニ在ルノミ、是レ獨  
 立理論上ノ關係タルノミニ非ズ、又實際ノ形勢タル事ハ勅令ヲ以テ裁  
 判官ノ官等俸給及進級ニ係ル規程ヲ定ムルニ知ル可シ。然ルニ立  
 法部ニ對スル獨立即チ裁判官ニ法令審査權ノ有ルト否トニ就キテハ  
 日本憲法ハ一言スル所ナキコト前述ノ如クナレバ此ノ點ニ於テ司法



權ヲ擴張スルハ向後司法官タル者ノ力ニ依ルト言ハサルヲ得ズ。此  
 点ニ就キ聊カ實地問題ニ涉リテ茲ニ一言セント欲スルモノハ他無  
 シ現今形勢ニ於テハ裁判官ノ立法部ニ對スル獨立殆ト望ミ難キコト  
 是レナリ夫ノ議員保護ノ法律ハ議長ニ適用セスト解釋シテ議長ニ對  
 スル暴行ヲ無罪トシ選舉者ニ酒食ヲ給スルハ賄賂ニ非ストシテ政  
 府ニ對シテ別ニ衆議院議員選舉罰則ヲ補則ヲ發布スルノ必要ヲ見ルニ  
 至ラシメタル如キハ實ニ裁判官ノ立法者ヲ一部即チ選舉者ニ對スル  
 不獨立ヲ證スルノ著シキモノニシテ之ヲ列國ノ法律解釋法ニ照シテ  
 日本裁判官ノ恥辱ナリト謂ハサルヲ得ズ裁判官ハ既ニ國家ノ行政官  
 ニ對シテ獨立セリ何ソ地方政治家ニ對シテ恐怖スルヲ用非ンヤ之ヲ恐  
 怖スルハ他日司法權ノ全キヲ期スル所以ニ非ズ司法權ニシテ全カ  
 サレバ日本臣民ノ既得權利ハ終ニ國會多數ノ左右スル所ト爲ラント

豈ニ鑑ミサル可ケンヤ。

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩  
 序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁  
 判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ルコトヲ得。  
 ○對審トハ刑事ノ審理手續キハ中ニ豫審ヲ除キテ其ハ他ノ手續ヲ  
 云フ（憲法）現行治罪法ハ所謂公判ナリ。（憲法）五條ノ五款ハ對審ノ手續ニ對シテ  
 ○判決ハ裁判宣告ナリ。（憲法）五條ノ五款ハ對審ノ手續ニ對シテ  
 ○公開ハ公衆ノ傍聽ヲ許スヲ云フ而シテ其ノ公衆トハ豫メ人數ヲ制  
 限セス又來聽者ノ資格ヲ制限セカル數人ハ來集ヲ得。（憲法）五條ノ五款ハ對審ノ手續ニ對シテ  
 ○既ニ憲法ニ於テ對審判決ハ之ヲ公開ストイフ上ハ公開セカル法庭  
 ニ於テ爲シタル對審判決ハ後ニ云フ二ノ場合ヲ除ク外總ヘテ無効ナ  
 リ。（憲法）五條ノ五款ハ對審ノ手續ニ對シテ



○安寧秩序ヲ害ストハ内亂外患ニ係ル罪及嘯聚激唆ノ類人心ヲ煽起  
刺衝スル者ヲ謂フ解義

○風俗ヲ害ストハ内行ノ事之ヲ公衆ノ視聽ニ暴ストキハ醜辱ヲ流シ  
風教ヲ破ルモノヲ云フ上同例ハ刑事ニ於ケル姦通ノ裁判、民事ニ於ケ  
ル離婚ノ裁判ノ如シ。

○法律ニ依リ公開ヲ停ムトハ裁判所構成法、訴訟法及治罪法中公開ニ  
係ル條項ニ依ルヲ云フ。裁判所構成法第百〇五條乃至第百十條ニ於  
テ公開停止及入廷禁止ノ條規ヲ設ケタリ。現行治罪法ノ第二百六十  
三條ニ重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル  
時、其ノ言渡ノ効ナカル可シトアルハ憲法ノ本條ト重複スルヲ以テ  
憲法實施以後ハ無効ニ屬ス、其ノ次條ニ被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻  
ニ涉リ、風俗ヲ害スルノ恐レアル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因

リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得、其裁判言  
渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許スヘシトアルハ公開ヲ停ムルニ至ル手續  
ヲ示スモノナレハ仍ホ有効ナルヘシ  
之ヲ國法學書ニ案スルニ裁判ノ對審判決ヲ公開スルニ反面ノ理由アリ  
又正面ノ理由アリ。其ノ反面ノ理由トハ殊サラ秘密ニスルノ理由  
無キヲ曰フ。行政ノ他ノ事業ニ至リテハ之ヲ公示セハ爲ニ國家全体  
ノ不利ヲ來タスヲ無シトセス、然リト雖モ裁判ハ全ク一個人ノ爲ニス  
ルトニシテ國家ノ上ヨリ言ハ原告勝利ヲ得ルモ被告勝利ヲ得ルモ  
敢テ關係無ク、又假令國家ノ爲ニ原告ニ勝テ與フルヲ宜シトスル場合  
アリトモ、法理ニ於テ勝利被告ニ在ルトキハ必ス之ヲ被告ニ歸セサル  
ヲ得ス、是ヲ以テ國家ニ於テ別ニ秘密ヲ要スルノ理由ナシ。管ニ秘密  
ヲ要スルノ理由ナキノミナラス亦却テ公開ヲ例トスルノ理由アリ即



子裁判ヲ公衆ノ目前ニ於テシテ其以間ニ私曲ノ行ハレサルヲ天下ニ  
 公証スル事是レナリ之ヲ正面ノ理由トス。公開ハ公平ヲ離レサルノ  
 事情ナリ。他ニ謀ル所アレハコソ掩蔽セントスル純然タル正義公道  
 ノ爲ニ法ル事ニ於テ何ノ憚ル所アラシヤ、即チ秘密ノ事ヲ公平ニ非サ  
 ル疑念ノ源ナリ。又シユルチエハ裁判ヲ公開セハ自ラ人民ノ良心ヲ  
 養成スルニ足ルノ功アルモ其ノ理由ノ一ナリト言ヘリ、是レ固ヨリ法  
 律上ノ理由ニ非サレト又見ルニ足ルモノト謂フヘシ。其ノ間ニ  
 爰ニ公開ニ關シテ一言スヘキハ口頭ノ一事ナリ。既ニ公開スルカラ  
 ハ必ス口頭ノ對審ヲ爲シ、判決モ必ス朗讀セサル可カラズ、即チ獨逸ノ  
 中古ニ行ハレタル如ク、原告被告ヲシテ書面ヲ以テ陳述辯護セシメ、判  
 事モ書面ヲ以テ判決ヲ下ラスノ制ハ、此ノ憲法ノ名文ニ從テ日本ニ行  
 フヲ得サル者タリ。行政上ノ訴願請願ノ如キハ書類ヲ以テ願出テ

書面ヲ以テ指令ヲ受ク是レ其ノ公開ニ非サルカ故ナリ。  
**第六十條** 特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法  
 律ヲ以テ之ヲ定ム

特別裁判所トハ陸軍裁判所、海軍裁判所、商法裁判所、工業裁判所、航海裁  
 判所ノ類ヲ曰フ、其ノ構成及管轄ニ關スル法律ハ、追次制定スル所ナル  
 ヘシ。英國ニ於テハ破産裁判所、離婚裁判所、負債裁判所等アリ。

**第六十一條** 行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セ  
 ラレタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル  
 行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ  
 受理スルノ限ニ在ラス

此ノ二條ハ他日行政裁判所ノ開設アリタル片其ノ管轄ニ屬スル者ト  
 司法裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ者トヲ分別スル爲ニ設ケタリ。蓋シ臣民



ヨリ行政官廳ノ違法處分ニ對シテ起ス訴訟ニ二種アリテ、其ノ一ハ尙  
 ホ司法裁判所ノ受理スル限ナレハ、之ヲ區別セサル可カラス。又第一ハ  
 官廳又ハ官吏カ一個人ノ資格ヲ以テスル所ニ關シ、第二ハ其ノ國家ノ  
 權カヲ以テスル所ニ關ス。國家ト雖モ一個人ノ資格ヲ以テ他ノ一個  
 人又ハ會社ト契約ヲ爲スコアリ、例ヘハ請負人ニ官廳ノ建築ヲ命スル  
 ノ類是レナリ、此等ノ事件ニ付キ其ノ違約ノ起リタルキハ、一個人ニ於  
 テ官廳ヲ被告トシテ司法裁判所ニ訴フルコトヲ得可シ。官廳ノ契約ニ  
 シテ公文ノ式ヲ以テセサル者ハ皆此類ニ屬ス次ニ官吏ニ至リテハ、武  
 官ヲ除キ其ノ官廳ノ外ニ於テ一個人トシテ爲ス所ハ悉ク司法裁判所  
 ノ範圍ニ屬スル事言フ埃タス、其ノ官ノ名義ヲ以テ爲ス事ト雖モ若シ  
 私利ノ爲ニ職權ヲ濫用シタルモノタルキハ尙ホ司法裁判ノ範圍ニ於  
 テ刑事ヲ以テ論スルナリ。サテ官廳又ハ官吏カ國家ノ代表者トシテ

職權ヲ以テシタル違法處分ニ至リテハ之ニ對シテ起シタル訴訟ヲ司  
 法裁判ノ範圍ヨリ除キ、之カ爲ニ別ニ裁判所ヲ設クルノ理由ハ左ノ如  
 シ。  
 概シテ言ヘハ行政裁判ニ於テハ純粹ニ被告ノ權利ノミヲ保護スル可  
 カラスシテ國家ノ利益ヲ酌量セサルヲ得サルコト是レ其ノ尋常裁判ト  
 原則ヲ異ニスル所以ナリ。國家ノ利益ハ臣民共同ノ利益ナルカ故ニ  
 一人ノ權利ニ比スレハ重キ幾倍ナルヲ知ラス、故ニ國家ノ爲ニハ一個  
 人ノ財産自由ノ幾分ヲモ収ムルナリ、サレバ行政事業ノ爲ニ一個人ノ  
 權利ニ侵シ入ルモ、一個人ハ之ヲ如何トモスルノ權利無ク、只タ願請  
 願ノ一路アルノミナルヲ原則トス。然レモ行政ノ事業ト一個人ノ權  
 利トノ撞着スル場合ニ關シ、既ニ一定ノ法律命令中ニ條項ヲ存スル場  
 合ニ於テハ、行政權ニ對スル一個人ノ權利ノ範圍明瞭ナルヲ以テ、其ノ



侵襲ニ關シ裁判ヲ下タスヲ得ルナリ。サレド是ノ明條アル場合ト雖モ、單ニ一個人ノ權利ヲ保護スルノミヲ標準トスルヲ得ス、必ス國家ノ利益ヲ酌量セサル可カラス。是ノ次第ナルヲ以テ權利者ノミヲ保辨スルヲ目的トスル司法裁判ト必ス其ノ職權ヲ異ニセサル可カラサルナリ。(スタインノ行政全書ニ見エタル說ハ此ニ述フル所ト同シカラス、國家學第四部ヲ參照スヘシ、今ハ主トシテグナイスト、マイエルノ所說ニ依ル)。

玆ニ司法裁判ト行政裁判トノ趣ノ異ナル一点ヲ擧ケンニ民事ニ於テ訴訟ヲ起スルハ裁判所ハ判決ニ至ルマテ被告カ其ノ事件ニ就キ作爲スルノ義務ヲ中止セリ例ヘハ金圓仕拂ノ義務ノ如キモ判決ノ下ルマテ仕拂ヲ見合ハサシムルヲ得ルノ類ナリ、行政裁判ニ至リテハ則チ然ラス、是レ政府ノ處分ノ當否ニ關スル裁判ニ非ス、國家行政ノ上ニ於

テハ私權ヲ害スルト否トニ論無ク、告達ハ姑ク正當ナル者ト見爲スヘキ次第ナルヲ以テ、私權ヲ害セラレタル人ニ於テ假令起訴ヲ爲スノ間ト雖モ、其ノ告達ニ服従スルノ義務アリ。今假リニ訴訟ノ關スル所納金ヲ催スノ指令ニ在リトセンカ、假令此ノ指令ヲ受ケタル人ニ於テ仕拂フノ義務無シト認メテ告訴ニ及フトモ兎ニ角一應ハ之ヲ仕拂ヒテ果シテ訴訟ニ勝ツキハ則チ政府ヨリ賠償ヲ取ルノ手順ト成ル可シ、決シテ前ノ納金拂戻ヲ請求スルノ手順ニハ至ル可カラサルナリ。此ノ点ハ不動産ニ關シテ最モ著キ差違ヲ生ス、即チ行政ノ處分ヲ以テ甲ノ地處ヲ公賣ニ附シテ乙之ヲ買得タリトセン乎、此ノ處分ヲ不當トシテ告訴シ、果シテ勝チ占メタルキハ、民事ノ場合ナレハ乙ノ許諾ヲ以テ買戻シヲ爲サシムヘキ道理ナレト、行政法上ニ於テハ乙之ヲ許諾スルト否トニ拘ラス買戻シノ請求立ダス、公賣ノ處分ハ何處マテモ正當ナル



者ト看做シテ、只タ之ニ因テ被リタル損害ノ要償ヲ爲スコヲ得シムル  
ノミナリ。

### 第六章 會計

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法  
律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ。

但シ報償ニ屬スル行政上ノ手數料及其ノ他ノ收納金  
ハ前項ノ限ニ在ラズ。

國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負  
擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ。

此ノ一條ハ今般ノ憲法ヲ以テ新ニ臣民ニ賦與セラレタル權利ノ最モ  
重大ナルモノナリ。從前ト雖モ新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルノ  
案ハ常ニ元老院ノ議ニ附シタリ、然レモ其ノ議決ハ必スシモ政府之ニ

依ルノ義務無ク、修正シタルモノモ元案ノマ、公布スルコトアリタリ、然  
ルニ此ノ憲法實施ノ後ハ必ス兩院ノ可決シタル所ニ違ハサルヲ要ス  
ヘク、是レヨリシテ帝國臣民ハ自ラ其ノ必要ヲ承知セサル國費ノ爲ニ  
生命等シク必要ナル財産ノ一部ヲ徴セラル、コト無カル可キナリ。  
新ニ租稅ヲ課シ、云云ノ一項ハ則チ各國ノ憲法ニ有名ナル拒稅權諸稅  
權ニシテ租ハ土地ニ課シ、稅ハ財産、所得、營業、運搬、契約、賣品ニ課スル所  
ナリ。稅率ハ租稅ノ割合ナリ。此等ノ上ニ變改ヲ起サンニハ必ス法  
律ヲ以テ之ヲ定メサル可カラズ、而シテ法律ヲ以テトハ帝國議會ノ協  
賛ヲ以テト云フト同一ニテ、貴族院及衆議院ノ可決ヲ經ンコトヲ要スル  
モノナリ。蓋シ英國ニ於テハ昔ヨリ此点ニ關シ上下兩院權力ヲ異ニ  
シ、上院ハ唯タ全体ヲ可否スルノ權ヲ有スルノミナルヲ見テ、是レ立憲  
國家ニ必要ノ制ナラント思フ者有リ、然レモ英國ノ此ノ制アルハ全ク



歷史上ヨリ來タルニシテ國權上必スモ取ル可キノ制ニ非サル  
 既ニ國家學第二部第九章ニ於テ之ヲ辨シタリ。  
 手数料、收納金トハ獨乙ノ所謂「グビョーレン」ニシテ租稅ト全ク性質ヲ異  
 ニスル者ナリ。租稅ハ國家全体ノ事業ニ對スル經費ニ充テシガ爲ニ  
 課スル所ニシテ一個人ニ於テ之ヲ納ムルノ義務アル所以者其ノ國  
 家ノ團體ニ屬スルニ因レリ、國家カ格段ナル一個人ノ爲ニ殊サヲ爲ス  
 所アルニ因ルニ非ス。之ニ反シテ手数料、收納金ハ特ニ之ヲ納ムル所  
 ノ一個人又ハ社會ニ對シ國家ヨリ爲ス所アルニ對スル報酬ノ性質ニ出シ  
 ル者ナリ。其ノ内ニ二種アリ、曰ク國家ノ行政權ノ運用ニ對シテ拂フ  
 者例ヘハ警察費、台帳謄寫、旅行免狀、遊獵鑑札、特許證等ニ對スル手数料、  
 標登録ニ對スル手数料、類是レナリ、之ヲ手数料ト曰フ、是レ國家ノ權力  
 ヲ格段ナル一個人ノ爲ニ用ヰタルニ因ルモノニシテ、一般ノ事ニ非ス。

此ノ如キハ全ク手数料ノ多少ニ依リ其ノ額ヲ定ムルヲ正當トス、而シテ  
 手数料ノ多少ハ之ヲ行フ政府ヲ知ル所ニシテ、帝國議會ノ敢テ知ル所ニ  
 非テレハ、法律トシテ其ノ協賛ヲ得ルヲ用ヰス、其ノ事業ヲ行フノ職權  
 ヲ法律上ヨリ有スル所ノ行政官廳ニ於テ此ノ法律ニ基テ發スル命令  
 ノ一部トシテ定ムルヲ正順トス。但シ裁判事業ノ如キニ至リテハ直  
 接ニ裁判ヲ仰カサル一般ノ人民モ爲ニ權利ノ安全ニ樂ムヲ得ルカ  
 爲ニ一部ハ一般ノ租稅ヲ以テシ、又一部ハ手数料ヲ以テ其ノ費用ヲ辨  
 スルノ理由アリ、此ノ如キ場合ニ於テ手数料ノ額モ法律ヲ以テ之ヲ定  
 ムルモノハ全費ノ幾分ヲ國庫ノ負擔トスヘキヤヲ決セサル可カレサ  
 レハナリ。其ノ三種ニ元來ハ一個人又ハ社會ノ手ニ於テモ爲スコヲ得可  
 キノ事業ナレバ經濟上ノ便宜ノ爲ニ、國家ニ於テ之ヲ起シテ、入金ヲ領  
 取スル者是レナリ、是ノ類ヲ收納金ト曰フ、例ヘハ官立學校授業料、鐵道



郵便電信ノ收納金、貨幣鑄造ノ其ノ費用、引去ル部分ノ類ナリ。此等モ亦一ニ其ノ事業ノ資本ニ對シテ相當スル所ニ從ヒ收納ノ額ヲ定ム可キモノニシテ、恰モ一個人ノ營業ニ於ケルト同一ナレハ、唯タ國家カ其ノ事業ヲ起スノ可否ニ付キ議會ノ協賛ヲ經タル上ハ、收納ノ高ヲ定ムルハ之ヲ法律例ニ依テ職權ヲ得タル行政官廳ノ命令權ヲ以テ定ムル所ニ任スヘシ、但シ國庫ノ補助ヲ要スル場合ニ於テハ此ハ高モ亦法律ヲ以テ定ムルノ必要アリトス。國債ノ起スハ帝國議會ハ協賛ヲ經テ讀ミ續クル文法ト知ルヘシ。凡ソ國債ハ國家ノ會計ニ不足ヲ生シタル片之ヲ蔽ハシカ爲ニ募集スル所ニシテ、其ノ体裁種種ナリ、雖モ利子ノ住拂ヲ要シ、從テ臣民全體ノ負擔ヲ及ホス。於テ皆一ナリ、是ヲ以テ必ス帝國議會ハ協賛ヲ要スルナリ。

凡ソ公債ノ名ヲ以テスル者ハ外債内債ノ別無ク、又其ノ目的ノ何タルニ依テ、此ノ條ノ範圍ニ屬スルコト勿論ナリ。此ニ一ノ疑問ナルハ、他カラス、國債ヲ起スニ非ズシテ、之ヲ償還スルニ帝國議會ハ協賛ヲ要スルコト否ヤト云フ是レナリ。國債ヲ起スルニ於テ豫メ償還ノ方法期日ヲ定メテ協賛ヲ得、其ノ定メノ如ク償還スル場合ニ於テ、其ノ期年ニ至リ之ヲ歲出豫算中ニ加フルノミニテ足レリト雖モ、若シ此ノ期年前ニ償還シテ、利子ハ總額ヲ減セントスル場合ニ於テハ如何ト云フコト一問題ナリ。普國ニ於テハ是ノ如キヲ豫算外ノ取出ト看做シテ、後日英國會ハ承諾ヲ受クヘキニ決セリ。次ニ名義國債ト異ニシテ、其ノ實ハ無利足ノ國債ナル者ヲ紙幣トス、是レ國債ト均シク、國家ハ受動的資本ニ重大ノ關係ヲ有スルモノナレバ、仮令明文ハ無クモ、此ノ條ノ範圍ニ屬スル者タルコト勿論ナリ、其ノ消却



ノ場合モ亦國債償還ノ場合ニ同シ。又政府ノ負債ニシテ國債ト異ナルモノアリ、即チ財政ノ語ニ於テ「流用公債」ト稱スル者は是レナリ、其ノ注意ハ未タ歳入ノ期日ニ至ラサル前ニ其ノ金額ヲ使用セシカ爲ニ一時ノ負債ヲ起スニ在リ、則チ明治十七年九月廿日大藏省第二十四號布告ニ「大藏省證券ハ出納上ニ時使用ヲ爲メ大藏省ヨリ發行スルモノトス」トアル是レナリ、且ツ其ノ發行シタル年度ノ歳入ヲ以テ仕拂ハ爲スモノトス「トアリテ通例ハ大藏省計算ノ範圍ノミニ屬スル負債ナレハ、帝國議會ノ協賛ヲ經テニ及ボス。然レモ若シ豫算ニ違ヒ之ヲ發行シタル年ノ收入ヲ以テ仕拂ゾノ順ニ至ラサルトキハ、其ノ仕拂ヲ爲シ得ザリシ分ハ轉テ國債由成スノ外無シ、之ヲ流用公債ト整理スト云フ、此ノ場合ニ於テハ後ニ議會ヲ承諾ヲ經テ可カラス。且ツ此ハ如キ負債モ必ス輕少ノ利子ヲ要シ、此ノ利子

ハ到底國庫ノ負擔ト成ルカ故ニ、年々大藏省ハ帝國議會ヲ協賛ヲ經テ其ノ最高額ヲ定メ、之ヲ越エザランヲ要ス。豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルハ、キ契約ハ政府カ臣民ニ般ニ對シテ確定スル權利義務ノ關係ニ非ズシテ、特ニ或ル個人又ハ社會ニ對シテ締結スル所ナリ。例ハ官廳ノ建築ニ關シ請負人ト結フ契約、製造工業ヲ獎勵センカ爲ニ會社ト結フ契約ノ類是レナリ。是ノ内ニ二種アリ、其一ハ年々要スル所ノ額ヲ定知スヘキ者ナリ、是レ無論豫算ニ入ヘシ、例ハ文部省ニ於ル中學校補助金、農商務省ニ於テ年限ヲ定メテ貸付スル産業補助金、内務省ニ於テ年限ヲ定メテ交付スル社寺保存金ノ類是レナリ。其ノ二年々支出シ額ヲ一定シ難キ者ニシテ、其ノ内ニ年々平均ヲ以テ推シテ豫算ヲ立テ得ヘキ者アリ、例ハ廳費旅費營繕費ノ如シ、又豫算ヲ立ツルニ由シ無キ者アリ、



例ハハ鉄道會社、郵船會社等ノ株券證書ノタメニ政府ノ義務トシテ負擔スル金額ヲ如シ。若シ八分以下ニ下落セハ則テ仕拂ノ義務ヲ生ズ。雖モ果シテ下落スルヤ、何時ニ於テ下落スルヤハ豫知シ難キ所ナレハ、之ヲ豫算ニハ入レズ、然レト雖モ其果シテ仕拂ヲ要スルニ至ルモハ國庫ノ負擔ト成ルカ故ニ豫メ帝國議會ヲ協賛ヲ要スルナリ。

但シ契約ト云フ中ニハ外國ノ條約ヲ包含セザルニ注意スベシ。契約ハ國家カ一個人又ハ社會ト結締スル所ナリ、條約ハ國家カ他ノ國家ト結締スル所ナリ、而シテ他ノ國家トナスコトハ憲法第十三條ニ依リ總ヘテ天皇ノ外交大權ニ屬セリ、故ニ例ニハ外國ニ軍費ヲ貸附スル條約又結締等ノ事ヲ法ヲ爲シ國庫ノ負擔ヲ生スルコトアリトモ、帝國議會ヲ協賛ヲ經テ制限ニ非ズ是レ我カ憲法ヲ規定シテ其第十三條

第三百十八

百十九

ニ制限ナキニ因ルコト同條ニモ述べタリ。外務省ノ豫算中ニハ此ノ種類ニ屬スルモノヨリテ帝國議會ノ意見ヲ以テ動カシ難キ者多クアルベシ。但シ條約ヨリ起ル支出ハ既ニ動カシ難キ者トシテ之ヲ支辨スル以テ道ヲ國債ニ依テスルカ、増稅ニ依テスルカ等ハ固ヨリ帝國議會ノ議權ニ屬セリ。

**第六十三條** 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メサル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

租稅ハ第二十二條ニ規定スル所ニ依リ臣民ノ國ニ對スル以テ義務ナリ、國家ヨリ安寧ノ保護幸福ノ増進ヲ受クルノ權利アルニ代ヘテ國家ニ各自財産ノ幾分ヲ呈上スルノ義務アルナリ、故ニ國家ノ事業ヲ繼續スル限リハ此ノ義務ハ繼續スルモノナリ、從テ第六十四條ニ依リ年々豫算改テ帝國議會ニ當テ提出モ法律上既ニ定マレル租稅ニハ修テ



ヲ加フルコトヲ得ス若シ之ヲ減削シ或ハ廢除セント欲セハ豫算ノ外ニ於テ特別ノ法律トシテ之ヲ修改セサル可カラズ。蓋シ歐洲ノ二三國家ノ憲法ニ於テ年々租稅ヲ改議スルノ制アルハ歴史止ヨリ來タルコトニシテ國家ノ實理ヨリ來タルコトニ非ス則チ佛國ニ於テ革命ノ時此ノ制ヲ立テ以テ政府ヲシテ立法會議ヲ開カサレハ則チ人民ニ納稅ノ義務無カラシメタルカ如キハ全ク年々國民集會ヲ開クヘキ人民ノ權利ヲ保護セントスルノ目的ニ出テタルモノニシテ財產上必スモ斯クスヘキ所以ノ者アルニ非ス然ルヲ今ニ白耳義ニ於テ此ノ制ニ倣ヒ以テ之ヲ墺地利ニ傳ヘタルモノナリ。但シ始メ佛國カ此ノ制ヲ採リタル目的ノ年々開會ヲ保證スルニ在リタルコト當時ノ文書灼然タリ即チ千七百八十九年七月廿九日ノ會議ニ於テクレルモトニ子孫ニ傳ルナル議員カ原案調査ノ報告ニ於テ余輩亦此ノ一條

ヲ以テ我カ國民會議ノ永續ヲ保證スル所以ハ最モ確實ナル手段ト爲ストト明言セリ而シテ此ノ說ノ源ヲ尋ヌレハ則チモンテスキヤトノ萬法精理第十一篇第十六章ニ見エタル三權ヲ分割シテ互ニ他ヲ侵サズシムルヲ以テ國家政体ノ至極ト爲シタル論ニ在ルナリ。

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ每年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

豫算ノ何タルヤ近年ニ至ルマテモ大ニ議論ノアル所ニシテ其ノ物ヲ謂ヘハ國家年々ノ歲出歲入ヲ豫メ計算シテ一ノ通覽ニ便ナル表ト爲シタルモノナレトモ夫レスラ英國ニ於テハ古來豫算ノ名ヲ用ユルノミ曾テ一冊ノ表ヲ製セス又其ノ目的ニ至リテ各國取ル所ヲ異ニスル



モノ是ヨリ大ナルハ無カルヘシ。故ニ我カ憲法ノ條項ニ依レハ其ノ性質目的ノ在ル所ハ然々ナリトイフコトヲ究定スルノ必要實ニ大ナリ。

前條陳述スル所ニ依レハ、佛蘭西、白耳義、墺地利ノ三國ニ於テハ豫算ヲ以テ政府カ年々租稅ヲ人民ヨリ徵スルノ權利ヲ得ル所以ノ者ト爲ス。トテ知ルヘシ。此ノ制ニ依レハ、假令法律ヲ以テ稅率ヲ定メオクモ、之ヲ格段ナル一年ノ豫算ニ載セテ議會ノ協贊ヲ經ルニ非サレハ政府ハ其ノ年度ニ於テ之ヲ徵集スルコトヲ得ス、即チ豫算ハ徵集權ノ基本ト爲レリ。然ルニ豫算ヲ以テ此ノ目的ニ出ツル者トナスハ國家ノ實理ニ背キ立法部ナシテ其ノ有スルノ理由無キ權利ヲ有セシムル者ナリト云フ論獨乙國權學上ノ間ニ頗ル起レリ、其ノ故ハ元來豫算ナル者ハ多少確定セル歲入ノ有ルニ依リ之ヲ基本トシテ爲スモノニシテ、若シ一

切ノ歲入不定ナルモ豫算ナル者ハ立チ難シ、歲出ニ於テモ亦然リ。且ツ國家ノ事業ハ必ズ歲出ヲ要スルヲ以テ、人民ニ其ノ財產ノ幾分ヲ出サシメテ之ニ當ルハ年々ノ協贊ヲ竣タスシテ既ニ定マリタルコトナリ、即チ我カ邦ニ於テモ憲法第廿一條ニ豫算ニ依リ納稅シ義務アリトハ記セス、他國ニ於テモ又然ルカ故ニ、此ノ分ノ歲入ハ豫算討議ノ時ニ當リ帝國議會ニ於テ破棄スルコトヲ得ス。其ノ之ヲ破棄スル能ハサル所以ノ者ハ、國家ノ一部タル議會ニ於テ其ノ全体ノ資力ヲ破棄シテ國家ノ事業ヲ中止スルコトヲ得サルニ由ル。故ニ各國ノ議會ニ豫算協贊ノ權利アリ、從テ又不協贊ノ權利モ有リト雖モ、其ノ不協贊ハ決シテ既ニ法律ヲ以テ定マレル歲入ニマテモ及フコトヲ得ス、之ヲ廢止セント欲セハ必ズ豫算ヲ立ツルノ前ニ於テ特別ニ立法上ノ手續ヲ經サル可カラス。歲出ニ至リテモ亦然リ、既ニ法律若クハ法律ノ結果トシテ定



マレル上ハ議會ノ協賛如何ニ拘ラス、國家ノ義務ハ即チ義務ナレハ、豫  
 算上ノ都合ヨリシテ之ヲ廢止ス可カラズ、若シ廢止セシムル欲セハ豫算  
 ナ立テサルノ前ニ特別ニ立法上ノ手續ヲ爲サバ可ラス。故ニ豫算  
 ニ對スル不協賛ハ是等ノ義務ニシテモ及ブコトヲ得サルナリ。  
 次テ今若シ豫算表ヲ作ルニ於テ憲法法律ニ依ル歳入ソ外ハ一モ加  
 ス、又憲法法律ニ依ル歳出ソ外ハ一モ立テサルコトヲ爲スヲ得可カリセ  
 然ルニ茲ニ第二  
 別ニ帝國議會ノ協賛ヲ得ルヲ要セサルナレハシ。然ルニ茲ニ第二  
 ノ事情アリ、即チ政府カ憲法法律上ニ於テ必要トスル歳出ソ外ニ更ニ  
 事業ヲ起シ、之カ爲ニ必要ナル費用ノ出途ヲ豫算ニ加ヘテ帝國議會ノ  
 協賛ヲ得シトスルヨリ起ル事是レナリ、之レ經濟上止ムヲ得サルコト  
 ス。國家ノ事業ハ年々多少ノ變易アルニ自然ノ勢タルヲミナラス、  
 又現ニ政府ハ法律ノ定ムル所ソ外ニ於テ公共ニ安寧秩序ヲ保持シ及

臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ト認ムル所ニ關シ命令ヲ發シ事業ヲ  
 起スル權利(帝國憲法第九條)アルカ爲ニ、憲法法律ノ上ヨリ定マレル外  
 ニ於テ歳入ヲ要スルコト必ス有ルヘク、或ハ舊來ノ事業ノ或ル部分ヲ縮  
 ヲテ他ノ部分ヲ擴メ此ニ其ノ費金ヲ轉用スル等ノ企テ爲スヘシ。此  
 ノ方向ニ出ツル歳出歳入ハ前種ト全ク原則ヲ異ニシ、國家既定ノ權利  
 義務ニ基クモノニ非ス、全ク政府ノ計畫ニ出ルモノナレハ、之ヲ區別シ  
 テ考フルコト必要ナリ。即チスタイン、グナイスト等ノ財政學說ニ依ル  
 ニ、諸國憲法ニ於テ通シテ豫算ト云フ者ノ中ニ自ラニシテ相異ナル部分  
 アリテ、未タ名義上ヨリ之ヲ區別スルニ至ラサルモ、實際上ニ於テハ既  
 ニ區別アリ、而シテ此ニ部ハ全ク相異ナル目的ニ出ラハ、亦全ク法理ヲ  
 異ニスルモノナレハ、能ク其差別ヲ辨識セシムルヲ要ス、今假リニ名ヲ  
 設ケテ一チ國家ノ豫算ト曰ヒ、他ヲ政府ノ豫算ト曰フヘシ、國家豫算ト



ハ法理上ニ於テ既ニ一定セル國家ノ歲入ヲ以テ同シク法律上ヨリ一定セル國家ノ歲出ニ使用スルノ計畫ヲ曰ヒ、政府豫算トハ未タ法律ヲ以テ一定セサル歲入ヲ得テ未タ法律ヲ以テ一定セサル歲出ニ當用セシトスルノ計畫ヲ曰フナリト。

夫レ然リ國家豫算ハ既定ノ法律ニ依ルモノナレト、政府豫算ハ全ク信用ニ依ルモノタル事是レ兩者性質ノ異ナル所ナリ、即チ國會ハ行政ノ實地ニ當ラサルカ故ニ、大臣ノ主張スル所果シテ必要ナルヤ否ヤヲ確定スルヲ得ス、其ノ外ニ於テ更ニ必要ナルモノアルモ計ラレサレハ大臣ノ主張スル所ニ協賛スルハ全ク大臣ヲ信用スルニ依ルモノトス、此ノ點ニ注意スヘシ。

サテ原則ニ於テ既ニ豫算ニ此ノ二種アルヲ以テ實地ニ於テ此ノ二種ヲ區別シテハ國會ニ通知スルノ外別ニ協賛ヲ要セサルモノトシ、他

チ其ノ討議ニ附スルコトセハ大ニ混雜ヲ省クコトヲ得ルヤ必セリ。然リト雖モ實地上ニ於テハ未タ之ヲ分離スルニ至ラス、亦甚タ分離シ難シト爲ス所以ノ者アリ。其ノ故ハ政府各省ノ事務ノ各項各目ニ就キ此ノ點マテハ從來ノマ、ニシテ此ノ點ヨリハ新奇ノ事業ナリト分別スルコト難ク、且ツ之ヲ分割セシムルハ立法ノ得策ニ非サル所以ノ者アレハナリ、其ノ之ヲ得策トセサル所以ノ者ハ他無シ、一方ニ於テ事業ヲ縮メテ生スル所ノ剩餘ヲ以テ翌年ニ至リ事業ノ他ノ部分ニ轉用スルノ自由アレハコソ政府ヲシテ節儉ヲ勉メシムルニ至シルナレト、一方ニ於テ縮ムルハ勝手ナルモ得ル所ノ剩餘ヲ他ニ轉用スルコトハ或ハ國會ノ協賛セサル所トナリ、縮メ損トナルヤモ知レストスル所ハ成ル可ク不用ノ費途ヲ省カントスルノ熱心ヲ生セサル可ケレハナリ。

姑ク各國ノ實況ニ就テ之ヲ見ンニ獨リ英國ニ於テハ實地ニ於テ二種



ノ歳出歳入ヲ區別シ、年々總額ノ中既ニ動カストスル七分ノ六ハ毎年  
 討議ニ附スルヲ無ク、特ニ七分ノ一ヲ海軍費、陸軍費等ノ數款ニ分チ各  
 款ニ就テ別ニ議事ヲ開キテ國會ノ承諾ヲ經ルコトシ、別ニ豫算表ト稱  
 スル一冊ノ帳簿ヲ作ルヲ無シ。然レモ他ノ諸國ニ於テハ二種ノ豫算  
 ヲ混同ノ一トセシヨリ茲ニ一ノ不都合ヲ生シタリ、即チ其ノ内ノ或ル  
 部分ニ就キ政府ヲ信用セサルモ爲ニ此ノ部分ノミヲ否決スルノ運ニ  
 至ラス、全体ヲ否決スルニ至レル是レナリ。是ヲ以テ北獨乙聯邦ノ會  
 議ニ於テ始メテ豫算ニ此ノ二事ノ混淆セルヲ指示シ、英國會計法ノ  
 善ク實理ニ合シ國權ニ稱ヘルヲ主張シタルハ、グナイストノ國權學  
 上ニ大功ナル所以ナリ、其ノ後氏ノ意見ハ「豫算及法律」ト題スル一冊ノ  
 書トナリテ世間ニ在リ。普魯西ニ於テモ憲法第九十九條ト百〇九條  
 トノ關係ニ付キ爭論ヲ起シ、ロエンチハ第百〇九條ニ「現行ノ租稅ハ舊

百二十八

六十五

ニ依テ收入スヘシトアル現行ノ二字ヲ憲法發布ノ時ト云フ義ニ解シ  
 豫算表ニ載セタル者ハ始メ法律ニ依テ定メタル歳入ト雖モ年々議定  
 スヘシト論シタリ、然レモグナイスト、シユルチエ、ラバンド、マルチツ、ハ  
 是レ永久ノ義ナリト云ヘ、其ノ論未タ歸着スル所無ケレト、實際ニ於テ  
 ハ法律ヲ以テ定メタル租稅ハ年々引續キ徵收セリ。一  
 サテ日本ニ於テハ如何ト云フニ第六十三條ニ「現行ノ租稅ハ更ニ法律  
 ヲ以テ改メサル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス」トアルニ依リ一旦法律ヲ以  
 テ定メタル租稅ハ帝國議會カ豫算ヲ協賛スルト否トニ論ナク徵收ス  
 ルノ規定ナリ、是ヲ以テ歳入豫算ノ國家ニ屬スルモノハ確實ナリ。又  
 歳出豫算ニ至リテモ第六十六條第六十七條及第六十八條アルヲ以テ、  
 其ノ國家ニ屬スル分ハ動クヲ無シ。故ニ日本ニ於テモ協賛不協賛ノ  
 及フ所ハ歳入中第六十三條ニ該當セサル部分及歳出中ノ第六十六、六



十七、六十八ノ三條ニ該當セサル部分ノミニ限ルヘシ。若シ此ノ範圍内ニ於テ折合ヒ付ケハ宜シ、付カサレハ則チ第七十一條ニ依リ前年ノ豫算ヲ用ウルナリ。

サレハ殊サラ年々豫算ヲ議定スルニ何ノ目的アルカ、憲法第六十五條ハ全ク其ノ用無キモノナルカト云フニ、然ラス之ニ少ナク凡三ノ要アリ左ノ如シ

(一) 年々ノ収入費用ヲ概知スルコト。蓋シ國家ノ歲出歲入ニシテ年々一定ナカリツランニハ是レヲ以テ彼レニ當テ不足ハ一定ノ方策ヲ以テ補フトシテ永ク同一ノ計算ヲ用フルヲ得ヘシト雖モ、其ノ必ス年々ニ變動アルハ自然ノ勢ナリ。故ニ毎年ノ始メニ於テ過去ノ經驗ト將來ノ推測トニ依テ其ノ年中ニハ幾何ノ收入アリテ幾多ノ支出アリト云フコトヲ概算シ、不足アラハ豫メ其ノ備ヲ爲シテ成ルヘキ丈ケ收入支

六十六

六十七

出ノ相平稱センコトヲ計ラサル可カラス。即チ豫算ハ毎年ノ出入ヲ通觀シテ不足アラハ之ヲ補充スルノ道ヲ豫定センカ爲ニ必要ナルモノトス

(二) 行政事業ノ範圍ヲ定ムル事。以上ハ國家全体ノ上ニ就テ言フコトナルカ、次ニ國家ノ事業ヲ執掌スル各省ノ行政官吏ニ關シテモ豫算ノ効ハ自ラ多シ、即チ國家ノ爲ニ成ル可ク充分ノ事業ヲ起サントスルハ各自ノ熱心スル所ナルカ、其ノ費用ニ至リテハ熱心ヲ以テ造作ス可キニ非ス、國家カ或ル一年ニ於テ使用スルコトヲ得ルノ額ハ一定シ從テ其ノ格段ナル事業ノ爲ニ用ウルコトヲ得ルノ額モ一定セルヲ以テ平生ニ此制限ヲ越エサランコトヲ督制スル者ヲ要スル事言フ埃ダス。一定ノ企畫アルニ非サリセハ諸署ニ於テ色々緊要ナル起業ノ必要ヲ見テ費用ヲ請求ヲ爲スニ當リ主務官ハ之ヲ許可スヘキヤ否ヤヲ決スル所以ノ



者無カラントス。即チ豫算ハ行政事業ヲ箝制シテ之カ爲ニ臣民ノ財  
 カチ消費スルヲ成ル可ク少クスル所以ノ者ナリ。  
 (三) 監督ノ本據ト爲ル事。右ト親密ノ關係アル合一ノ點ハ他無シ豫算  
 アレハ行政官吏ハ其ノ當ニ據ルヘキ所ノ者アルカ故ニ年度ヲ終リテ  
 後其ノ果シテ豫定ノ條項ニ從ヒタルヤ否ヤヲ判定シ若シ從ハサリシ  
 トキハ何等ノ必要アリテ違法ノ處分ヲ爲シタルヤヲ糾問スルノ標準  
 ト成レリ。豫算ハ各省大臣ノ使用スルノ權利アル所ト其ノ無キ所ト  
 ノ限界ヲ立ツル者ナルカ故ニ若シ之ヲ超過スルハ即チ辨明マテ承  
 諾ヲ得ルノ責任ヲ生スルナリ。  
 此ノ一項ハ後ノ第六十九條ト相待テ豫算ニ不足ヲ生シタルハ其ノ處分  
 ナ確定スルモノナリ。凡ソ豫知ス可カラサル會計ノ不足ハ左ノ二種  
 ノ一カニ出ツヘシ。

六十八

六十九

(一) 収入ノ額ノ豫算ノ款項ニ達セサル事(スタインハ之ヲ會計上ノ不  
 足ト云フ)。  
 (二) 支出ノ額ノ豫算ノ款項ニ超過スル事(スタインハ之ヲ行政上ノ不  
 足ト云フ)。  
 然ルニ此ノ項ニ於テハ只タ第二ノ場合ノミヲ擧ケテ第一ノ場合、即チ  
 敢テ豫算ノ款項ニハ超過セザレド歳入ノ豫定ノ額ニ達セザリシヨリ  
 來ル不足ヲ言ハス從テ第六十九條ニ依リ豫備金ヲ以テ之ニ充テタル  
 場合ニ於テ帝國議會ノ承諾ヲ經ンコトヲ要スルヤ否ヤハ一ノ疑問ト爲  
 レリ。本條ノ字面ヨリ言ヘハ款項ノ超過ニハ承諾ヲ要スルモ其ノ不  
 及ニハ承諾ヲ要セサルニ似タリ。然レド不及モ豫備金ヲ以テ之ニ充  
 ツルノ外無ク總ヘテ豫備金ヲ以テ支辨シタル者ハ會計法第八條ニ依  
 リ帝國議會ノ承諾ヲ要スルカ故ニ此ノ一條ハ少シク會計法ト齟齬ス



ルノ疑アリ。

款項超過ノ場合ニ於テハ事業ハ同一ニシテ費用ノミ始メノ見積リニ越エタルモノナレバ節約ノ如何ニ關スル問題ト成ル可ク、政府ハ節約ニ於テ怠ル所無カリシトテ證明セサル可カラス。之ニ反シ豫算ノ外ニ出テタル支出ニ至リテハ、更ニ事業ヲ起シタルニ因ルコトナレバ其ノ事業ノ必要ナリシ所以ヲ辨明セサル可カラス。帝國議會ハ承諾ヲ求ムルヲ要ストハ即チ此ノ二ノ一方ヲ辨明スルヲ曰フナリ。サレハ此ノ辨明ノ任ハ誰レニ在ルヤ將タ若シ承諾ヲ得サルハ其ノ結果如何ト云フ事ヲ論究セザル可カラス。

第一ニ一省ノ大臣カ其ノ省ノ定額中ニ於テ甲項ニ不足ヲ生シタルハ乙項ノ剩餘ヲ以テ之ニ充ツル場合ニ於テハ其ノ大臣一人ノ責任ヲ以テ自ラ國會ニ對シ之ヲ辯明セサル可カラス。但シ豫算ヲ款項節目ニ

七十

七十二

分チ其ノ節目ハ流用ヲ許スモ款項ノ流用ヲ許サ、ルコト會計法第十二條ニ明文在リ然レモスタインニ依レハ是レ各國ニ於テモ實行セント欲ノ到底實行シ難キヲ發見シタルノ一點ニシテ、現今ハ流用シタル大臣ニ於テ自ラ其ノ責ニ任スレハ即チ流用スルモ可ナリト爲スニ至レリ。但シ其ノ省ニ豫備金ノ備ヘアルノ大臣ハ不足ノ場合ニ於テ流用ヲ爲サス此ノ豫備金ヲ以テ支辨ス可キト勿論ナリ。此ノ序ニ機密費ニ關シ一言ス可キモノアルハ他無シ、西洋各國ニ於テハ大臣ヲシテ機密費ニ對シ一切ノ責任ヲ負ハシメズ、只タ之ヲ私用セシヤノ嫌疑アル場合ニ於テノミ刑事ノ手續ヲ以テ糾問スルコトヲ得ルモノトスルト是レナリ。議會ニシテ機密費ノ減額ヲ請求スルハ可ナリ、其ノ説明ヲ求ムルコトヲ得ス。

サテ次ハ一省ノ大臣カ其ノ省ノ定額ニ不足ヲ生シタルカ爲ニ大藏大



臣ニ豫備費ノ内ヲ以テ支辨セントテ請求スルノ場合ナリ。大藏大臣ニシテ若シ此ノ請求ヲ至當トシテ同意スルハ、相俱ニ帝國議會ノ承諾ヲ請求シ、相俱ニ其ノ責ニ任ス可シ。然レモ實地ノ支拂ニ付會計検査院ノ検査ニ對シテ其責ニ任スヘキ者ハ則チ請求ヲ爲シタル大臣ノミナリトス。

大藏大臣ニシテ若シ國庫豫備金ヲ以テ此ノ請求ニ應スヘキノ理由ヲ見サルハ之ヲ拒絕スヘシ、然ルハ請求シタル大臣ヨリ内閣ニ就テ判斷ヲ乞フノ外無シ。内閣ニシテ若シ此ノ請求ヲ正當トセハ則チ大藏大臣ニ豫備金ノ支出ヲ命スヘシ、是ニ於テ大藏大臣若シ不服ナルハ其職ヲ辞セサルヲ得ス。此ノ場合ニ於テ帝國議會ニ對シ必要ヲ辯護スルノ義務ハ請求ヲ爲シタル大臣ニ在リテ、責任ハ内閣全体ニ在リ。サテ承諾ノ一点ニ至リテハ素ヨリ帝國議會ノ自由ニ在ルヲ以テ、必ス

シモ之ヲ得ルヲ期シ難シ、故ニ實地ニ至リテハ未タ豫算外ノ事業ヲ起サハルノ前ニ先ツ議院ノ決議ヲ經ルノ便利ヲ知ルニ至ルヘシト雖モ、又苟モ法律又ハ法律ノ結果タルヲ辨スヘキ場合ニ於テハ國務大臣ハ辯明ノ本據ヲ此ニ取ルコト必然ナリ然ルハ議院ト大臣トノ意見ノ差ハ此ノ事業ヲ法律ノ結果又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル者ト爲スヤ否ヤト云フ点ニ歸スヘシ。此ノ点ニ歸スレハ則チ裁可ヲ天皇ニ仰クノ外無ク天皇ハ樞密院ニ命シテ之ヲ審議セシメ玉フ可シ、獨乙諸邦ニ於テハ之ヲ國務裁判所ノ裁判ニ附セリ、而シテ國務大臣ノ意見ヲ正當トスルニ判定セハ則チ議院ヲシテ必ス承諾セサルヲ得サルニ至ラザルヘシ。若シ又此ノ意見正當ナラストスルニ決定スルハ責任ノ大臣ハ其ノ職ヲ辞スルノ外無カラシ。以上ハ財政處分ニ關スル責任ノ大要ナリ。



始メ憲法第六十一條ヲ解釋スルヤ行政裁判法ハ未タ發布ナラス從テ  
 同裁判ニ關シ日本國法ニ於テ取ルニキノ方針モ一定セサリシニ因リ  
 一般ノ解釋ニ止メタルカ廿三年六月卅日法律第四十八号ヲ以テ行政  
 裁判法ヲ發布セラレ、次テ本日、即チ廿三年十月十日ヲ以テ訴願法ヲ發  
 布セラレタリ、是ニ於テ行政裁判ノ制度ニ於ケル本邦ノ主義ハ既ニ一  
 定シ且其ノ事極メテ重要ナルヲ以テ茲ニ稿ヲ繼テ第六十一條ノ解釋  
 ヲ補修スルノ必要ヲ見ルナリ。

○行政訴訟ト訴願トノ關係  
 訴願トハ下級行政廳ノ爲シタル處分ニ  
 對シ其ノ上級行政廳ニ對シ故障ヲ申立テ、裁決ヲ乞ヒ、若此ノ裁決ニ  
 不服アルトキハ更ニ其ノ上級行政廳ニ訴願セシムルヲ云フ、而シテ盡  
 ク等次ヲ經由シタルノ後始メテ行政訴訟ヲ提起シテ正式ノ裁決ヲ經

七十四

七十五

シムルヲ常トス其ノ理由左ノ如シ。

抑行政廳ノ組織ハ必ズ幾重ノ階級ヲ爲スモノナリ、而シテ下級ノ行政  
 廳ハ職權ヲ其ノ上級ノ行政廳ニ受テ、此ノ職權内ニ於テ自由ニ方法ヲ  
 定メテ上級行政廳ノ命令ヲ執行スルノ任ニ居ルモノナリ、故ニ格段ナ  
 ル場合ニ於テ其ノ處分ニ依リ過當ニ臣民ノ權利自由ヲ制限シタルト  
 キハ必ズ一ノ疑團ヲ生セサルヲ得ス、即チ此ノ不當ノ處分ハ上級廳カ  
 下級廳ニ下シタル命令ノ不當ナリシニ因ルヤ、將テ上級廳ノ命令ハ正  
 當ナルモ下級廳ノ職權内ニ於テ自由ニ定メタル執行ノ方法ノ不當ナ  
 ルニ因ルヤト云フ是レナリ。前ノ場合ニ於テハ上級廳ニ於テ愁訴ノ  
 衝ニ當ルヘク、後ノ場合ニ在テハ下級廳ニ於テ之ニ當ルヘシ。是ヲ以  
 テ先ツ處分ヲ爲シタル最下級ノ行政廳ヲ對手トシテ其ノ直接上級ノ  
 行政廳ニ訴願シ、上級廳ニ於テ其ノ處分ヲ不當トシテ破毀シ又ハ變更



ヲ命スレバ宜シ、若尙ホ上級廳ニ於テモ願意ヲ容レサルトキハ之ヲ對  
 手トシテ更ニ其ノ上級廳ニ訴願シ、等次ヲ盡シタルハ後始メテ裁判ノ  
 手續ヲ經ルヲ必要トスルモノナリ。  
 行政事件ニ於テ斯ク等次ヲ經由セシムルノ必要ハ之ヲ行政事件ヲ裁  
 判スル所以ノ例規ノ性質ニ照セバ則チ更ニ明白ナルヘシ。若行政上  
 一切ノ例規ニシテ民事刑事ニ關スル例規ノ如ク一定ノ成典トシテ官  
 民ノ普ク伺ヒ知ルコトヲ得ヘキ所ナランニハ初發ヨリ正式ノ裁判ニ  
 附スルモ可ナリト雖、其ノ實行政上ノ例規ハ普通法上ノ例規ト大ニ異  
 ナリテ、一部分ハ上級廳ノ下級廳ニ對シ發スル命令、指令、訓令ノ類ヨリ  
 成立チ、直接ニ人民ノ伺ヒ知ルヲ得サル所タルコト多シ、又行政裁判官  
 トイヘル悉ク之ヲ知ルコトヲ得ス、何トナレハ其ノ多クハ時宜ニ依リ  
 行政權ヲ以テ自由ニ變更改修スルコトヲ得ル所ニシテ、或ハ全ク文章

ヲ存セズ、言達ヨリ成立ツモノスラモ有ル可ケレハナリ。是ヲ以テ或  
 ル格段ナル行政處分ニ依リ一個人ノ權利ヲ損害シタル場合ニ於テ其  
 ノ處分ノ不當ナルハ明白ナルモ、是レ下級廳ノ職權ヲ以テ自ラ定メタ  
 ル處分方法ノ不當ナルニ依ルカ、或ハ又上級廳ヨリ下シタル訓令ノ違  
 法ニ涉レルニ因ルカハ常ニ一ノ疑問ナラサルヲ得ス、例ヘハ下級廳ハ  
 上級廳ノ命令ヲ奉行セシカ爲ニ臣民ノ權利ヲ制限シタリト辯解スル  
 モ上級廳ニ於テハ斯クマテ臣民ニ損害ヲ加ヘテモ尙ホ此ノ命令ヲ執  
 行セシムルノ意ニ非サリシヤモ計ルハカラス、即チ下級廳ノ自由ニ定  
 メタル處分方法ニ於テ違法ニ涉レル場合ニ於テハ上級廳ハ其ノ職權  
 ヲ以テ此ノ違方處分ヲ破毀シ、更正セシムルコトヲ得ヘキカ故ニ殊サ  
 ラ、正式裁判ノ手續ニ依ルヲ用弁ス、是レ即チ行政訴訟ヲ提起スルノ前  
 先ツ訴願ヲ提起セシムルヲ例トスル所以ナリ。



獨乙行政學者レオニングノ説ニ依ルニ下級廳ニ對スル訴願ヲ裁決スルヲ以テ上級行政廳ノ義務ナリトスル所以ノ者ハ他無シ、概シテ行政ノ合法ニ且適當ニ行ハレル事ニ就キ常ニ下級廳ヲ監督スルハ上級廳ノ義務タリ、從テ其ノ職權タルニ因ル。凡ソ行政廳ハ國家ノ利益ヲ主一ノ目的トスヘキモノナリ、故ニ其ノ職權内ニ於テ國家ノ利益ヲ爲シ何事ヲ爲スモ宜シトイハレ十分ノ必要ナクシテ一個人ノ權利ヲ侵サズ、且其ノ方策ノ當ヲ失セサルノ義務アリ、是レ訴願裁決ノ義務ヲ由テ起ル所ナリト。

此ノ次第ナルヲ以テ今回發布ノ訴願法第二條ニ規定シテ曰、  
 訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ  
 訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決

ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ  
 國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ  
 但シ末項ノ有ル所以ノ者ハ他ナシ自治ノ行政ニ於ケル訴願ノ等次ハ市町村制ニ於テ既ニ定レリト雖モ市町村ニ委任スル國ノ行政ニ就キテハ等次ノ關係未タ一定セス、郡參事會又ハ市參事會ニ對シテハ府縣廳モ又上級行政廳ナレハ府縣參事會モ亦均シク上級行政廳タレハ茲ニ其ノ一方ヲ指定スルノ必要ヲ見タルニ因ル、而シテ參事會ナル合議体ニ於テ爲シタル處分裁決ニ對スル訴願ハ又合議体ヲシテ之ヲ裁決セシムルヲ適當トスルニ因リ、府縣參事會ヲ上級廳ト見做スニ一定シタルナリ。且夫レ合議体ノ評議ヲ以テ爲シタル裁決ハ之ヲ單獨官吏



ノ爲セル裁決ニ比スレハ一層精確ナリトスヘキヲ以テ同法第四條ニ至リ第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其ノ件事ニ付更ニ訴願スルコトヲ得スト爲シタリ是レ專ラ普魯西ノ制度ニ倣ヘルモノト知ラレタリ。

又訴願ニ關シスタインノ新版行政學ニ見エタル論說ニ曰行政權ノ運用ニ依リ一個人ノ權利ヲ害セラレタルコト現然タル場合ニ於テハ直ニ之ヲ裁判ニ付スルモ不可ナシトイヘ元來行政ノ事業ハ一個人ノ權利ヲ制限シテ國家公共ノ利益ヲ計ルノ主義ニ出テサル者ナリ正當ノ職權ニ出ツル權利財産ノ侵襲ハ固ヨリ一個人ニ於テ之ニ對シ故障ヲ入ル、ノ權利ナキモノトス而シテ孰レノ場合ハ合法ノ侵襲ニシテ孰レノ場合ハ不法ノ侵襲ナリヤハ常ニ甚タ識別シ難シ其ノ故ハ普通ノ場合ニ於テ權利ハ法律ニ依リ定マルトイヘ凡國家ノ行政ニ對スル

一個人ノ權利義務ハ眞ノ法律ノ外又命令告達ノ類ニ依リ定マレハナリ。最下級行政廳ノ告示ノ類ニシテモ合法ノ職權ニ出ツルニ於テハ以テ之ニ關スル一個人ノ權利義務ヲ畫定スル所以ノ者ト爲レリ。而シテ其ノ合法ナルト否トハ上級廳ノ命令ニ準合シ且上級廳カ此ノ命令ヲ執行スル爲ニ必要ナリト認ムル所ノ分限内ニ於テ一個人ノ權利ヲ制限スルニ在リ。故ニ孰レノ場合ニ於テモ先ツ發令ノ源ニ溯リテ審査ヲ請ハサル可カラズ。一個人トシテハ行政廳カ一般利益ノ爲ニ發令スル所ニ故障ヲ容ル、ノ權ナク唯々此ノ權ノ生スルハ下級廳カ上級廳ノ命令ヲ執行スル爲ニ取ル所ノ方便ニ於テ上級廳カ此ノ命令ヲ以テ一般利益ヲ計ル爲ニ必要ナリト認ムル所ヨリモ餘分ニ臣民ノ權利ヲ減縮シタル場合ニ在リトス。是ヲ以テ先ツ直接上級ノ行政廳ニ對シ其ノ處分ノ果シテ命令ニ準合スルヤ否及上級廳ニ於テ此ノ命



令ヲ實施スルニ必要ト認メタルニヨリ餘分ニ一個人ノ權利ヲ制限スルコトナキヤ否ヤノ審定ヲ請フサル可カラス之ヲ訴願ト云フト是レ即チスタインノ論說ナリ。是ヲ以テ氏ノ行政訴訟ノ前ニ先ツ訴願セシムル填國ノ法ヲ以テ最モ道理ニ合ヘリトセリ。即チ奧太利行政裁判法第五條ニ曰「訴訟ハ行政上訴願ノ等次ヲ全ク履マサレハ之ヲ行政裁判所ニ提出スルコトヲ得ス」ト而シテ本邦ニ於テモ大体ハ此ノ主義ヲ取り行政裁判法ノ第十七條ニ左ノ如ク規定シタリ曰「行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除クノ外地方上級行政廳ニ訴願シ其ノ裁決ヲ經タル後ニ在サレハ之ヲ提起スルコトヲ得」ト。又ハ内閣直轄官廳又ハ地方上級行政廳ノ處分ニ對シ

テハ直ニ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得各省又ハ内閣ニ訴願ヲ爲シタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス。但シ右第十七條ノ第二項第三項ハ前文ニ述ヘタル例ニ對スル一ノ變則ニシテ其ノ目的ハ國務大臣ノ裁決ト行政裁判所ノ判決トノ撞着ヲ避クルニ在リ。先ツ各省大臣ノ處分ニ就キ之ヲ述ヘシニ此ノ場合ハ上級廳ニ訴願センニモ上級廳ニ當ルモノナシ、蓋シ内閣ハアレトモ是レ内閣直轄官廳即チ舊臨時建築局及當時内務省ノ直轄ニ移リタル鐵道局ノ尙ホ内閣ニ隸屬セン頃ハ該局ニ對シテ上級廳タリシノミ、其ノ他各省ニ對シテハ上級廳ノ地置ニ立ツモノニ非ス。内閣ハ國務上ノ機關ニシテ行政事務ノ官衙ニ非ス、又人民ト直接ノ關係ナシ、故ニ行政裁判法ハ各省大臣ノ處分ニ對シテハ訴願ヲ經ス直ニ行政訴訟ヲ提起



スルコトヲ許シ、其ノ事件ノ裁判ノ性質ニ適セス、又ハ人民ニ於テ裁判ノ手續ヲ經ルヲ望マサル場合ニ於テハ、訴願法第三條ニ依リ直ニ其ノ大臣ニ訴願スルコトヲ許シ、而シテ右第十七條ノ末項ニ於テ一旦訴願シタルトキハ、既ニ行政訴訟ヲ許サ、ルノ制ヲ取ルモノナリ、是レ一ニ各省大臣ノ裁決ト行政裁判ノ判決トノ二途ニ出テシコトヲ避クルノ目的ニ出ツルモノニシテ、現時ノ理論ノ一般ニ宜シト認ムル所ナリ。其ノ地方ノ上級行政廳(即チ府縣廳)ノ處分ニ關シテモ、人民ヲシテ大臣ニ訴願スルカ、又ハ行政裁判ニ付スルカノ一途ヲ擇マシメ、訴願ヲ經タル後行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得シメサルモ、同シ理由ニ依ルナリ。一訴願ノ行政裁判ニ對スル關係ハ、則チ上述ノ如クナリトシテ、其ノ裁決ノ手續ヲ此ノ序ニ述ヘントス、然ルトキハ、亦以テ我カ訴願法ノ特異ノ性質ヲ知ルニ便ナルヘシ。即チ上述ノ如キ訴願ノ本旨ヨリ言ヘハ、凡

ソ行政ノ處分ニ依リ不當ニ權利ヲ限縮セラレタリトスル場合ニ對シテハ、普ク訴願ノ權ヲ與ヘ、特ニ數種ノ事件ノミニ之ヲ限ラサルヲ正當トス。行政裁判コソ頗ル嚴重ノ關係ニ出テ、多少行政ノ發動ヲ束縛スルモノナレハ、特ニ重要ナル場合ニ限リテ之ヲ許スノ理由ナキニ非ストイヘ、且訴願ニ至リテハ、願意ヲ許可スルモ拒絶スルモ行政廳ノ全權ニ屬スルヲ以テ、一般ニ之ヲ許シタリトテ不便ナルベキ理ナリ。然レモ、又一方ヨリ見レハ、訴願チ一ノ權利トシテ、人民ニ與フルハ、則チ一定ノ規矩ニ準シテ裁決ヲ爲スノ義務ヲ行政廳ニ負ハシムルモノナリ、而シテ人民ノ行政處分ニ對スル不服故障ヲ一々定式ニ從ヒ裁決スルニ於テハ、維レ日モ足ラヌシテ、爲ニ行政ノ澁滯ヲ來タスノ事實アルヲ以テ、諸國ノ主義ハ、二様ニ分レタリ、則チ一般ニ訴願ヲ許ストイヘ、且定式ノ裁決ヲ爲ス場合ハ、之ヲ制限シ、其ノ他ハ尋常ノ指令ニ止メ、別ニ



下級廳ノ答辯書ヲ徵セス又指令ニ理由ヲ付セサル是レナリ是レ埃太  
 利ノ主義ニシテ稱シテ訴願ノ概括法ト謂フ。該國ニ於テハ慣例ニ依  
 リ訴願ヲ許スノ外別ニ訴願裁決ノ手續ニ關スル法律ナク其ノ法律ニ  
 基ツク人民ノ權利ニ關係スルモノハ行政裁判法第五條ニ於テ先訴  
 願ヲ經由シタルノ後ニ非サレハ行政裁判ヲ提起スルコトヲ許サル  
 ノ間接ノ結果トシテ必ス裁決ヲ與フルノ義務行政廳ニ在ルコトナ  
 レルヲミ。然ルニ普魯西ニ於テハ反對ノ主義ヲ取リ必ス訴願書ト下  
 級廳ノ答辯書トニ就キ嚴密ニ裁決ヲ付スルノ勞ヲ取ルトイヘル其  
 場合ヲ特ニ或ル法律ニ於テ訴願ヲ許シタル場合ヲミニ限レリ之ヲ訴  
 願ノ列記法ト云フ。外國ニ此ノ二例アリ以テ本邦ニ於テ訴願ヲ制  
 定スルニ當リ立法者ノ說ニ派三分レタリト云フ。自然ノ勢ナリトス  
 而シテ學者ノ說ハ訴願ノ概括ニスルヲ宜シトスト云テニ傾クトイヘ

百十八

百十九

凡既ニ市町村制ニ於テ列記ノ主義ヲ示シタル故ニキ又ハ他ニ理由アリ  
 テニキ本邦訴願法ハ列記ト概括トノ中間ニ於テ一種特別ノ制ヲ取  
 リタリ即チ大体ハ列記ノ主義ヲ取リカカテ普魯西ニ於テハ如ク各科  
 ノ行政ニ關スル他ノ法律ニ於テ殊ニ訴願ヲ許スヘキ場合ヲ示スノ法  
 ニ依ラス直ニ訴願法ノ一條ヲ以テ數科ノ行政事務ヲ舉ク各科ノ範圍  
 内ニ於テ概括的ニ訴願ヲ許シタル是レナリ即チ同法第一條ニ曰ク  
 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ  
 付之ヲ提起スルコトヲ得

- 一 租稅及手数料ノ賦課ニ關スル事件
- 二 租稅滯納處分ニ關スル事件
- 三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
- 四 水利及土木ニ關スル事件



五 土地ノ官民有區分ニ關スル事件

六 地方警察ニ關スル事件

其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル場合。

此ノ如キハ稱シテ列記的概括法ト云フヘキカ、但シ普魯西ニ於テモ地方警察ノ一科ノミニ關シテハ其ノ範圍内ニ於テ一般ニ訴願ヲ許スノ制ヲ取レリ。サテ本邦ニ於テハ訴願裁決ノ爲ニ如何ナル手續ヲ定メタリヤト云フニ是レ甚タ綿密ナルモノニシテ殆ト他國ニ類ヲ見サル所ナリ、即チ同法ノ第五條乃至第十七條ノ現程大畧左ノ如シ。訴願ハ文章ヲ以テ之ヲ提起スヘシ、訴願書ノ侮辱誹毀ニ涉ルモノハ之ヲ受理セス(第五條)。訴願書ハ其ノ不服ノ要理由要求訴願ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ、訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ、並下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其ノ裁決書ヲ添スヘシ(第六條)。

七十三

七十三

多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ其内ヨリ三名以下ノ惣代人ヲ選ビ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ証明スヘシ、法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其ノ名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得(第七條)。行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス、行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス、行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得(第八條)。法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス、其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ(第九條)。訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得郵便遞送ノ日



數ハ第八條ノ訴願期限内ニ算入セス(第十條)。第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以内ニ辨明書及必要文書ヲ添へ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ。第二條第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以内ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ。第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦第二項ノ例ニ依ルヘシ(第十一條)。

訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規定アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其ノ職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得(第十二條)。

訴願ハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得(第十三條)。

訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ(第十四條)。

訴願ノ裁決書ハ其ノ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ(第十五條)。

上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス(第十六條)。

訴願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規則ニ依ル(第十七條)。

○行政訴訟及訴願ト請願トノ關係。憲法第卅條ニ依リ日本臣民ハ請願ノ權ヲ有ス而シテ同條ニ於テ之ヲ注解シタルカ如ク請願ハ天皇陛下及帝國議會ニ對シ之ヲ呈出スルコトヲ得ルノ外行政廳ニ對シテモ之ヲ呈出シ得ヘキ所ナリ。故ニ次ニ行政廳ニ呈出スル人民ノ故障ノ如何ナルモノハ訴願ニシテ如何ナルモノハ請願ナリヤヲ究定セサル可カラス。前ニ述ヘタル如ク訴願ハ既ニ事實トシテ存在スル不當ノ處分ニ對シテ爲スコトニシテ請願ハ未タ存在セザル利益ヲ新ニ得ント願望スル場合ニ於テ爲スヘキコトナリ。故ニ多クテ學者ハ訴願ハ既



往ノ處分ニ對シ、請願ハ將來ノ處分ニ對スト説ケリ而シテ請願ハ元來之ヲ爲スモ爲サ、ルモ全ク行政廳ノ職權内ニ在ルコトヲ下ヨリ推シテ願望スルナレハ權利トシテ其採用ヲ請求スルヲ得ス又行政廳ニ裁決ノ義務ナシ唯タ聽届ト否トノ指令ヲ爲スヘキノミ。斯ク大体ニ於テ請願訴願ノ區別ハ明ナレトモ普魯西境太利ニ在テハ往々名稱ノ上ニ於テ訴願ト請願トヲ區別セズ孰レモ訴願<sup>ベシウエルデ</sup>ト稱シ、一定ノ正式ニ依リ裁決スル<sup>ベシウエルデ</sup>ヲ有式訴願ト呼ビ其ノ他ヲ無式訴願ト呼ヘリ、其ノ有式訴願ハ即チ我カ訴願法ノ所謂訴願<sup>ゴシテ</sup>其ノ無式訴願ハ則チ我カ所謂請願ナリ、蓋シ裁決ノ定式ナキヲ以テ之ヲ無式ト云フナリ。又或ハ我カ所謂請願ヲ訴願ト云ヒテ我カ所謂訴願ヲ權利訴願ト云フモノアリ。

茲ニ最モ注意スヘキハ我カ明治十五年十二月第五十八號布告ノ請願

規則ニ於テ謂フ所ノ請願ハ憲法ニ於テ謂フ所ノ請願ト符合セス却テ訴願ニ近キモノナルコト是レナリ、即チ同規則ノ第一條ニ「人民各自ノ利害ニ關シ行政廳ノ處分ヲ請願セントスル者ハ左ノ條規ニ依ルヘシトアレト若、眞ノ請願ヲランニハ其ノ事件ハ行政廳ノ處分ニミニ限ル可カラス宮内省ニモ呈出スルコトヲ許スヘシ、又人民各自ノ利害ヲ主意トスルモノトミニ限ル可カラス、公共ノ利害ニ付キテモ請願スルコトヲ許スヘシ。又其第十條ニ「太政官ニ於テ請願ヲ許可スルトキハ主務所ニ付シテ處分セシムヘシトアレトモ眞ノ請願ニハ固ヨリ裁可ト云フコトナシ。又其第十二條ニ「請願ヲ名トシテ行政處分ヲ拒ムコトヲ得ストアルモ今日各國ノ訴願ニ付キ見ル所ノ規程ニシテ請願ニ付キテハ無論ノコトナリ。又同第十九條ニ於テ請願書ヲ新聞紙其ノ他ノ文書ヲ以テ公行スルヲ禁スル等モ眞ノ請願ニハ有ルマシキコト



ナリ。此等ノ理田アルヲ以テ今回訴願法ヲ發布スルト同時ニ其ノ第十九條ヲ以テ請願規則ヲ廢止シ、同第二十一條ニ左ノ如ク明言シタリ、

曰、  
「行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在ラス」ト  
是ニ於テ訴願ト請願ノ差別判然シ請願ハ訴願ヲ許シタル事件ニ限ラス其ノ他ノ事件ニ就キテモ爲スコトヲ得ヘク、又訴願ノ等次ヲ履ムコトヲ用ヰス、訴願ノ方式ニ依ルヲ用ヰサルニ對シ行政廳ハ唯々指令ノ義務アルノミ裁決ノ義務アルコト無キナリ。

○行政裁判所管轄 次ニ特ニ行政裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ト通常裁判所ノ管轄ニ屬スル事件トノ限界ヲ明ニスルコト緊要ナリ。行政裁判ニ屬スヘキ事件ノ大体ノ性質ハ憲法ノ正條ニ於テ行政官廳ハ違法、處分、依リ、權利、損害、ヲ、スル、ハ、訴訟ト云ヘルニテ明

ナリ。但シ此ノ点ニ就キ注意スヘキハ、本文ニ違法ト云フハ獨リ法律ノ正條ニ違フモノヲ云フノミナラズ、行政上臣民ニ對シ法律同様ノ効力ヲ有スル命令ニ違フモノヲモ含蓄スルコト是レナリ即チ違法ノ原語ハ「レセツ、ウイドリヒ」ニシテ「レヒト」ハ權利ヲ指シ法律ヲ指スニ非ス法律ヲ指スナレハ「ヂセツ、ウイドリヒ」ト云フヘシ、サレハ違法トハ總ヘテ權利ヲ畫定スル所以ノ者タル例規ニ違背スルヲ云フナリ。是レ既ニ普魯西ニ於テ取ル所ノ解釋ニシテ埃太利行政裁判法ノ理由書ニ明言スル所ナリ。又本邦ニ於テハ法律ヲミニ限ラス命令ニ違背スルノ處分ニシテ權利ヲ損害シタルモノニ對シテモ行政訴訟ノ提起ヲ許サ、ル可カラサル所以ノ理由外國ニ於テヨリモ一層の切ナルモノアリ。其ノ故ハ外國ニ於テハ法律存セザル事件ニ就キ行政命令ヲ發スルコトヲ得ス命令ハ、常ニ(緊急命令ノ外ハ)法律執行ノ命令ナルヲ以テ行政



權ニ對スル臣民ノ權利義務ハ結局法律ノミニ依リテ定マルト雖本邦ニ於テハ憲法第九條ニ依リ法律ノ曠缺ヲ補フニ命令ヲ以テシ憲法ニ於テ特ニ法律ノ正條ニ依ルヲ要セサル事件ニ關シテハ獨立ノ命令ヲ以テ臣民ノ權利義務ヲ畫定スルコト尙ホ多カルヘク此等ニ就キ全ク行政裁判ヲ許サ、ルハ不當ノコトタレハナリ。例ヘハ營業免許ノ如キ、漁業狩獵ニ關スル權利義務ノ如キ、山林農桑ニ關スル權利義務ノ如キ、向後ニ於テモ命令ニ依リ規定スヘキモノ尙ホ多シ而シテ法律ニ依ラスシテ命令ニ依ルニ於テハ尙ホサテ行政訴訟ヲ許スニ非サレハ公平ヲ失スルノ恐大ナリトス。是ヲ以テ憲法義解ニ於テモ違法處分ト云フ中ニ「法律ニ違ヒ又ハ職權ヲ越エ臣民ノ權利ヲ傷害スル場合ヲ含メタリ、蓋シ職權ハ法律并ニ命令ニ依リ定マルモノナルコト言フ候タス之ヲ要スルニ民事ニ於テモ例ヘハ商業上ノ權利義務ハ商法ノ範圍

内ニ於ケル行政命令ニ依リ定マルコトアリ、刑事ニ於テモ例ヘハ衛生上ノ義務違反即チ犯罪ハ規則即チ行政命令ニ依リ定マルコト不詳如ク、就中國家ノ行政事務ニ關スル臣民ノ權利義務ニ至リテハ命令ニ依リ定マルモノ頗ル多キコト日本ニ於テ公法ヲ研究スルモノ常ニ記憶スヘキ所ナリ、權利ハ必ス法律ニ依リ定マルトスル佛國ノ法理ヲ以テ日本現行ノ憲法及憲法ノ結果タル法令ヲ解セントスルホキハ誤マルコト多シ。サレハ行政裁判法第十五條及訴願法第一條ニ左列如ク規定シタリ。

「行政裁判所ハ法律勅令ニ依リ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判ス」

「訴願ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲グル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ得（一）ヨリ六マテ畧其他法律勅令ニ於テ特ニ



訴願ヲ許シタル事件

次ニ行政官廳ト云フノ意義ヲ確定セシニ第一宮内省帝國議會及司法官廳ヲ除クハ勿論ナレモ司法省ハ尙ホ行政官廳ニ屬ス、故ニ例ヘハ司法ニ於テ爲シタル退隱料ノ處分ニ就キテハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ベシ。第二ニ内閣ハ上述ノ如ク國務ノ官房ニシテ行政事務ノ官司ニ非ズ、故ニ行政權ノ機關ナレトモ行政官廳ニハ非ズ、今内閣ニ隸屬スル諸司ノ中ニテ賞勳局及恩給局ノ職務ハ一個人ニ關係スルモノナラト雖是レ亦大權施行ノ官司ニシテ行政官廳ト云フ中ニ包含セズ、故ニ鐵道局ノ管轄ヲ移シテ後ハ行政裁判法ノ第十七條ニ内閣直轄官廳ト云フハ既ニ空文ニ屬シ後ニ發布セラレタル訴願ニハ此ノ字無シ、但シ恩給ニ關スル行政裁判ハ官吏恩給法ニ規定スル所ニシテ一種特別ノモノナラトシテ第三ニ地方自治ノ團體モ行政ニ關スルモノナレト其ノ

行政機關ハ行政官廳ト云フ中ニ包含スルヤトノ問題ニ關シテハ是レ憲法ニ於テ行政官廳ト云フ中ニハ包含セスト答ヘサルヲ得ズ、即チ憲法ニ於テハ國ノ行政機關ノ外ニ自治ノ機關スルヲ認メサルナリ。然レモ既ニ別ノ法律ヲ以テ府縣郡ニ幾分ノ自治權ヲ與ヘ且市町村ヲ以テ純然タル自治團體ト爲シタリ而シテ其ノ自治事務ノ範圍ニ於ケル行政裁判及訴願ノ條規ハ府縣制郡制町村制ヲ以テ直ニ之ヲ定メタリトイヘモ自治ノ機關即チ府縣郡市參事會及市町村長等ニ國ノ行政ヲ委任スル場合ニ於テハ尙ホ行政裁判法及訴願法ノ規程ヲ埃ツモノ多カリキ、是ヲ以テ此ノ二法ニ於テハ官ノ字ヲ省キ行政廳ト云ヒテ參事會及ヒ市町村役場ヲ包含セシメタルナリ。憲法第六十一條ノ本文ヲ精査スルニ行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ハ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判



所ノ裁判ニ屬ス下積極的ニ正面ヨリ言ハス云々ノ訴訟ニシテ行政  
 裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在  
 ラスト消極的ニ裏面ヨリ言ヘリ。故ニ此ノ文勢ヲ以テ推ストキハ行  
 政上ノ違法處分ニ由ル權利傷害ノ訴訟ハ必スシモ皆行政裁判ノ管轄  
 ニ屬スルニ非スシテ唯々行政裁判法ニ於テ特ニ同裁判ノ管轄ニ歸シ  
 タル一部分ノミ其ノ管轄ニ屬シ其ノ他ノ部分ハ假令行政處分ニ關ス  
 ル事件タリトモ尙ホ司法裁判ニ屬ストノ裏面ノ意義ヲ生スルコト明  
 ナリ。然レモ又翻テ司法裁判ノ一方ヲ見レバ各裁判所ヲ以テ其ノ管  
 轄區域内ノ一個人又ハ法人ニ關スル事件ヲ裁判セシムルニ而シテ  
 官廳ハ國家ノ行政權ヲ使用スルノ上ヨリ論スルハ法律上ハ法人ト  
 認ムヘキモノニ非サルヲ以テ特ニ法律ニ於テ指定スルニ非サレハ司  
 法裁判ニ於テ行政事件ヲ裁判スルノ權利ナキコト是レ今日ノ情況ナ  
 リ。

明治二十三年法律第十號ニハ市町村制實施以前區戶長ヲ處分ニ關シ  
 市町村長ニ對スル行政訴訟并同制實施後ニ係ル市町村長ニ對スル行  
 政訴訟ハ從前郡區戶長ニ對スル事件ニ準シ始審裁判所ニ於テ取扱  
 ヘシ但明治二十二年法律第十六號ヲ以テ指定シタル場合ハ此ノ限ニ  
 在ラストアリ。

茲ニ最モ緊要ナル一点ナルハ他無シ行政官廳ハ處分ト云フニ存スル  
 精密ナル國法上ノ意義是レナリ而シテ此ノ意義ヲ知ラシニハ先ツ之  
 ヲ行政官廳ノ民事上ノ行為ニ區別シ次ニ之ヲ行政官吏ノ違法ノ行為  
 下區別セサル可カラズ。第一ニ行政官廳トイヘモ或ル場合ニ於テハ  
 他ノ一個人又ハ法人ニ對シ民事上ノ契約ヲ爲セリ例ニハ工事請負ノ  
 契約ヲ爲ス場合ノ如シ此等ハ行政官廳カ一個人ノ資格ヲ以テスル所



ニシテ之ヲ行政官廳ノ處分ト云フ可カラズ、何トナレハ是レ國家行政  
權ノ使用ニ屬スルコトニ非サレハナリ、故ニ此等ハ民事ニ屬スルコト  
明ナリ、而シテ民事裁判所ノ管轄ハ一個人又ハ法人ノミニ及フヲ以テ  
又官廳ヲ公ノ法人ト看做シ之ヲ被告トスルカ又ハ其ノ或ル官吏ヲ被  
告トシテ起訴セサル可カラズ。凡ソ此ノ類ノ行爲ハ公然官廳ノ名ヲ  
以テ發スル命令達示ノ体裁ニ於テ之ヲ爲サ、ルカ故ニ通例ハ之ヲ眞  
シ行政處分ト識別スルコト難カラス。

然ルニ茲ニ重大ナル一事アルハ他無シ公然官廳ノ名ヲ以テ命令達示  
ノ体裁ヲ以テ爲シタル處分ニテモ之ニ依リ人民ニ加ヘタル損害ノ爲  
ニ賠償ヲ爲スノ一段ニ至リテハ尙ホ民事ニ移スヲ各國ノ慣例トスル  
是レナリ、其ノ故ハ損害賠償ハ違法ノ處分ニ依リ損害ヲ加ヘタルニ起  
ルモノニシテ行政裁判ハ其ノ違法ナルト否トシ裁判ストイヘ、既ニ

違法ナリト判決シタル以上ハ國家ハ違法ヲ爲スヘキ理由ナキニ依リ、  
其ノ處分ハ之ヲ官吏ノ一私人トシテノ所爲ト看做スノ外ナキニ至レ  
ハナリ。之ヲ以テ我カ行政裁判法ノ第十六條ニ於テモ「行政裁判所ハ  
損害要償ノ事件ヲ受理セス」ト規定シタリ、但シ眞ノ損害ナルヤ否ハ行  
政裁判所ニ於テ判決スルモ既ニ損害ナリト定マリタル上ニテ賠償ノ  
金額等ヲ定ムルハ之ヲ民事ニ移スノ義ナリ。故ニ行政處分ニ依リ損  
害ヲ受ケタリトスルモノハ先ツ行政裁判所ニ出訴シテ其ノ違法ナル  
ノ判決ヲ受ケ、此ノ判決ヲ證據トシテ民事裁判所ニ向ヒ要償ノ訴訟ヲ  
提起スルヲ順序トス。  
次ニ公然官廳ノ名ヲ以テセル處分トイヘ、其ノ實ハ官吏ノ私利ノ爲  
ニセルモノナルコト明白ナル場合ハ始ヨリ行政裁判ヲ經ルニ及ハス  
直ニ之ヲ刑事ノ手續ニ依リ告訴スルコトヲ得ヘシ、何トナレハ是レ行



政官廳ノ處分ナリト虚リテ私利ヲ營ムモノナレハ實ハニ私人ノ有罪  
 ノ行爲タレハナリ。但シ職權濫用ヲ罪スルノ法規ハ既ニ刑法中之  
 存ストイヘモ官吏ヲシテ損害賠償ノ責ニ任セシムルノ法規ハ未タ存  
 在セズ、普魯西ニ行テハ行政編成法第三百三十一條アリ、而シテ違法ナリ  
 トイヘモ職務上止ムヲ得サル場合ニ出テタルニ於テハ法律ヲ定ムル  
 所ノ制限内ニ於テ國家モ其ノ責ノ幾分ヲ負擔スルヲ例キタカキテ  
 理論上ヨリ行政裁判ヲ民事及刑事裁判トシ區別ヲ論ズルハ甚ダ易シ  
 小雖亦實際ニ至リテハ格段ナル場合ニ於テ司法裁判ニ屬スル行政  
 裁判ニ屬スルヤヲ決定シ難キモ多シ。例ヘハ鑛業借區ノ事ノ如キ  
 モ是レ一方ヨリ見レハ農商務ノ行政處分ニシテ他ノ一方ヨリ見レハ  
 鑛山局ハ一個人ノ契約ナリ。又官有財産貸付拂下ノ如キ、恩給  
 金支給ノ事ノ如キ之ヲ民事トスルニモ理由アリ、又行政事件トスルニ

モ理由アリ。故ニ本邦ニ於テハ行政裁判ニ屬スヘキ事件ヲ一般ニ提  
 定セズ、格段ナル法律勅令ニ於テ特ニ行政裁判ニ屬セシムル事ヲ  
 ニ限ルノ制ヲ取リタリ。即チ行政裁判法第十五條ニ於テ行政裁判所  
 ハ法律勅令ニ依リ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判ストアリ  
 テ鑛業借區ニ係ル訴訟ハ鑛業條例廿三年法律 第百十七號ニ於テ其ノ行政裁判ニ  
 屬スル場合ヲ示シ、恩給金支給ニ關スル訴訟ハ官吏恩給法廿三年法律 第百三號  
 ニ於テ其ノ行政裁判ニ屬スル場合ヲ示シ、官有財産貸付拂下ニ關スル  
 訴訟ハ他日官有財産法制定時ニ於テ其ノ管轄ヲ定ムル要ス。此  
 ノ如ク各事件ニ對スル法律勅令ノ規定ニ讓ルチ行政裁判ノ歴記法ト  
 曰フナリ。一歴記法ヲ取ルノ當否ニ付キテハ學者ノ論ニ派分セザ容  
 易ニ決シ難シト雖モ、其一ノ利益ニ事件ノ管轄ヲ付疑惑ヲ生ズル日ト  
 少キ事アリ。但關稅ヲ除外租稅ノ賦課法ニ對スル訴訟、租稅滯納處



分ニ關スル訴訟、水利及土工ニ關スル訴訟官有民地區分ニ對スル訴訟、營業免許ノ拒否及取消ニ關スル訴訟ハ廿三年十月十日ノ法律第百六號ヲ以テ一般ニ行政裁判ニ屬セシメ、法律勅令ニ反對ノ正條アル場合ソレヲ除クコト、シタリ。

斯迄成法ノ上ニ於テ行政裁判ト司法裁判トノ區域ハ判然スルモ尙ホ同一事件ニシテ或ル程度マテハ行政裁判ニ屬シ此ノ程度ヲ越スレバ民事裁判ニ移ルコト彼ノ損害賠償ノ事ノ如キナキヲ保テス、是ヲ以テ司法裁判ト行政裁判トノ間ニ起ル權限ノ爭議ヲ裁決スル爲ニ別ニ權限裁判所ヲ置クコト、セリ、即チ行政裁判法第廿條ニ曰、

行政裁判所ハ其權限ニ關シテハ自ラ之ヲ裁決ス

行政裁判所ト通常裁判所又ハ特別裁判所トノ間ニ起ル權限ノ爭議ハ權限裁判所ニ於テ之ヲ裁決ス

又同第四十五條附則ニ曰

第廿條第二項ノ權限爭議ハ權限裁判所ヲ設ケルヤテノ間樞密院ニ於テ之ヲ裁定ス

裁定ノ手續ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

但シ右第二十條ノ第一項ニ於テ自ラ其ノ權限ヲ裁決ストハ何ノ義ソト云フニ是レ即チ普通行政廳ト行政裁判所トノ間ニ權限ノ争ヒヲ生シタル場合ニ對スル規定ナリ。例ヘハ事件ニ就キ行政廳ハ其ノ全權ヲ以テ處理スルコトヲ得ベキ所ナレハ裁判ヲ受ル限ニ在ラスト云ヒ、行政裁判所ハ是レ裁判事件ナリト主張スル場合ニ於テ若双方トモニ合議ノ裁判所ナランニハ兩者ノ上ニ立ツ裁判所ヲ設ケテ其ノ裁決ニ付スヘキナリト雖此ノ場合ニ於テ一方ハ裁判所ニシテ一方ハ行政廳ナリ、而シテ權限ノ如何ハ一ノ法律上ノ問題ナリ、隨テ之ニ關シテハ裁



判所主張スル所ヲ以テ行政廳ノ言フ所當リモ重シトスルハ公平  
 次第チルヲ以テ行政裁判所ヲ自ラ裁決スル所ニ從フモノナリ。普魯  
 西行政裁判法第八十三條ハ此ノ主義ヲ取リ又或ル國ニ於テハ行政裁  
 判所中ニ於テ之カ爲ニ特別ノ會議ヲ組織セリ。權限裁判所ハ大審院  
 ニ併置スルモノハ壞太利ナリ。又或ル國ニ於テハ行政裁判所ハ大審院  
 茲ニ行政裁判ノ事件ト爲ルニキモノチ大別スルニキハ先之ヲ(甲)個人  
 人ニ關スルモノ(乙)官吏ニ關スルモノ(丙)公ノ法人特ニ自治体ニ關スル  
 モノノ三類ニ分ツク各項又數種アリ、左ノ如シ。又或ル國ニ於テハ  
 (甲)個人ノ權利ニ關スルモノ、中左ノ二種アリ。  
 (A)關係ノ個人ニ於テ或ル權利又ハ公權ノ爲ニ必要ナル或ル資格ヲ  
 有スル否トニ關スルモノ、即チ國民權、公民權、市町村住民權、市町村公  
 民權、自治事務ニ關スル選舉權、表決權、其他水利組合、學事組合等ニ對ス

ル權利資格ノ有無ヲ決スルモノ是レナリ。此ノ類ノ訴訟ヲ確定事件  
 ト云フ、而シテ凡此等ノ權利又ハ資格ノ認定ニ對シ公權上利害ニ關ス  
 ル所及ル者何人トイハレ原告ノ地位ニ立ツコトヲ得ヘシ。  
 (B)行政處分ニ關スルモノ。此ノ類ハ全体ノ行政裁判事件中最モ多數  
 ニ居リ其中數種ヲ別テ左ノ如シ。  
 (1)行政處分ニ對スル故障ノ訴訟。此ノ類ハ行政處分ニ對シ公權上利害  
 (イ)義務負擔ニ對スルモノ、論、促又ハ禁止ノ体裁ニ於テ一個人ニ或ル  
 義務ヲ負ハシムル行政處分ニ關スルモノ。例ハ公共ノ安寧幸福ノ  
 爲ニ個人ノ發動ヲ制限シテ之ニ一定ノ行爲又ハ不行爲ノ義務ヲ負  
 給シムモノハ警察事務ノ範圍ニ於テ最モ多シ。又一個人ヲ國家  
 以爲テ物品若ハ勞役ヲ呈供セシムルノ体裁ニ出ツルモノアリ。其ノ  
 物品賦課ノ場合ハ租稅、手數料、及徵發ニシテ財務、內務、軍務ノ行政ニ屬



シ、其ノ勞役賦課ノ場合ノ最モ重モナルハ兵役ノ義務トシ、之ニ次テ市町村名譽職及吏員ニ關スル義務ナリトス。此等ノ場合ニ於ケル行政訴訟ハ不當ニ負擔セシメラシタル義務ヲ脱セシコトヲ要求スルノ目的ニ出ツルモノナリ。

(丙) 權利剝奪ノ處分ニ對スルモノ。即チ一種ノ事業ニ關スル免許取消ノ体裁ニ出ツルモノ其ノ一部ニ在リ、既ニ一個人ノ身ニ屬スル權利ノ或ル者例ヘハ所有權、營業權、探礦權、特許權、國民權等ヲ剝奪スルノ体裁ニ出ツルモノ其ノ他ノ一部ニ居レリ。此ノ類ノ事件ハ農商遞信ノ行政ニ於テ最モ多シ而シテ訴訟ノ目的ハ不當ナル免許取消又ハ權利剝奪ノ場合ニ於テ其ノ回復又ハ賠償ヲ要求スルニ在リ。

(2) 行政廳ニ對スル處分ノ要求。即チ行政廳カ法律勅令ニ依リ爲スル義務アルコトヲ爲サハル場合ニ於テ關係ノ一個人ヨリ之ヲ催促スル

ノ場合ニシテ左ノ數種アリ

(イ) 權利附與ノ處分例ヘハ免狀下附檢定施行ノ處分ヲ要求スルノ類。

(ロ) 財産ニ關ル保護ノ處分例ヘハ補助金下附、収用シタル財産ニ對スル賠償金下附ノ處分ノ類。

乙官吏及其ノ他公務執行ノ任ニ在ル者モ亦行政訴訟ニ依リ其ノ權利ヲ保護スルコトヲ得ベシ、其ノ場合左ノ如シ。

(1) 官吏又ハ公務者トシテノ職權確定ノ訴訟。

(2) 官吏又ハ公務者トシテノ義務ニ係ル訴訟。其ノ重ナル者ハ懲戒處分ニ對スルノ故障トシ、國ノ官吏ノ懲戒事件ニ關シテハ別ニ懲戒裁判所ヲ設置スル國モアレド、地方自治ノ吏員ニ對スル懲戒事件ハ行政裁判ノ管轄ニ屬セシムルヲ常トシ、本邦モ亦其ノ制ヲ取レリ。

(3) 官吏又ハ公務者トシテノ權利ニ關ル訴訟。即チ俸給、手當、退隱料等



の支給ニ對スル訴訟ニシテ之ヲ司法裁判ニ屬セシムルモノアリ又行政裁判ニ屬セシムルモノアリ。

(2) 公法法人特ニ自治体タルノ資格境域等ニ關スル確定事件。例ヘテ救貧事務上ノ義務、公共營造物設立維持ニ關ル義務ヲ如ク。其ノ多クハ内務文部ノ行政ニ屬シ又或モノハ軍務行政ニ屬ス。處分ヲ爲シタル行政廳ヲ被告トシテ其場合アリ又當ニ負擔ノ歸スヘキ所ナリトスル他ノ自治体ヲ被告トスル場合モ有リ。

(3) 公法法人特ニ自治体ノ權利ニ關スル訴訟。是レニ二種アリ一ハ行政上ノ權利ニシテ他ハ財政上ノ權利ナリ。前者ノ例ハ上級自治体ニ代表者ヲ選出スルノ權、市町村條例ヲ制定スルノ權、手數料使用料ヲ徵

集スルノ權等ナリ。後者ノ例トスヘキハ國庫ノ補助ヲ受クルノ權ニシテ境界變更ノ時ニ於ケル財産處分ノ權モ亦此ノ部ニ屬ス。

○行政裁判所ノ組織。行政裁判所ノ組織ニ關シテハ先ツ之ヲ以テ司法裁判ノ一種トスル乎、將タ行政部内ノ設營トスル乎ヲ論定セサル可カラス。行政裁判所ニシテ若シ司法部内ノモノナランニハ、是レ所謂特別裁判所ニシテ、其ノ管轄事件ノ種類コソ通常裁判所ト異ナレ、實體ニ於テハ純然タル司法機關ナレハ其ノ組織モ亦嚴然タル裁判所ノ組織ナラサルヲ得ス、而シテ裁判官ノ如キモ行政機關ニ對シ完全ナル獨立ノ地位ニ立タンコトヲ要ス。若又然ラスシテ是レ行政機關ノ一部ニ外ナラス唯タ事務ノ手續ヲ異ニスルニ因リ機關ヲ別ニスルモノナランニハ、組織及人員ハ必スシモ嚴密ニ司法裁判ニ倣フヲ用井ス、唯タ事務執行ノ手續ノミ審判ノ手續ニ倣ヘハ可ナリ。



先ツ理論上ヨリ之ヲ云ヘハ學者ノ論ハ二派ニ分レタリ。ペール派ノ學者ニシテ行政事件モ司法事務ノ一部ナリトスルモノハ別ニ裁判所ヲ設クルヲ以テ費用及勢力ノ節減ノ爲ニスルニ過キスト云ヘリ、然レモ近時ニ於テ行政裁判所別立ノ必要ヲ主張スルモノハ皆此ノ說ヲ取ラス、其ノ論スル所ニ曰、行政裁判ヲ裁判ト云フハ其ノ主觀ノ權利ニ關スルニ因ル、即チ一個人又ハ法人ハ獨リ他ノ一個人又ハ法人ニ對シ權利義務ヲ有スルノミナラス、國家ノ行政ニ對シテモ之ヲ有シ、此ノ權利義務ノ有無廣狹ヲ審理スルハ是レ一ノ裁判作用ニ相違ナシ、然レモ元來行政ノ目的ハ一個人又ハ法人ノ權利保護ニ在ルニ非スシテ國家公共ノ安寧幸福ヲ計ルニ在リ、而シテ行政裁判ヲ行フノ主意ハ唯タ此ノ安寧幸福ノ爲ニ必要ナルヨリモ餘分ニ一個人又ハ法人ニ義務ヲ負ハシ又ハ其ノ權利ヲ減縮センコトヲ防止スルニ在リ、故ニ一般行政機關

ト其ノ組織ヲ異ニシ其ノ吏員ヲ別ニスヘキモ亦以テ司法裁判ニ屬セシムルニ足ラス司法裁判ハ一個人又ハ法人ノ權利保護ト國家禁令ノ勵行トヲ以テ專一ノ目的トスルモノナリト。  
又グナイスト派ノ論者ハ更ニ一步ヲ進メテ行政裁判ハ主觀權利具有ノ權利ノ保護ノ爲ニスルニ非スシテ行政事務ノ合法ニ行ハレンコトヲ監督スル所以ノ設計ナリ、故ニ大臣責任ノ制ト其ノ目的ヲ一ニスルモノナリ行政裁判ニシテ主觀權利ノ保護トナルコトアルモ是レ偶然ニシテ本來ノ目的ニ非スト、此ノ論ニ從ヘハ行政裁判ノ司法部外ニ在ルヘキハ一層明白ナルノミ。今假リニ行政裁判ノ目的ヲ以テ臣民ノ行政ニ對スル主權ノ權利ヲ保護スルニ在リトスルモ、其ノ權利ハ民事上ノ權利ノ如ク官廳ノ權ヲ以テ侵襲變更シ難キモノニ非ス、行政權ヲ以テ廢設伸縮シ得ヘキ所ニ屬ス、唯タ其ノ廢設伸縮ノ法律命令ニ依リ定



マレル正當ノ職權ヨリ出テノコトヲ要スルノミ。是ヲ以テ全ク行政  
部外ニ出ツル獨立ノ機關ニ於テ審理センコト難ク、行政自由ノ權力ヲ  
以テ拾捨變更スル所ヲ直ニ知得スルニ適シタル機關ヲ用ヰンコトヲ  
要ス。

ラハンドノ說ニ依レハ行政事務トハ唯ニ發令ト處分トヲ謂フノミニ  
非スシテ、行政事務ニ對スル臣民ノ愁訴ヲ聽キ權利義務ノ爭議ヲ調停  
スルモ其ノ重ナル官能ノ一ナリト。

學者ノ理論ハ暫ク措キ、此ノ点ニ關スル我カ憲法ノ主義ハ已ニ既ニ一  
定セリト謂フ可シ。我カ憲法第六十一條ニ於テハ行政裁判所ノ裁判  
ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラスト云ヒテ、  
其ハ司法權ノ外ナルコトヲ明ニシタリ。立憲共和國ニ於テノ如ク行  
政モ直ニ法律ニ依リ之ヲ行フヘキモノニシテ、苟モ臣民ノ權利義務ニ

關係スルモノハ其ノ事件ノ行政ニ屬スル場合トイヘニ必ス法律ヲ以  
テ規定スルニ於テハ行政權ヲシテ司法權ノ下ニ立タシムルヲ得ヘシ、  
然リトイヘニ立憲君主國ニ於テハ凡ソ憲法ニ依リ法律ヲ以テシ或ハ  
法律ノ委任ヲ受ケテセンコトヲ要スル事件ノ外ハ君主ノ命令ヲ以テ  
之ヲ規定スルコトヲ許セリ、又既ニ法律ノ存スル事件ニシテモ其ノ法  
律ニ準シ命令ヲ發スルノ權ヲ行政部ニ屬セシメタリ、而シテ行政部ニ  
シテ既ニ命令ヲ發スルノ權ヲ有スル上ハ其ノ命令ヲ執行センカ爲コ  
スル格段ナル處分裁決ノ合法ナルト否ト、即チ根本ノ法律命令ニ合ス  
ルト否トヲ裁定スルノ權モ亦必ス行政部ニ屬セサル可カラス、是レ即  
チ各立憲君主國ニ於テ行政裁判ヲ司法裁判ノ外ニ措クノ方向ヲ取レ  
ル所以ニシテ本邦憲法ニ於テハ此ノ原則ヲ斷然明揭スルニ至レル所  
以ナリ。就中本邦ニ於テハ憲法第九條ヲ以テ獨立命令權ヲ行政部ニ



屬セシメタルノ結果トシテ此ノ主義ヲ取ラサルヲ得サルニ至レルモ  
 ノトス。○憲法義解ニモ此ノ主義ヲ疏明シテ曰、  
 「若行政權ノ處置ニシテ司法權ノ監督ヲ受ケ裁判所ヲシテ行政ノ當否  
 ヲ判定取舍スルノ任ニ居ラシメハ即チ行政官ハ正ニ司法官ニ隸屬ス  
 ル者タルコトヲ免レス而シテ社會ノ便益ト有民ノ幸福ヲ便宜ニ經理  
 スルノ餘地ヲ失フヘキナリ行政官ノ措置ハ其ノ職務ニ依リ憲法上ノ  
 責任ヲ有シ從テ其措置ニ抗拒スル障害ヲ除去シ及其ノ措置ニ由リ起  
 ル所ノ訴訟ヲ裁定スルノ權ヲ有スヘキハ固ヨリ當然ニシテ若此ノ裁  
 定ノ權ヲ有セザルトキハ行政ノ効力ハ麻痺消燼シテ憲法上ノ責任ヲ  
 盡スニ由ナカルヘキナリ此レ司法裁判ノ外ニ行政裁判ノ設ヲ要スル  
 所以ノ一ナリ行政ノ處分ハ以テ公益ヲ保持セントス故ニ時アリテ公  
 益ノ爲ニ私益ヲ抂ルコトアルハ亦事宜ノ必要ニ出ツル者アリ而シテ

百十八

百十九

行政ノ事宜ハ司法官ノ通常慣熟セサル所ニシテ之ヲ其ノ判決ニ任ス  
 ルハ危道タルコトヲ免レス故ニ行政ノ訴訟ハ必行政ノ事務ニ密切練  
 達ナルノ人ヲ得テ以テ之ヲ聽理セサルコトヲ得ス此レ司法裁判ノ外  
 ニ行政裁判ノ設ヲ要スル所以ノ二ナリ但シ行政裁判所ノ構成ハ亦必  
 法律ヲ以テ之ヲ定ムルヲ要スルコト司法裁判所ト異ナルコトヲキナ  
 リ下。  
 以上義解ノ立論ニ連帶シテ茲ニ一言スヘキハ行政ノ責任ト行政裁判  
 トノ關係ナリ。共和主義ノ諸國特ニ北米合衆國ニ於テハ行政權ヲ以  
 テ司法權ノ下ニ置キ行政上違法ノ處分ハ司法裁判所ニ於テ之ヲ裁判  
 セリ故ニ其ノ違法處分ノ根本ハ命令ノ法律ニ違反セルニ在ル場合ニ  
 於テモ國務尙書ハ唯々裁判上ヨリ其ノ責任ニ任スヘキノミ國法上ノ  
 責任アルコトナシ。然ルニ立憲君主國ニ於テハ行政上ノ違法處分ハ



司法裁判ノ外ニ置クヲ以テ、若違法處分ノ由テ來タル所命令ノ法律ニ違反セルニ在ル場合ニ於テハ如何ト云フ一ノ問題ナリ。行政裁判所ハ唯タ格段ナル處分裁決ニ就キ違法ト否トヲ判斷スルノ權アレトモ命令其ノモノニ付キ違法合法ノ判斷ヲ爲スノ權ナシ。是ヲ以テ茲ニ行政事務ニ關スル一ノ法律アリテ、此ノ法律ニ於テ或ル場合ノ規程ヲ命令ニ委任シタリトセンニ、此ノ命令ノ以前ノ法律又ハ他ノ法律ニ違反シタル場合ニ於テ行政訴訟ヲ起スモノアルモ行政裁判所ハ唯タ其ノ命令ニ依リ裁判スヘク、其ノ事件ニ關シテハ此ノ命令ヲ以テ標準トスヘキヲ認メナカラ之ヲ越エテ直ニ法律ニ依リ裁判スルコトヲ得ス、何トナレハ命令ノ法律ニ背クハ大臣責任ノ事件ニシテ行政裁判ノ敢テ關スル所ニ非ス、是レ既ニ純然タル一ノ國務事件タレハナリ。行政裁判ヲ以テ司法權ノ作用ノ一部トスルト行政權ノ作用ノ一部トス

ルトノ間ニ上述ノ如キ事實ノ差違アルハ吾人ノ忘ル可カラサル所ナリトス。然レトモ此ノ点ニ關シテハ別ニ明文ノ有ルニ非サレハ他日ニ至リテ往々議論ノ生スヘキコトアリト信ス。行政裁判所ハ之ヲ行政部内ノモサテ本論ニ返リ之ヲ論センニ本邦ノ行政裁判所ハ之ヲ行政部内ノモトト看做スカ故ニ其ノ組織ハ必スシモ司法裁判ノ組織ヲ嚴密ニ摸倣セス、特ニ行政事務ノ官廳ニ對スル獨立ニ至リテハ之ヲ司法裁判所ニ比シテ稍缺クル所アリ、其ノ大略左ノ如シ。

行政裁判所ハ之ヲ東京ニ置ク(第一條) 行政裁判所ニ長官一人及評定官ヲ置ク評定官ノ員數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム、行政裁判所ニ書記ヲ置ク其員數及職務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(第二條) 長官ハ勅任トス評定官ハ勅任又ハ奏任トス、長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヨリ内閣



總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セラル、モノトス、書記ハ長官之ヲ判任ス  
 (第三條)長官及評定官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス、一、公然政  
 事ニ關係スルコト、二、政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ衆議院議  
 員府縣會市町村會ノ議員若クハ參事會員タルコト、三、兼官ノ場合ヲ除  
 ク外俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト、四、營業ヲ  
 營ミ其他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ムコト(第四條)是レ裁  
 判所構成法ノ第七十二條ニ準スルモノニシテ其ノ異ナル所ハ兼官ヲ  
 許シタルニ在リ、即チ本條ヲ以テ晴ニ兼官ヲ任シタル行政裁判所ノ政  
 府ニ對スル獨立完全ナラサル所以ナリ、埃及利行政裁判法第十條ニ於  
 テハ他ノ公職ヲ兼任スルコトヲ得スト定メタリ、又普魯西ニ於テハ行  
 政裁判所判事ヲ以テ他ノ公職ヲ兼勤スルコトヲ得ルモ、他ノ職ニ在ル  
 者判事ニ兼任スルコトヲ得セシメス。行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル

業務ト云フトキハ法律ヲ以テ禁シタルモノヲ除クカト云フニ然ラス、  
 法律ハ自然ニ裁判官ニ及フモ命令ハ及ハサルノ恐アルヲ以テ特ニ之  
 ヲ舉ゲタルナリ。  
 本條并ニ裁判所構成法ニ於テ政黨ノ黨ト爲ルコトヲ禁シタルハ現今  
 ノ法制ニ適當セス、蓋是レ政黨ト政社トヲ區別セサリシ時ノ文例ヲ因  
 習シタルモノナリ。政黨ト云フハ元來法律ノ目的ト爲シ得ヘキモノ  
 ニ非ス、是レ恰モ信仰ト一般人々主義ノ投合ヨリ起ル無形ノ關係ナル  
 ノミ、故ニ各國ノ法律ニ於テ曾テ政黨ナル語ヲ見ス、又我カ改正集會結  
 社法ニモ政社ト云ヒ、政黨ト言ハス、是レ唯タ政黨ヨリ起ル外形ノ發動  
 ナリテ法律ノ目的トシタルモノナリ。舊來政黨ヲ組織スルトキ黨員  
 名簿ヲ届出テシメタルハ、政社ト政黨トヲ混同シタルニ因ル。裁判官  
 ニ於テモ、或ハ心中自由ノ主義ヲ懷キ、又ハ保守ノ精神ヲ喜ヒ同主義同



精神ノ輩ト意氣相投スルコトアルヘシ、是レ如何ナル法律モ制スル能ハサル所ナリ。

又行政裁判所長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ因ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ退官、轉官、又ハ非職ヲ命セラル、コト無シ、其ノ兼任スル者ハ本官在職中前項ヲ適用ス、懲戒處分ノ法ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(第五條)是レ大体ノ主義ハ長官及評定官ヲ終身官ト爲スニ在ルモ兼官ノ者ハ其ノ本官ヲ免セラル、トキ長官又ハ評定官ノ職モ共ニ免セラル、コトアルナリ。長官及評定官身体若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルトキハ内閣總理大臣ハ行政裁判所總會ノ決議ニ因リ其ノ退職ヲ上奏スルコトヲ得(第六條)是レ裁判所構成法ノ第七十四條ニ準スルモノコシテ、其ノ勅命ヲ以テ退職セシムルハ司法裁判官ヲ待スルヨリモ一層丁重ナリ。長官ハ行政裁判所ノ事務

ヲ總理ス、長官故障アレハ評定官中官等最モ高キモノ代理ス、(第七條)長官ハ自ラ裁判長トナリ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得、部ヲ置クノ必要アルトキハ其ノ組組及事務分配ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル、(第八條)行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定ヲ併セ五人以上ノ列席合議ヲ要ス、但列席ノ人員ハ奇數ニ限ル、議決ハ過半數ニ依ル、(第九條)普通裁判ニ於ケル忌避及除斥ノ條項ハ行政裁判法ニモ亦之ヲ適用ス、(第十條)ヨリ第十二條マテ。行政訴訟ノ辨護人タルコトヲ得ルハ行政裁判所ノ認許シタル辨護士ニ限ル、(第十四條)但シ其ノ認許ハ各事件ニ付キ之ヲ爲スナリ。

○行政裁判所ノ訴訟手續 訴訟手續ハ大概民事訴訟法ノ原則ヲ準用シ、原被ノ對審、法廷ノ公開、參加訴訟、證據ノ事皆アリト雖、一方ハ行政廳ナルカ爲ニ普通民事ト異ナル所ハ(一)行政訴訟ノ文書ニ訴訟用印紙ヲ



帖用スルコトヲ要セサル(第四十二條第二項)ト(三)主務大臣ハ必要ト認  
ムル場合ニ於テハ公益ヲ辨護スル爲委員ヲ命シ審廷ニ差出スコトヲ  
得ル(第三十五條第一項)ト(三)行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモ  
ノヲ除ク外行政廳ノ處分又ハ裁決ノ權ヲ停止セサルト是ナリ、但行政  
及行政裁判所ハ其ノ職權ニ依リ又ハ原告ノ願ニ依リ必要ト認ムルト  
キハ其ノ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得(第二十三條)

### 第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ。

此ノ條ハ衆議院ニ所謂豫算先議權ナル者ヲ與フルノ効力アリテ普佛  
英等ニ憲法ニモアル所ナリ。學者ノ說ニ依レハ此ハ特權ヲ下院ニ與  
ヘタル事ノ起リハ中古英國ニ於テ庶民會議ヲ召集スル目的ノ法律ヲ  
議定セシムルニ在リシニ非スシテ王家ヨリ申シ出タセル租稅ヲ諸否  
スルニ在リタルニ因ルト云フ。即チ專ラ用金ヲ承諾セシムルノ目的

ヲ以テ召集スル所ナレハ先ツ之ニ其ノ案ヲ議定セシメタルモノニテ、  
貴族ニ至リテハ固ヨリ封建ノ例規ニ因リ王家ニ對スル一定ノ義務ア  
ルニ因リ租稅ノ討議ニ與フルヲ用非サル場合モ自ラ多カリシナラン。  
今我カ憲法ニ於テ此ノ原則ヲ取レルハ士族平民ハ納稅ノ負擔ニ重キ  
ヲ感スルヲ貴族豪家ニ非サルニ因ルト云フ。普通ノ解釋ナリ、即チ曰  
ク財政ニ關シテハ特ニ一般臣民即チ貴族豪家ヲ保護セサル可カラス、  
從テ其ノ議事ニ於テハ成ル可ク他ノ影響ヲ避クルヲ得セシメン事ヲ  
要スト雖モ、先ツ之ヲ貴族院ニ於テ討議セシムル片ハ衆議院ハ知ラス  
識ラス其ノ響影ヲ被ムルノ患アリ、是レ先議ノ權ヲ衆議院ニ歸スル所  
以ナリト、是レ一理アルノ論ナレト、余輩ハ更ニ他ノ理由ヲ發見セリ、即  
チ一個人ノ利益ヲ離レ、國家全体ノ利益トスル所ヲ主眼トシテ之ヲ立  
法上ニ代表スル者ハ貴族院ナレト、政府カ財政上ニ於テ國家全体ノ爲



ニ必要トスル所ハ既ニ第六十七條ヲ以テ動カシ難ク爲シ有ルカ故ニ豫算ノ討議ニ於テ殊サテ其ノ意見ヲ代表スル者ヲ要セサル是レナリ。論者ノ云フ如キ精神ヨリ推スルハ或ハ修正ニ至ルマテモ必ス下院ニ於テ先ニ爲スヘシト云フニ至ルノ疑アリ。貴族院ヲシテ先ニ原案ヲ議セシムルハ則チ衆議院ニ影響シテ其ノ議事ノ傾向ヲ誤マラシムルノ恐レアリトセンカ、或ル格段ナル修正ノ個條ヲ議スルニ於テモ亦同様ノ影響無シトセサルナリ。サレハ此ノ第六十五條ノ意味ハ只タ提出ノ順ヲ定ムルニ止マリテ、修正ハ兩院ヲシテ其ノ權ヲ同ウセシムル者タルヲ疑ナキモ他日其ノ精神上ヨリシテ或ハ貴族院ノ修正權ヲ疑義スル者出テサルヲ保セス。現ニ佛國ニ於テモ同様ノ個條アルカ爲ニ現行憲法制定以來年々此点ノニ關シ議論ヲ起サ、ルヲ無シト云フ

フ  
マカ  
ル  
ド  
ソ  
佛  
國  
憲  
法

然レモ佛國憲法第八條ハ一般ニ會計上ノ法律ハ前ニ衆議院ニ提出シテ議定セシムヘシトアルヲ以テ、其ノ係ル所甚々大ナレト、我カ六十五條ハ則チ然ラス、只ニ豫算ハ云云トアルヲ以テ貴族院ノ討議權ニ制限ニ附スル者ハ歲出歲入ノ組合セ方ノミニ關係シ、新稅及稅率變更、國債募集等第六十二條ニ準シ法律トシテ定ム可キ者ニ關シテハ貴族院モ衆議院ト一般、無論修正ノ權アリ、而シテ衆議院ハ先議ノ權ナク、提出ノ前後ハ一ニ政府ノ便宜ニ從フヘキヲ明白ナリ。英國ニ於テハ一切金圓ニ係ル法律案ニ至ルマテモ管ニ下院ニ先議セシムルノミナラス、又上院ヲシテ敢テ修正スルヲ得セシメサルヲ見テ、我邦下院ノ財政上ノ特權ヲ不足ニ思フ者モ或ハ有ラン。之ヲ不足ニ思ハサルモ、英國ノ會計制度ハ各國會計法中ノ最モ十分ナル權利ヲ庶民院ニ與フル者ナリトハ世間普通ノ觀念ナリ。然レモ其ノ實ヲ見



レハ決シテ然ラス、却テ其ノ行政權ノ便ヲ計ルノ大ナルヲ決シテ他國ノ比ニ非サルハ前條開述スル所ニ依テモ知ルヘシ、即チ第一ニ英國ニ於テハ像算ノ稱アリト雖、他國ニ於テスル如ク國家全体ノ歲出歲入ヲ年々一冊ノ表ト爲シテ一時ニ議院ニ提出スルヲ無ク、第二ニ永久ニ定マレル租稅ハ年々議院ニ問ハスシテ之ヲ徵收シ、第三ニ歲出ノ如キモ年々一定セル者ハ之ヲ再議セス、只タ一定シ難キ僅少ナル部分ノミヲ討議スルノ制ナリ、而シテ款項流用ノ如キモ大藏省ノ認可ヲ得テ之ヲ行ヒ後ニ承諾ヲ受クルヲトセリ。此ノ点ハ始メ獨乙ニテモ一般人民ノ誤解セシ所タルヲ以テグナイストハ度々ノ著述ニ於テ十分ニ之ヲ辨解シタリ。

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國

議會ノ協賛ヲ要セス

此ノ條以下四條ハ歲出豫算ノ中ニ一定セル款項ニシテ年々議院ノ協賛ヲ俟タズ確定セル者ヲ擧ケタリ、即チ前ニ曰フ國家豫算ノ歲出ニ屬スルノ諸款ナリ。

皇室經費ハ天皇ノ國家ノ元首トシテノ費用ニ充テシカ爲ニ國庫ヨリ奉呈スル所ヲ曰フ。天皇カ天皇トシテ代々所有シ給フ所ハ之ヲ世傳御料ト云ヒ普通所有者トシテ所有シ玉フ所ハ之ヲ皇室御料ト稱ス、是レ前者ハ元首ノ位ニ屬シ後者ハ私權上ノモノナレハ國家ノ豫算ニ載スル限ニ在ラス。

現在ノ定額トハ第六十三條ノ現行ノ租稅ト云フニ異ナリテ此ノ憲法制定ノ時ニ際シテノ定額ヲ云フ、即チ三百萬圓ナリ。將來ニ於テ宮城修繕トカ宮中大典トカニ依リ一時増額ヲ要スルトキハ豫備金ヲ以テ



之ニ充ツヘク又永年ニ増額ヲ要スルコト起ラハ議院ノ協賛ヲ以テ之ヲ定ムルナリ。此ノ一條ハ憲法ノ基石タル皇室ヲ堅固ニスルニ必要ナルコト言フ埃タス。宮内省ノ定額ハ此ノ内ニ屬ス故ニ年々ノ豫算ニハ宮内省ノ爲ニ欄ヲ設ケス。

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ス

○憲法上ノ大權 本條ハ近來最モ甚ク世上ノ議論ヲ惹起シタルモノニシテ此ノ後ニ於テモ仍ホ種々ノ議論アルヘシ。第一憲法上ノ大權ト云フコト分明ナラス而シテ憲法ノ規定スル所執レカ大權ノ施行ニ非サル無シト雖本條ニ謂フ所ハ統治權使行ノ諸法ニシテ帝國議會

ノ協賛ヲ要セス責任大臣ノ副署ヲ要セス又法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ニ依ルヲ要セサルモノヲ指スニ似タリ。今ヤ憲法ノ條項ニ就キ之ヲ枚擧セハ第十條ニ云フ文武官ノ官制及俸給ヲ定メ及之ヲ任免スル事第十一條ニ云フ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ムル事第十三條ニ云フ外國ト條約ヲ締結スル事及第十五條ニ云フ爵位榮典ヲ受クル事是レナリ故ニ此等ニ關スル費用ニシテ一旦經常費ト爲リタル者ハ本條ノ條件ニ從フヘキナリ。其ノ他特赦權戒嚴宣告權ノ如キハ費用ヲ要セス又第十一條第十三條ノ陸海軍ノ統帥ノ及開戰ノ費用ニ至リテハ是レ臨時ノ支出ニ屬スルヲ以テ本條ノ及フ限ニ非ス。然ルニ我カ政府ハ此ノ点ニ付キ議論ノ起ルヲ防止センカ爲ニ廿三年八月四日法律第五十七號ヲ以テ會計法補則ヲ發シ其ノ第一條ニ左ノ如ク規定シタリ曰明治二十三年度歳出豫算中左ノ費用ハ明治二十四年度ノ豫算



ニ於テ憲法第六十七條ニ規定シタル大權ニ基ケル既定ノ歳出トス

一 文武官ノ俸給及文官退官賜金

二 陸海軍軍事費憲兵費屯田兵費

三 賞勳年金及褒賞費

四 外國條約及約束ニ依レル支出

五 各廳ノ廳費及經常修繕費

○法律ノ結果ニ由リトハ法律ノ正條ニ歳出ノ額ヲ明示セストモ其ノ規定スル所ノ事務ヲ執行センカ爲ニハ必ス要スル所ノ費用ヲ云フ而シテ議會ハ始メ此ノ法律ヲ制定スルハ既ニ之ニ協賛シタルヲ以テ出費ニ付キ更ニ其ノ協賛ヲ求メサレハ正當ノ事トス。會計法補則ノ第二條ニ曰帝國議會開會前ニ發布セラレタル法會ニ基ケ左ノ費用ハ法律ノ結果ニ由ルノ歳出トス

一 帝國議會經費

二 裁判所并會計検査院經費

三 恩給扶助料罷役恤金及死傷手當

四 徴兵費

五 徴稅費 證券印紙切手類製造買戻押印費 鑑札製造費 所得稅調査委員手當 市町村ニ交付スル徴租費 滯納處分費 差押上物件買代

六 囚徒費

七 遞信事業及航路標識費

八 内外國難破船費

九 沖繩縣及小笠原島地方費

十 備荒儲蓄

十一 北海道拂下土地買上代



十二 恩賞及救助費

○法律上政府ノ義務ニ屬ストハ若シ之ヲ行政又ハ民事ノ裁判ニ付シ  
 タラシニハ則チ政府ノ義務トナルヘキ支出ヲ云フナリ而シテ第七十  
 六條ノ末項ニ於テ歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總  
 テ第六十七條ノ例ニ依ル下云ベルヨリ會計法附則ノ第三條ニハ左ノ  
 如ク規定シタリ。曰明治二十四年度歲出豫算ニ於テ左ノ費用ハ憲法  
 第七十六條第三項ニ規定シタル政府歲出上ノ義務トス

一 神社費

二 公債償還利子及拂手數料

三 既ニ定マレタル効力アル命令ニ依リ毎年各地方ニ付與スヘキ

公共工事費補助及警察費聯帶支辨金

四 沖繩縣諸縣費

五 既ニ定マレタル効力アル命令ニ依リ航運鐵道製造殖産ノ會社

及病院學校ニ付與スヘキ補助又ハ利子保證

六 雇外國人ノ俸給恩給及手當

七 法律上ノ賠償及訴訟費

八 諸拂戻金

九 國庫金取扱費

十 預金利子

十一 既約アル地所家屋借料

○政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ス  
 ト云フハ前ニ第四十六條ニ於テ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會  
 ノ協賛ヲ經ヘシト云フニ對スル一ノ制限ナリ即チ以上三種ノ歲出ハ  
 憲法ト法律トニ基クモノニシテ此ノ二者ハ豫算ヨリモ重キ効力アル



モノトスルナリ、義解ニ曰、豫算ヲ議スル者ハ憲法ト法律トニ準據シ、憲法上及法律上國家ノ制置ニ必要ナル資料ヲ給備スルヲ以テ當然ノ原則トセサル可カラス其ノ他前定ノ契約及民法上又ハ諸般ノ義務ハ均シク法律上ノ必要ヲ生スル者トス。政府ノ同意ヲクシテト云フニ注意スヘシ、即チ同意サヘアレハ廢除削減スルコトヲ得ルナリ。

又既定トハ一旦議會ノ協賛ヲ經テ經常費ト爲レルモノヲ云フナレハ以上ノ如キ大權ニ基クノ歳出タリトモ新置及増置ニ係ル分ハ必ス協賛ヲ經ンコトヲ要ス、一度協賛ヲ經タルトキハ次ノ年度以後ハ既定歳出ト成ルナリ。我カ憲法第六十七條ノ組織ハ政府ノ同意サヘアレハ減廢スルニトテ許スニ於テ英國ノ固定資本トモ相同シカラス、然レモ外國ノ憲法ニ於

テ近似ノ規定空ク無キニ非ス其重ナルモノ左ク如シ。

フロソニソイヒ憲法第七十三條ニ曰

豪族會議ハ國家ノ目的ヲ達スル爲ニ必要ナル費額ヲ承認スルハ權利義務ヲ有ス但シ官有地收入ノ剩餘及其ノ他ノ官有財産ヲ以テ支辨スルコト能ハサルトキニ限ル。殊ニ豪族會議ハ憲法上ヨリ生シタル義務ニ依リ國庫ニ就テ要求スルヲ得ヘキ支出ヲ拒ムコトヲ得ス。

オルデンブルヒ憲法第百八十七條ニ曰

議院ノ承諾ヲ受ルニ非サレハ諸税ノ賦課徵收スルコトヲ得ス又有効ニ國債及負債ヲ興スヲ得ス。議院ハ聯邦ノ義務及ヒ國ノ憲法ニ適スル政務ヲ執行シ殊ニ聯邦ノ法律又ハ國ノ法律又ハ私法上ノ義務ヨリ生スル支出ノ爲ニ必要ナル現行諸税ノ徵收ヲ拒ムコトヲ得



ス。

アルデンブルヒ憲法第二百三條ニ曰ク、  
 國會ハ政府ト協同シテ政務上ノ諸費目ヲ議決ス。歳入出豫算(通常四  
 ケ年ヲ以テ一會計年度トス)ヲ確定スルニハ政府ト國會トシ協同ヲ  
 要ス。此ノ協同ヲ經タル金額ノ之ニ對スル事項及目的ノ消滅セサル  
 間國會ノ承認ナクシテ永ク之ヲ増加スルコトヲ得ス。又政府ノ承認  
 ナクシテ永ク之ヲ減少スルコトヲ得ス。

索遜憲法第九十七條曰

國會ハ經常及臨時ノ國用ニ必要ナル金額ノ徵收ヲ議定スルヲ義務  
 アリトス。之ヲ爲ニ國會ハ經費ノ必要便宜及多寡ヲ察査シ且ツ此ニ  
 關シ政府ニ對シテ異議ヲ起シ並ニ費額ノ承認支辨ノ方法其ノ他一  
 定シ人員及物件ニ租稅ヲ賦課スル原則及割合ト其ノ期限及徵收ノ

方法トヲ議定スルノ權利ヲ有ス。

同第百條ニ曰

國會ハ審查ヲ終ヘタル後歲計豫算案ニ關シ意見ヲ國王ヨ呈出スヘ  
 シ。若其ノ意見ハ政府ノ要求定額ヲ減少シタルニ係ルハ詳細ノ理  
 由ヲ附シ且國家ノ目的ヲ誤ルコト無クシテ節減ヲ得ヘキ事物及方  
 法ヲ示明ヘシ。

同第百三條ニ曰

第百條ニ依リ國會ヨリ呈出スル意見及理由ハ政府ニ於テ更ニ熟慮  
 ヲ悉シ國ノ安寧福利ヲ破ラサルトキハ之ヲ參酌セサル可カラス。  
 政府其ノ意見ヲ採可セザル場合ニ於テ國會ハ政府ヲ報答ニ關シテ  
 再議ヲ開ク國會尙原案ヲ承認ヲ拒ムトキハ國王ハ一時ノ費用ニシ  
 テ既ニ其ノ目的ヲ達シタルモノヲ除キ國用支辨ノ爲國會閉場後勅